335-293.

11-382

獨立自尊

鎌田榮吉

明治
44. 9. 28
内交

序

獨立自尊主義を天下に提唱して終始一貫其の實踐躬行に盡された福澤先生が、殊に晩年に於て最も力説力行せられたのは、非常なる必要あつたからである。

維新後、舊社會から新社會に遷り變つた日本の社會に於ては、獨立自尊の精神を喚起しなければ、社會の綱紀を維持することが出來ない。封建時代の社會に於ては、社會の力を以て個人を束縛すると云ふことが頗る强かつた。其束縛力の取去られたのが新日本、維新以後の日本である。然るに此外部の制裁の取れた社會にして、語を換へて言ふならば自由を得たる人間にして、其自由を得た儘て何等之を制裁する者が無ければ放縱に流れるのは數に於て免れない。自由を得て自尊自制の觀念が無かつたならば、其社會は必ずや墮落するに相違ない。從來先祖代々同一の場所に住居し同一の

職業に從事し同一の階級に固着して少しも移動せず、信仰も迷信も口碑も傳說も習慣も風俗も變更されぬ小天地の內に蹋躊して嚴密に其週圍の耳目に依て監視せられつゝありしものが、開國維新の大天地に出てゝ橫行濶步する事となり、自由に住所を轉換し、自由に考へ、自由に行ふやうになつたならば、其社會にはそれを牽束する所のものが必要てある。其牽束力は何處に在るかと云ふと、それは銘々の頭の中に發生するの外はない。それはどう云ふものであるかと云ふと、在來の語を以て言ふならば君子は其獨を愼むと云ふことである。或は廉恥を知ると云ふやうなことであるが、併し是等は頗る消極的て、而かも僅かに其半面に過ぎない語である、尙其以上積極的に自ら自己の品性を尊敬し、而して他人に雷同し依賴することなく、善と信ずることは進んて之を行ひ、惡と思ふことは斷じて之を避けると云ふことが必要てある。縱令長上の命なくとも又强者の壓迫なくとも自發的に之を敢行し、自制的に之を愼み、飽迄己れの

所信を貫くと云ふ精神は自由を得た所の人には最も必要てある。卽ち今の日本の社會の如く昔時の外部的の檢束が取れて、個人が自由を得たと云ふ時代に於ては、此內部的精神の發達は最も必要てある。他動的に操縱せられたものが其綱を解かれたならば更に自動的制御機を備へねばならぬは當然てある之を是れ獨立自尊と申すのてある、併し往々世人の云ふが如く、獨立自尊は個人主義と特別の關係を持つてゐない。尙更又社會主義とも特別の關係を持つてゐない。而して兩主義の孰れが行はるゝにしても此獨立自尊の精神が無かつたならば危險な事になると思ふ、

世人が個人主義と云ひ或は社會主義と云ふものと此獨立自尊との關係を明にして證かなければ、往々にして誤ることがある。又誤らるゝことがある。考のない人は獨立自尊主義は卽ち個人主義だと思うてゐるらしい。此等の人はまだ獨立自尊と個人主義の關係が分らぬのみか、個人主義の如何なるものなるかさへ能く分つて居ないやうてある。甚だしきに至つては獨立自

尊は個人主義なり、個人主義は利己主義なり、利己主義は我利々々肯者なりと解釋する。利己主義も單に字面に現はれた意義を考へると惡いやうであるが、學者の所謂利己を以て道德の起源とするもの、又は大我の發展ならば必らずしも惡いとは云へない。けれども世人の多くは個人主義が流行するので、電車に乘つた時自分の席を二人分も取つて了ふなどと極めてくだらない事を思つて居る。又社會主義は頭から危險思想なりと云ふ風に、政府の當局者も民間の人も解釋して居る。是等は何れも錯雜して居るやうである。

元來社會主義と言へば財產を共通にするとか、貧富を平均するとか云ふのであるが實際近來の說は先づ土地、機械其他の生產機關卽ち資本家の持て居る生產資本は皆國家又は公共體の公有にして仕舞ひ消費的の物資のみを私有にすると云ふ意味になつてゐる。併し是れは經濟的方面からの立言であつて政治上社會上一言で能く分るやうに槪括して言ふと、個人は手段にして社會は目的である。卽ち個人は社會の爲に成立つて居るのである。斯う云ふ社會本位のものを社會主義と謂ふのである。それから又社會は個人の爲に成立つたものである。卽ち個人の目的を達し、個人の發展を圖る爲に社會は成立つたものである。斯くの如く個人本位で、個人を目的として社會を手段とするのが個人主義である。

是等の點に付てよく區別を付け、政府が取締る上に於ても其邊の考を精密にし、又世間の人も其考を正確にして置かなければならぬ。殊に學問研究の學生などは其事に就て正確なる思想を持つて居ることが極めて肝要である。

そこで今此二つの主義の各々と獨立自尊主義との間に特別の關係はないと云つたが總體の關係は大にある。乃ち世の中が假に個人主義になるか、或は其反對の社會主義になつて來るか何方になると見ても、獨立自尊の精神が人々に無かつたならば危險である。個人主義も危險であれば、社會主義

も尚危險である。今少しく具體的に云へば政府の權限を縮少して個人の自營に任せ、各人の競爭奮鬪を促がし、人は自己の利を最もよく知るものと放任する、成るべく個人の自營力でやつて行く所の個人主義と、それから個人の經營は一切止めて了つて、何も彼も國家が經營して行かう、其極端は共同の勤勞に依つて共同の財産を持つ社會主義と此兩極端のどちらの組織にしたところでも獨立自尊は必要條件であると云ふことを能く認めて置かねばならぬ。

若し大に個人主義を行つて、總てのことを個人の競爭でやつて行くと云ふ世の中になつて、而して若し個人に獨立の精神、自尊の氣象と云ふものが無かつたならば、それこそ大變、其社會は忽ち混亂に陷り、放縱に流れる。純然たる優勝劣敗の作用が益々激しくなり、智慧ある者は智慧づく、力ある者は力づくで、弱い者、愚か者否な正直な者は滅びるより仕方が無い。無論此の社會に於ては各自の力づく智慧づくで行くと云ふことは進歩の爲

めに必要である。しかし其競爭には自ら人の道と云ふものがある。縱令政治の權力を以て束縛しないからと言つても、社會の制裁を以て律しないからと言つても、己れの力に任せて勝手のことをしてはならぬ。若し强い者、力のある者が勝手のことをする所謂不正競爭が濫りに行はるゝに至ると其社會は忽ち混亂の有樣に陷る外はない、此の如き社會に於て最も必要なるものは自尊の精神である。縱令抑へる者が無いからと言つても亂暴のことはしない、如何となれば其れは自己の人格を毀くるからである、他より警戒を加へずとも、人々自ら抑制し又權力を以て壓迫をせずとも、必ず人の踏むべき道を踏んで、弱いからと言つて虐ぐる、强いからと言つて諂ふるが如きは君子の恥づる所である、己れの人格を毀くる所以であると云ふ精神を養成しなければならぬ。故に獨立自尊の心なき個人主義の社會は混亂に陷ると斷言しても宜いと思ふ。

又其反對なる社會主義を以て世の中が成立つたと假定した所で如何である

か。例へば極端なる社會主義に依て財産も共有になり勞働も共同に行はれたとして。實際さう云ふ場合まで行くことはないけれども、若し社會主義の空想が假に實現されたとした所て、若し其國民に獨立自尊の精神が無かつたならば如何てあらう。自分は晝寢をして居つても隣りの正直者が働くから食ふには差支ないと言つて怠けて居る。すると遂には正直者の方でも正直に働らくのは馬鹿々々しいと云ふので自然と怠るやうになる、若し社會の人が總て順々にさうなつたら、其の社會は滅亡するより仕方が無い。獨立自尊の精神の伴はざる社會主義は矢張其社會の滅亡となるの道理である。尤も是れは架空の話て、何百年經つてもこの極端な思想は行はれる氣遣ひは無からう。併し現に今日の貧富の懸隔から起つて來る弊害を幾らか直す、或は自由競爭から起つて來る害惡を除かうと云ふことからして、所謂社會政策を行ひ、社會的立法を行ふと云ふやうなことを歐米ては頻りにやつて居る。日本も大分に其傾向が出て來て居る。既に彼の國には貧民救

助法、養老法、學童給食法、勞働紹介法、勞働者保險法、貧民住家法、曰く何曰く何と貧民保護の法案が續々現はれる、卽ち何歲以上の老人にして云々の者は國庫から一週間に幾らの金を給するとか、就學兒童の云々の者には學校て飯を食はすとか、國家又は市が勞働者の口入れ桂庵をやつて失職勞働者の仕事を見付ける、又スタンダート、ハウスと云ふものがあつて、生活の最低度の設備として寢室、食堂、臺所、居間と四間づゝの住室を設けて、これに貧民を借家させる。是等は社會政策の初步的計畫である。是れは社會主義者の意を和ぐる爲め、或は熱を冷す爲め、若くは個人主義的競爭から起つて來る缺陷を補ふ爲めか、何れにせよいろ〳〵斯う云ふ風のことをやつて居る。尤も斯う云ふ必要はまだ日本には餘り起らない又それだけの金も無いが、併し追々と流行の傾向だけは確かにある。偖て是が流行して來た曉に至て若し國民に獨立自尊の精神が薄弱てあつたならば、それは大變なことになる。老後の計はしなくても見殺にはしまい、又子供の

敎育は學校から辨當までも出してやつて呉れる、仕事が無くば尋ね出して呉れると云ふので無責任の極に陷り働き損の怠まけ得と云ふ事になる。故に斯る社會政策の行はれた曉には、益々獨立自尊の精神を以て自分の責任はどこまでも重んじ、公共の厄介となりて他人の汗を飲むのは恥かしい、それでは人に顔向がならぬと云ふ觀念が出來なくてはならぬ。その心無くして、只怠けて居るが得だと云ふことになると、其社會は次第に衰頽に陷り遂には滅亡の外はない。社會政策の制度が周密になればなる程人々の獨立自尊の精神が益々必要になることは自明の道理である。

然るに此獨立自尊の何物なるやを能く翫味せずに獨の字と自の字を見て、直に之を個人主義と速斷したり、新らしい事や嫌ひ事は何でも皆社會主義のやうに思ふたりするが、先づ大抵は獨立主義を個人主義と聯想して居る樣である。所が獨立自尊と云ふことは個人主義にも社會主義にも拘らず、苟も人間社會にある以上は無くてはならぬ大要件である。社會は孰れの組

織にならうとも、國家はどちらの主義に傾かうとも、世の中は如何に變遷しやうとも、此精神がある以上は、大きな間違は無い、又之が無くては孰れにしても立行かぬ。而して世の中はいろ〳〵に變遷するものである。其傾向は社會主義的になつたり、個人主義的になつたりするものであるが、獨立自尊の精神は如何なる主義の社會にも必要である。若し社會力が弱く、個人力の強い國に於て此精神が起ら無かつたならば、其國は混亂に陷りて遂に滅亡する。又社會力が強くて個人力が弱い國に於て此精神が起ら無かつたならば、社會は停滯不流に陷り、遂に滅亡に到る。語を換て言へば個人主義にして獨立自尊が無かつたならば、其社會は無政府的混亂に陷り。社會主義にして獨立自尊の精神が國民に無かつたならば酷烈なる專制の狀態に陷る。

素より吾々は中庸を貴んで何れの主義にも偏しない、社會の統一力と個人の自由力とは、恰も遠心力と求心力の關係である。之に依て太陽系統が順

序を案ずるが如く、人間社會も順調を得なければならぬ、我々大和民族は凡て日本の中心に向つて吸引され統一されて居なければならぬが、又其統一の下に各自の自由活動が無ければならぬ。譬へば茲に一つのコップがある、是は無機體である、又固まつて居るが、活動と云ふことは少しもない。又吾々の此腕も固まつて居るがよく活動する、生きて居る、なぜかと云ふと、此の腕を組織する所の細胞が皆生きて居るからである。而して此の無數の細胞は皆腕と云ふ形態の下に統一されて居る。卽ち有機體と無機體の相違である。人間社會も亦た有機體である以上は單に統一だけでは可けない、統一の範圍内に於ける分子の活動が無ければ可かぬ、そうして見ると個人主義だとか社會主義だとか云ふて一方に偏倚するのは誤つて居る。個人力と社會力とが能く調和を得、統一あり活動ある有機體が出來るのである。而して能く之を實現せしむるものは獨立自尊の外には無い。故に主義はどちらに成つても、人間社會には此精神がどこまでも必要條件である

と確信する。

本書は余が時々講述したる論說を相當の順序と部分けを立てゝ編纂せしものにして其趣旨は概ね獨立自尊の主義に據りたるものなれば書名をも獨立自尊と名けたのである今之を出版するに當り序に代へて獨立自尊と社會の變遷に就て敢て愚見を開陳する。

明治四十四年九月

著　者

獨立自尊目次

社會

一、世態は如何に變化せしか……一
二、實業家の猛省を望む……一四
三、商工界の統一……二四
四、將來の商業家……三三
五、海外に發展すべし……四四
六、國外奮鬪の勇を鼓すべし……六三
七、國民の公忠……七一
八、國格論……八二

一九、體力は國力なり……九五
二〇、人種的憎惡は永久ならず……一〇四
二一、日本人の長所と短所……一一八
二二、家族制度は國體に非ず……一三一
二三、文學の發達を圖るべし……一三七
二四、研究心を發揮すべし……一五三
二五、暗黑は恐怖を生ず……一六一
二六、歷史に於ける偉人の地位……一七一
二七、聖人と英雄……一八四
二八、青年就職談……一九四
二九、青年交際論……二〇五
三〇、煩悶……二一一
三一、利用厚生……二二三
三二、元の專制は社會衰頽の源……二三七
三三、病的成功謬的政策……二五三
三四、絕對と相對……二六四
三五、盛衰論の眞相……二七四
三六、福澤先生を追懷す……二九一
三七、河口師入藏に就ての所感……三一二

修養

一、肝要なる修養……三二五

二、積極的道德……三三三
三、思想の向上を圖れ……三四九
四、禮の說……三六〇
五、人格を重んずべし……三七三
六、人物と時勢の要……三八〇
七、人物養成論……三八八
八、工業と人格……三九九

政治、經濟

一、官僚政治の弊……四一九
二、二流の政想……四二三

三、外交官の養成……四三四
四、國の自尊と國粹保存……四四一
五、世界の大勢に後るべからず……四五六
六、戰時所感……四七〇
七、優勝國民の長所は士魂商才……四八〇
八、財政十一年計畫……四九二
九、行政整理と自尊……五〇三
一〇、日本に對する社會主義と個人主義……五一三
一一、理事者と監督者の關係……五二四

教育

一、年頭の義塾教育所感……五三一
二、學制頒布の精神……五四三
三、學校は獨立なるを要す……五五一
四、教育と行政の關係……五六一
五、戰後教育所感……五七一
六、國民教育の要件……五八五
七、體德兩育の結合……五九六
八、文部の方針と教科書事件……六〇一
九、讀書の活用……六一五
一〇、俗識と學識……六二三
一一、文勇武勇の辨……六二七
一二、少年の自尊……六三六
一三、腦稅を減ぜよ……六四五
一四、學生立身論……六六〇
一五、學生の今昔……六七三
一六、學問の將來……六八四
一七、商業教育に就て……六九四

獨立自尊目次終

獨立自尊

社會

鎌田榮吉著

一　世態は如何に變化せしか

明治四十一年の冬米艦は我國を訪問した。是は兩國の感情を融和して、世界の平和の爲に幾千の貢獻をなしたか分らぬ。此亞米利加が日本に最初來た時と今日との、五十五六年の間の變化といふものは、非常なもので、ある意味に於ては全く舊日本が毀れて新日本が作られた。予は最初の米國公

使タウンセンド・ハリスといふ人の紀行を讀んだが、いろ〳〵面白い事がある。例へば將軍に最初謁見する所などが書いてある。これはなか〳〵叶はなかつた、けれどもとう〳〵亞米利加の威力と云ふよりは、寧ろ軍艦の勢力を以て將軍に謁見することが出來た。又此謁見といふことが定つてからも、其儀式といふものは餘程むづかしいものである。それて先づ一通り敎へやうと云ふことを、時の外國奉行、今て云へば外務大臣てあるが、堀田備中守から申出た所が、いやそれには及ばぬと云ふことて、愈々謁見をした。所て堀田備中守がタウンセンド・ハリスに向つて、貴下には誠に祝着の至りてござる。將軍家に御謁見相叶ひ實に御仕合の事てあると云ふ意味の挨拶をした。所がタウンセンド・ハリスには甚だ分らない、幾度も同じ事を繰返すと、ハリスは口を開らき、どうも其御挨拶は私には一向其意を得ぬ。私は合衆國の使節として、國を代表して將軍家に見えたのであるから、別に仕合せとか御蔭とか考へる譯はない。一國の代表者が他の國の君

主に見ゆるは當然の事てあると答へた。けれども之が備中殿には薩張分らない。是も幾度か繰返して漸く諒解した。それから又斯う云ふ事がある、どうも壞夷論を主張する者が多くて、西洋人を斬殺さうと云ふやうな者が澤山ある。そこて幕府でも、どうか此亞米利加の使節には外出して貰ひたくない、是が危險て仕方がない、若しハリスに怪我てもあつた時には大變な事になるからと云ふので、痛く恐れて、どうか外に出ないやうにして貰ひたい。と云ふ事を頻に請求した所が、タウンセンド・ハリスはそれは肯かない。私は如何なる危險があつても外に出る、第一吾々歐羅巴人といふ者は、一日に必ず或時間は新鮮なる空氣を吸ふて運動すると云ふ習慣があるから、其習慣には背く譯に行かぬ。それはまだ私の事だからよいとしても、私は茲に合衆國の使節として來て居る。苟も一國の使節たる者は其國の代表者て、先づ第一に治外法權といふ一大特權を有つて居る位のものてある。然るに其在留國政府の要求に從て、自己の進退を檢束さるゝやうな惡例を

胎した時は、獨り合衆國のみならず、列國の國權にも關係する譯てある。此一儀は御免を蒙ると答へた。是などは實に立派な話て一の美談として宜いと思はれる。是は則ち主として幕府が世界の大勢に通じなかつた爲めてあるが、又一方から言へば亞米利加公使の方にも亦迂遠な事がある。或日曜の朝大雪て一面の銀世界、自分の旅館の座敷に武官書記官等三人て大聲てバイブルを讀上げた所が、誰も之を咎めに來る人もなければ、捕縛に來る人もなく首尾よく日曜の勤めを濟ませた。是は實に愉快な事、二百有餘年前に日本ては耶蘇教徒の大迫害が行はれ、天草騒動、或は島原騒動と云ふ者があつて、以來耶蘇教を奉ずる者は片端から磔刑に處すると云ふ恐ろしい日本に於て、今日吾々が堂々と高聲を放つて此耶蘇教の經典を讀むけれども、誰一人此處に亂入して來て、吾々を捕縛しやうと云ふ者が無いと人ふことは非常な話てある。是は則ち何てあるかと云ふと、二百年前とは違つて我合衆國の人口も今日は五千萬の多きに上り、堂々たる大國とな

りて吾々の後援となつて居るから、國禁の經文を唱へても日本政府も如何ともすることが出來ない、是は非常な愉快てあると言つて居る。是は誠に迂遠な話て、バイブルてあるか何てあるか分らぬ。又それを讀んだからと云つて、犬の遠吠の如き話て何てもない。故に是はタウンセンド・ハリスの方ても、大分考へ違ひしたやうに思ふ。さう云ふ事が澤山あるが、當時の事情に比較してペリー提督があの艦隊を率ゐて來た、今日に於ける雙方の間の交際は勿論、一般の國情の變遷進歩は實に驚くべきものてある。偖て此の進歩は進歩も進歩、非常な進歩非常な變化てある。畢竟舊い日本が破壞されて、新しい日本が起つたのてある。是は日本ばかりてない、近代に至りて世界各國とも皆此徑路を踏んて來たのてある。即ち舊い所の社會の仕組が破壞されて新組織の社會が作られたのてある。社會を近世化したのてある。此近世化したと云ふのは、唯坐して居る者が腰を掛ける樣になつた、西洋館が建つて西洋料理を食へると云ふのてはない。それは國々の

習慣に過ぎないが、昔日の日本は總て封建組織で、主從、君臣といふ關係を以て結合し、どうしても相離るゝことの出來ない樣な組織になつて居る。一方から言へば奴隷の持主と奴隷との關係で、唯名稱や形式が上品になつた許りである。其關係が決して武士のみでなく、親分子分とか云ふ如く全體の社會に廣がつて居るのみか、又家庭の中も同じく其組織が行はれて居つて、即ち子女妻孥は家長の所有品である。即ち家長と家長の隷屬者との間にも、同じく封建的主從關係が行はれて居つた。是れは家族制度として、今或一派の人は何時までも保存しなければならぬと云ふが、其保存の目的物が彼方此方から破壞して來るのは氣の毒に堪へぬ。要するに舊社會が壞れて近代の社會に改つた。これは只だ日本ばかりでなく、全世界の諸國皆其變化を受けたのである。之を法理學者は自分制度が壞れて自由契約の組織になつたと云ひ、又經濟學者は奴隷主義の社會が變じて、自由競爭の社會になつたと云ひ、又社會學者は尙武時代が變じて、尙商時代になつたと、

斯の如く世の中の變遷を解釋して居る、世態の變化を此の如く呼んで居る。今日世界の文明國と稱する者は、最近二百年間に於て皆變化を受けたのである。其變化が日本にも及んで來たのは、幕末の有志家でなく、又ペリー提督が持つて來たのでもなく、蒸汽船が持つて來たのである。蒸汽船が發明せられて、東西の交通が起つたが爲に、總て西洋に吹いて居る風は、日本にも吹くことになつて來たと云ふとが、此世態の變化を起したのである。實は此風には先づ西洋人が驚かされ、續て日本人が驚かされたが、歐羅巴でも英米の兩國は、尙商的狀態に最も早く進んだ國である。又獨佛抔の諸國は、まだ餘程尙武時代の有樣であるが、併ながら益々此尙商的時代に這入り込む。一國の政治から言ふても、今日武人が政權を握つて居ると云ふことは、殆ど文明國には無いのである。軍人が政治を執つて居る國は一等國で何處にある。又獨逸の如きは名にし負ふ武國であるが、其實は段々に商賣的の有樣に移りつゝある。獨逸皇帝が海軍擴張の十年計畫といふもの

を千八百九十七年に出した。其海軍擴張案は無論戰爭の爲めてあると云ふ事は言ふ迄もない、又獨逸皇帝自身は或は大に武威を輝したいと云ふ考からして議會に出した所が、如何に獨逸といへ共容易に通過しないのみか、又世間がそれを許さない、況や列國がそれを默つて見て居ない、そこて海軍を擴張する所の趣意書は何であるかと云ふと、予が恰度其時獨逸國會傍聽に往た時、夫が議會に出されたのであるが、其說明には先づ英國には何噸の商船があつて、それに對して幾噸の軍艦がある。即ち其比例が一割に當るとか八割に當るとか、軍艦の噸數が商艦の噸數に對して百分の幾つに當ると云ふことを見る。又佛蘭西の商船噸數と軍艦噸數との割合は如何、露亞西は如何、伊太利は如何、日本は如何と、各國の商船の噸數に對して其國の軍艦の噸數を比較した所て、さて我獨逸はどうてあるかと云ふのに、獨逸はどうも何れの國に比しても、軍艦の噸數の割合が少いやうてある。是はどうしても列國と竝ぶべき點迄は增さなければならぬのてある。之を

增さうとするには向ふ十年の間に幾干の割合を以て軍艦を造らなければならぬ。その繼續事業の金額は幾干と云ふことを以て議會に出して、それが通過され、今年なども其割合て幾何かの金を要求しで居る。之に由つて見ると軍艦といふものは何てある。海軍の爲に造るかと云へば、即ち其國の商賣を保護する爲てある。此商賣を保護し、殖民地を保護する爲めてある。英國などは何故に彼の大なる海軍を有つて居るかと云ふに、世界中に散布する殖民地と商賣船とを保護しなければならぬ。地中海にも軍艦を置かなければならぬ、英海峽にも軍艦を置かなければならぬ、其他世界に散在する殖民地と商業を保護せなければならぬ。若し殖民地が無かつたならば軍艦は其三分の一て宜いのてあるが、三分の二と云ふものは世界に於ける其國の殖民地を保護するが爲に大なる海軍を要すると云ふことになつて居る。故に海軍擴張と云ふものは、英國て海軍省よりは、却て商業會議所が大抵主張して居る位てある。吾々商人は今の軍艦てはどうも安心して商賣が出

來ぬ、もう少し番人を增して貰はなければならぬと云ふことて、何時も海軍擴張といふ事は商賣人の方から起つて來ると云ふことになつて居る。此一事を以ても世の中には陸軍あり又海軍もあつて、互に鎬を削り、如何にも虎視耽々、何時でも砲門を開かうといふ物騷な社會のやうには見えて居るが、最早其の精神に於ては、武を輝して互に相爭うは、戰の爲めに戰ふと云ふ時代は疾くに過去つて居る。年々人口は殖えて來る、生活の程度は上つて來る、どうしても商工業を盛にして、國位を維持するより仕方がない。それが爲には金の掛る海陸軍も己むを得ないと云ふことに煎じ詰むる所なつて居る。外見てはあの軍服を着た所の軍人や、烟を揚げて居る所の軍艦を見ると、如何にも殺氣漫々たる世界のやうてあるが、其の實は全く商賣の世界になつて居ると云ふことは明かな話てある。その大本は則ち前に述べた所の奴隷制度が止んで、自由契約となつたのてある。身分制度が倒れ競爭制度となり、尙武時代が經過して尙商時代となつたのてある。故に昔

の封建的組織の社會に於ては、道德も宗敎も法律も皆其種族、團體といふ者が目的になつて居るので、之を種族的道德(トライバル、モラリティー)と云ふ。支那の法律にも其の罪九族に及ぶなどゝ云ふ事がある。昔封建的種族的組織を以て世の中を律する時代てあつたから、自然政治も道德も法律も宗敎も亦迷信迄も如此なつて居つたが、是が卽ち個人的自由の感覺が起つて來て、悉く變化するに至つた。

さすれば政治及び敎育の方針等はどうしても之に從ふ樣になつて行かなければならぬ。然るに今日本の政治敎育の有樣を觀察すると、頗る消極的て、かびくさい中古的の精神て、近世的の思想てない。そて學校の敎育なども、皆昔の樣に團體を律すると云ふ主義て、個々人々の性を發揮せしめ樣と云ふ方針は一向にない。何ても一の團體として秩序を保ち、おとなしくやつて行けばそれて至れり盡せりと云ふ譯になつて居る。丸て兵隊を養ふのと同じて、——既に根底からの誤りてある。兎に角個人の個性を發揮せし

むる途が起つて來ぬ以上は、國としても非常に損てある。謂はゞ個人各自の長所を發揮しないが爲に、卽ち國としての損亡を受け、一國としての力を弱くすると云ふことになつて居る。先刻政治のお話が大分あつたが、大方諸君の中には必ず政治家として大に爲すべき人もあるてあらう。然らば皆が政治家になつて宜いかと云ふと、さうは行かぬ。人には各其の長所があり、其力の向きが違つて居る。均しく政治家となるにも、古來支那の政治家はどうしても文章を好くしなければならぬ。之は專制國の常てあるが故に、昔から科擧の法が行はれて居る。歐米の政治家はどうしても雄辯家てなくてはならぬ。そこて彼の國では諺の如く言ふ、政治家として成功する者は能辯なる上に、人の顏を見覺える力を有つて居ると。是も議院政治の國では自然の必要からてある。手指の感觸力又は耳の銳敏なる人は、目て見るとの出來ない所を手を以て撫て、或は耳て聽いて內部の樣子が分る。是ならば名醫になれるに違ひない。彼の銀行の札讀みが譯もなく贋札を刎

ねて居る。之を素人が見ると不思議に思はれるが、此感觸力の銳い者には何てもない。又羊毛の商賣をして指頭の銳敏なる爲めに大に成功したなどと云ふともある。殊に音樂繪畫の如きに至つては、一層天才に依るとてあらうが、今の美術學校音樂學校の如き、決して音樂や畫工の達人が出來やう譯はない。中學卒業生てなくては如何に其道の天才があつても刎ねる。最も天才に依るべき所の美術音樂の學校でも、此の如き杓子定規を以て、却て天才を抑へるやうな事ばかりやつて居る。況や全體の普通學校、高等教育の學校と云ふものになると、全く天才發揮の道は少しも開けずして、唯何人も同じやうに、步調を揃へて進んて行かなければならぬと云ふことになつて居るのは、國の爲にどの位の損てあるか、國は恰かも手のやうなものて、其握力の强いと云ふことは、各指各樣の特性を有つて居るからてある。卽ち拇指の働をなし、小指は小指の働をなし、無名指は無名指と云ふ如く、各々其長所が違つて居つて、而し握つた所て最も强い塊團となる。

是が卽ち國である。卽ち種々なる個人が集つて始めて强い國家が出來るのではないか。

二　實業家の猛省を望む

「帽子着て車の上の乞食かな」、彼の所謂紳士紳商と稱する種類の人を見るに、中には立派な高尙な譯の分つた人物もないとは云へぬ。けれども其大體に於て其階級としての品位に就て云へば、結局此の酷評をも免れない。成程大厦高樓にも住むてあらう、金衣玉食もするてあらう、併しながら其眼界の狹いこと、永遠の利益を觀るべき明のないことは實に甚だしい。常に唯目下の利益、一時の損得ばかりに眩惑されて仕舞て、利益の爲めには如何なる恥辱も構はない。その點に至ると乞食以上と云はねばならぬ。凡そ人として君子小人の別る、所は、目前の小利害と永遠の大利害と何れに依て進退するかにある。無論人間であるから利害得失に拘らす進退すると云ふ

譯にはいかぬ、況や商業界の人をや。併しながら彼等は常に其小利害の爲めに大利害を忘れて、社會の公益を害するは勿論、遂に自家をも過まる、是れ卽ち小人と云ふものである。孔子の所謂、小人は利に敏くして君子は義に敏しと云ふのも、畢竟此義に外ならぬ。遠大の利害の方に合點の早いのが君子で、目前の小利害に傾くのが小人と云はねばならぬ。其遠大の利害とは何かと云へば、自己の利害と社會の利害との一致するものを謂ふ。直接の小利害は、唯自己目前の利益の爲にはなるが、社會や後世の利害には全然反對して結局自己の爲めにも大損害となる。併し苟も利益を目的とする實業家に向つて、餘り遠大の事を望むは聊か木に緣りて魚を求むるが如くであるが、予はそんな迂遠な注文はせぬ、唯少しく眼界を廣くして自己の利益を考へてもらいたいと思ふ。今の實業家界は餘りに近眼的である、今の商業界は餘りに團體の利害を無視して居りはせぬか。例へば官での鐵道國有問題を初めとし、諸種の官營問題に付ても、是は國家の政策として

の是非善惡は別として、商業界、實業界の立場から見ると、是れが非常に其社會の勢力に關係する所であつて、餘程重大の事である。唯商業界、實業界だけの上から見た所でも餘程重い事で、其重いと云ふのは何う云ふ點から起るかと云ふに、即ち此實業社會の繩張、商業界の權域の狹くなる、ならぬと云ふ問題、實業界と云ふ一の階級として、一の團體としての權域の伸縮に關する所の大問題である。其大問題に就いて何う云ふ見地から之が採否を決するかと云ふに、殆んど總ての人は唯自分の持て居る株が下落して始末に困ると云ふ、一時の利害に依て或は贊成と呼び、或は反對と呼ぶと云ふ樣な事である。然らば贊成者も反對者も共に目前の小利害に依て進退し、決して此實業界として其階級の領域の伸縮から打算して出て來たるものでない。一階級の利害すら猶之を顧るの暇がない、況や國家全體の利害をや。在昔穢多が革細工の專賣を許されてあつた時代に於て、若し穢多以外の者が、太皷の皮でも張らうものならば、それこそ大變で、穢多社

會は生命を賭しても之を爭ふたと云ふ。さればこそあれ程に社會の迫害を蒙りながら尙滅亡せずに生存することが出來たのである。然るに今日の堂々たる實業界は握飯一つで太皷專賣を讓渡するものである。兎に角此等の大問題が咄嗟の間に極まるとは餘り根據がなさ過ぎる。幸ひに電車市有問題は不認可となりさうな話であるが、是も唯實業界以外の聲で中止されるので、本家本元の實業家等は失望落膽の方である。株屋的虛業家にあらざる以上は、此立派なる權利を自ら好て一時の小利害の爲めに放棄せんとするは、頗る奇觀と云はざるを得ぬ。兎に角他の商業の如く代金の取れぬ心配もなければ、仕入品の相場の浮沈もない所の單純な營業で、唯經營の宜きを得ば成功する筈のではないか。尤も市有市營の理論は別にあるが、併し今日の如き公德の幼稚なる市には渡せぬではないか。尤もこればかりではない。是迄の經驗に徵しても、金貨本位其他の重大な經濟問題、世界を驚かした程の問題でも、日本の議會では寔に容易に通過したが此の事は殆

んど他の文明國には有り得られぬ事である。或は日本人は道理を解する事が敏捷で、善い事は迅速に極まるのかも知れぬ。併し道理に敏いと云ふよりは、大なる利害を眼中に置かぬと云ふ事からして、是等の大問題が容易に決せられるやうである。今日の有様を見るに、官僚界と實業界との權域の爭奪と云ふ狀態であつて、此官僚政治と云ふものは、成るべく官權の行はれる區域を擴げやうと云ふ方に勉めて居る。其善惡は措いて、自己の階級の權域を擴張しやうと云ふことは、是は一層有力な勢力を以て抑制されない以上は、其慾望を達せんとするは人情の自然である。然らば實業界も亦自己の權域を失はない様に、成るべく擴張するやうに心懸けてこそ、始めて社會の平均も付き、その階級の重さを爲すに至る。然るに近來の有様では、唯年に月に其領分其權域を縮められて行く。之れを國と國との戰爭にして見ると、今日は一の要塞を拔かれ、明日は一の城廓を奪はれると云ふやうな始末。之を外國の例に照して見ると、英國のコンモンス、佛蘭西の

ブルジョウワジイ、米國のシチズンス、此の市民、平民、町人、即ち實業界が勢力を得て、政治上にも大權力を握つたと云ふのは、即ち近世史の特色である。此階級が段々全權を得るに從つて政權をも得て來た。

昔日は政治は全く貴族の手にあつたもの、衆議院も全く貴族の勢力範圍にあつたものであるが、今日はまるで反對になつて仕舞ふて、衆議院の赴く所には、貴族院もどうしても附いて行かなければならぬといふことになつたものは、全く此市民が實業權を握つて他人に渡さぬ所から、自然と國の政權をも握つたのである。段々世の中が經濟的になつて來て、其經濟的の社會に於て、金權を握つて居る所の市民が權力を政治上に握ることは當然の趨勢であらう。

これに反して露國の如きは何うであるかと云ふに、全く市民の權力は殆んど皆無である。唯官僚のみが大勢力を握つて、實業家は皆御用商人と云ふ蠟狀を現はして居る。其商人の無見識なること、又卑屈なることの一例を

擧げて見ると、斯う云ふ事がある。或富豪の大商人が、高等の武官を宴會に招待して、是非來て貰ひたいと賴んだ所が、えらい權幕で謝絶された。大に閉口したが、何故に謝絶されたか、内々探偵して見ると、全く細君の着物がないと云ふ事を聞き込んだ。それならと早速大金をかけて細君の衣服を調進して献上した上、武官夫婦の御來臨が叶ふたと云ふ話があるが、實に露國の商人の卑屈にして幼稚なること此の如きものである。露國が素と大强國として恐れられたにも拘はらず、未開國として輕侮せられ、又大强國大武國なるにも拘らず、日本と戰つて大敗績を取るも皆此邊に胚胎して居る。英國の商工者が其權利に對する觀念を見んとせば。例へば千八百四十四年の鐵道條例なるものに依て、全國の鐵道は國有に歸する筈になつて居たが、今日の所では人皆之を忘却して思ひ出す者もなく、買收條例のあるにも拘らず依然として民有の儘で營業し、誰も條例を云々するものはない。之が卽ち常識に富んだ證據である。其後も又度々鐵道運河條例など

云ふものを發布若くは改正して、鐵道會社と運河會社、又は一般公衆との關係を規定し、鐵道の運賃及設備等に就ては、大に干涉をなし、鐵道會社も輿論の希望に反對しては却て損であるから、或る程度迄は讓歩して賃率をも低くし、且つ不公平の無い樣に改めた。尤も鐵道會社の方も餘り目前の慾に迷ふて運賃を貪るやうでは、沿道の富源を涸渴させて、矢張鐵道の發達を妨げるから、成るべく沿道地方の商工なり農業なり繁昌させる樣に、營業しなければならぬと云ふ位の事は鐵道會社も知つて居る。故に近來は、停車場や客車内の設備が段々に進んで來て、日本の列車や停車場の不完全なのとは雲泥の相違てある。乃ち自然の結果會社の方も薄利となつたが、併し英國鐵道の如きものは或程度以上の利益は株主に配當せず、進歩改良の方に向けなければならぬと云ふ事を首肯して之を行つて居る。尤も競爭の結果てもあるが、小利害の爲めには容易に動かされぬと云ふ事が、英國實業家の重きを成す所以てある。從て彼等が政治上に於ける大勢

力となつたので、其一例を擧げると、英國海軍の規模を定むるには何を標準とするか、云ふ迄もなく商船の噸數、殖民地の廣さから、極つて來るのであるが、英國の海軍擴張案の起る本は商業會議所である。商業會議所から起つて、此擴張案が議會に成立つ、乃ち彼の海軍は全く實業保護から起つた軍備である。

然るに日本は阿うであるか、未だ實業家の如きは殆んど軍備に關係はない。軍人の方から無暗に兵數を增し艦數を增し押賣的に軍備擴張が起つて來る、實業家は迷惑ながら軍人の跋扈を仰へ付けることが出來ずに據ろなく軍備を擴張する、而して財政に困難を極める其結果、心にもない增稅をされると云ふのが日本の現狀である。彼等軍人は軍事一方の事計りを考へて鐵道も船舶も、唯此の軍備にさへ應ずれば可いとし、經濟の事は少しも考へぬ。甚しきに至ると海岸の鐵道には强壁を築いて萬一に備へやうとまで云ふ。然し軍人の方では戰爭の事より他は知らぬものであるから、どんな愚劣な

事を言ふかも知れぬが、是も職掌から殊勝な事と云ふより外はない。唯それに對抗する丈けの實業家の經濟的議論と云ふものがあつて、其軍人の無常識なる所の說を抑へる丈の力がなければならぬ。所が其力がないのみか、寧ろ此軍人跋扈の結果たる所の國有論を、一時の小利益の爲めに目が眩んで、贊成するやうなものが、今日の實業界の大多數を占めて居ると云ふのは、如何にも情けない。要するに彼等は目前の小利益を占めて、永久に其の權域を縮められる事を一に憂としない、甚だ憫笑に堪へざる次第である。實業家にも新舊の種類があるが、先づ所謂紳士紳商と云ふ新らしい方に此種類が多い。古い方の實業家は何うであるかと云ふに、新實業家よりは餘程獨立の所がある。政府に依賴するとか、權門に出入するとか云ふやうなことはない。殆んど大藏大臣には何人がならうとも、總理大臣には何人がならうとも、何等の痛痒を感じないと云ふのが、東京の日本橋や、大阪の島の內を初めとして、全國の舊式實業家の風である。併し是は一方から言

へば甚だ困つた人種であつて、少しも新進の氣性がなく、唯舊習を墨守して遷ることを知らざるものである。而して是は如何にも金は持つて居るが、繼襖を着て爪に火を燈すやうな消極一方の種族である。是れ亦到底俱に語るに足らぬ。蓋くは雙方の短所を去つて長所だけを合せ、大に將來社會の中堅たる所の實業家を形づくることを、今の青年實業家に頼まなければならぬのである。

三　商工界の統一

我が國が王政維新の革命に依て、政治上の統一革新が急速力を以て行はれ、過去四十年の間に全然封建割據の境涯を脱して、國家統一の文明狀態に進化したことは、誠に世界無類の長足の進歩變遷であることは言ふ迄もない。彼の獨逸の如きは統一の計畫數百年の前に開始され、遂に普魯西の覇權の下に帝國を形成したが、其實は割據の餘習を存し、統御に困難を極め、其

の國家主義政策も全く此事情に餘義なくされて起るものである。而して此封建割據に伴ふ弊風は人情風俗の變化は言ふ迄もなく、有形上の事にしても彼の通貨度量衡の如き區々になつて居つたが、それ等のことも我國に於ては皆な統一されて、毫も舊制の根跡を殘さぬは、全く吾々日本人の理性銳敏にして、舊慣に拘泥し新風に移ることを忌むやうな風の無かつたのが何よりも大なる原因に違ひない。諸外國に於ても度量衡の改正、或は貨幣制度の改正を行ふも、兎角新法に泥む。古い貨幣の稱呼が容易に止まないものであるが、日本で今日何匁何分とか、何兩何分とか云ふやうなことを言ふ者も無ければ、度量衡に就いて舊制を用ゐる者も甚だ少ない。唯々暦法の一事丈は太陽暦が都會にのみ行はれ、田舍になると依然舊暦を用ゐるので困つて居る。これは主として農業上の關係から、昔の陰暦に依つて植附收穫をやつて居たからして、其習慣が殘つて居るが、それを標準として居る所から總ての商業取引上にも困ることが多い。併し陰暦の便利杯云ふ

ことは、全く無學から起る誤解にして何の理屈もない。即ち農家で喧しい所の彼岸とか夏至冬至其他の事は、多く太陽の運行から起算したるもので、太陰には何等の關係のないのてある。是は何とかして統一すべきものてあると思ふ。概して言へば制度上の事に就いては意外に克く統一して快く舊を去つて新に就くことの出來た國てある。

然るに茲に商工業の實際の活動に至ると、依然封建時代の遺風に安んじて居る部分が未だ多い。併し是は法律制度の力で强制する譯には行かぬ。實際直接に人の利害存亡に關係することてあるから、全體の制度を改めるとか法律を變へるとか云ふ丈てはいかぬのてある。併し是非共之を行はねばならぬと云ふは、日本て出來る工藝品の如きは誠に小仕掛なものてあるから品物が一定の模形に從つて製造されることが出來ない。假令其品物に外國の需要が起るにしても何萬とか何十萬とか云ふものが、一定の型に出來ないものてあるから、輸出品としても甚だ不適當、亦農業上に於ても其一

定の農産物が造れない。例へばビールを作るにしても其原料の麥が個々になつて居るがために、それを用ゐることが出來ないて、外國に原料を仰ぐ、これはビールのみならず外々のことに於ても多い。要するに是は先づ工業上より言へば、機械を用ゐる部分が少ないと云ふことてある。工業品其物は無論のこと、之を運搬する上に於ても或は荷造法とか云ふやうなものも誠に一定せぬ。何品は必ず斯う云ふ荷造になつて居り、其の外面の裝置を見れば內部の品質數量が分ると云ふやうに出來て居らぬ。同じ物品ても土地に依つて違ひ、亦同じ地方から出るところの品物て、同じ荷造法になつても、それに分量品質の違ひが出來て居る。故に同一のブランドを打つて居ても、それを見當にして其品物を扱ふ譯にいかぬ。例へば倉庫業の方面から見ても、是が爲めに非常な不都合を生ずる。第一混合預入即ち同種の商品ならば混合的に保管すると云ふことを言出しても、是が容易に行はれぬ。先づ日本て從來荷造法の比較的一定して居るものは米てある。

そこで混合式預入にすれば肥後米、勢州米は勢州米で混合して之を預け人が取出しに來たときには、どの肥後米どの勢州米を渡しても宜い譯である。此百俵は八兵衛の肥後米で、彼の百俵は六兵衛の肥後米だなど云ふことは無い筈だが、實際には中々その通りには行かぬ。それは同じ勢州米同じ肥後米でも、分量が違ひ品質が違つて之がために生ずるところの手數、勞力、時間、經費の損耗は非常なものである。實に是は倉庫業運送業の大困難で、双方の損失甚しいのである。甚だしきに至ると其荷造の外面から見たのみでは、中に何が入つて居るか分らぬ。重要なる商品さへ斯の如き幼稚極つた有様で、迚も文明國にはあられない程の次第である。外國の輸入商品は其荷造法一定し、ブラントに依つて分量品質も之を知るから、倉庫の混合預法などは當然行はれて何の差支もない。結局倉庫の預品出し入れも、銀行預金の出入と同一にならなければならぬ。是は己れの預た紙幣と違ふと云ふやうな滑稽な話はあられない。これは一例であるが、以て我邦實業の

幼稚にして、經濟思想科學思想及商業道德の點に於て、未だ大に至らざる所あるを證するに足るものである。要するに此方面に於ては今尚封建的狀態を脱する事が出來ない、之を脱して文明の域に進むには人工を排して機械に依つて物を造ると云ふことにならなければならぬ、されば云つて今日機械を使ふは人間を使ふより高くつくから勘定に合はぬと云ふ間は行はれるものでない。家の地行をするにも機械仕掛ならば兎も角、多くの人間が寄つて小さい棒を上げたり下げたりの騷ぎをやつて居る。是は野蠻極つた話であるが、是も勘定に合へば仕方がない。要するに人間が多過ぎて衣食住の度が非常に低い、其上金利が高いと云ふことで、早く言へば貧乏と云ふことになる。即ち經濟的狀態が幼稚である。併し又一方から言へば習慣も餘程あるのであつて、現に機械に依つてやれば勘定に合ふことでも、兎角習慣に制せられて在來の手工法を以てやつて居ることも多い。先づ人間を外へ送る工風をする、成るべく外國に出て往つて働くと云ふ道を作り、

資本を成るべく廉く使ふと云ふ工風をして機械を使ふことが多くならなければ到底國家は進歩せぬ。先づ近年世界で最も著しい長足の進歩を實業上に爲した國は何處であるかと云ふ北米合衆國で、其の進歩には種々の原因もあるが、茲に最も顯著なるものを擧ると、工業上には假令前年大金を投じて買つた機械でも、より優つた機械が今年發明されたと云へば、惜氣もなく去年の機械を捨てて新らしい機械を採用する。前年建てた十階の家がどんなに立派であつても、それより以上二十階三十階の家を建てた方が勘定に合ふと、惜氣もなく叩き壞はして新らしい家を建てる。是は亞米利加の實況である。此仕組は個人に取つては多大の損失かも知れぬが、亞米利加全體の勢で到底舊物に安んじて居ることが出來ぬ。最新のもの最上のものを使はなくてはならぬと云ふ風に、全體の人心が向いて居るが爲めに、亞米利加の實業はどんどん進歩し亞米利加の富はどん〳〵增すので、是等の結果が即ち國家を富ますと云ふことになつて居る。亞米利加は土地

廣く新らしくして人口も其割合には多くない、人口も非常に增加するが、尙企業の餘地が廣いと云ふことが、斯の如き事情になつて、詰り國が非常な速力を以て進歩すると云ふことになつて居る。如何に國狀が違へばとて、其對岸の日本が前に述べた如き狀態で居ると云ふことは、如何にも耐へ難い。日本にも先年經濟界の膨脹のために新會社が大に勃興し、今日では大抵挫折して居る有樣であるが、彼の多く成立せんとした會社の如きも、同じく手工に依つて爲したところのものを、機械に變へることはなかつた。當時の會社の勃興が其計畫通り實際に行はれた所が、それ程太したこともない。素より餘り、一時に勃興するときは無論其跡の害は怖ろしいが、日本現在の商工業を改正して文明の機械主義に直さうと云ふには、十分の資本を以て多くの會社が起らなければならぬてある。少しく經濟の景氣の好い時には無暗に勃興して、亦少しく悲境に沈むと直に解散して朝令暮改をやつて居るが、そんなことては迚もいかぬ。日本の前途は餘程えらい力を

以て進み、從來の事業機械的にすることだけでも大事業である。それを亦舊來無いところのものを新に新設すると云ふことの餘地も大層多いことであるから、先づ前に言ふ如く政治上の維新は其効果を見ることが出來たが、實業上の維新は未だ出來て居らぬ。之を爲すことが商工業の維新であらうと思はれる。要するに區々なる割據的實業を統一して、國家的否世界的にすると云ふことが必要で、是が出來ぬ以上は、日本國は一等國戰勝國であると言つても、それは少しも誇るに足らぬ。今日の實業界は殆ど不景氣の底に陷りて、金利は甚しき低度になつて來た。いづれ遠からず何かの動機に觸れて活氣を顯はすに至るべく、其時は成るべく理化學應用の範圍を擴張して、文明統一式に入らしめん事を希望するのである。

四　將來の商業家

實業上の目的を以て教育を受けた人は、今後如何なる考をもつて、それそ

れ事に當つたならば宜いかと言ふに、兎角日本人は學校を卒へたならば、最早研究とか向上とかと云ふ念慮が絶えて、唯一概に金が餘計に欲しいと云ふことばかりになつて仕舞ふ。學校を出て、後それ〳〵の業務に就いたならば、それも一つの學校と考へなければならぬ。又學校は成るべく實地的にならなければならぬ。學校は須らく實地によく通用する所の人を造り、又其學校より薫陶されて實業に就いた人は、其の己の就いた所の實業を以て、半ば自分の職業であると同時に、半ば自分を教育する所の機關の中に身を投じたものであると云ふ考でなければならぬ。西洋にもカウンター、イズ、スクールと言ふて居る。帳場は學校なり、カウンターに座つた其時は、實地の學校に入つたのであつて、是まで學校で覺えたことを之に應用し、是迄の机上の學問と實業との間の相違、或は又實地上の不完全なることを發見すると同時に、又學校の机上の教が大に事實に嵌まらぬことも發見して、どうも學校で教はつたことも、實際に當つて見ると甚だ迂遠でな

らぬと覺つたならば、それを學校に通告し或は學校當局者の參考に供する時は學校も段々實地的になつて來る。又此學校で學んだ所に照らして、實地上には甚だ迂濶なこと不道理なことが行はれて居れば、即ち之を改正する考を持つて働かなければならぬ。しかし無闇に威張つて先生ぶつたからとても、初から何人も信用するものではない、故に自分の命ぜられた職務を忠實に盡すと同時に、又商店會社の仕事を成べく正當なる方針に向けたい、成べく之を改良したいものである。唯上の人の命令を實行するのみならず、飽までも柔順、飽までも長者の命に遵ふと同時に、成べく會社、銀行、商店は自分の物の如く思ふ所の親切心が無ければならぬ。即ち職務に忠實と云ふことである。それ等の觀念の厚い人を以て、人格の高い人と云ふ。人格と云ふも、徒らに威嚴を付けた所が、是は決して人格でない。此の如く人格を備へ、此の如く忠實に行へば、必らず効果はある。所謂陰德あれば陽報あり、自ら人が信任を置くと云ふことになつて來る。又人が尊

敬を拂ふことになつて來る。此の如く人が尊敬し、人が信任することになれば、どうしても其人の地位は高くならざるを得ぬ。これを思はずして現在の地位に不平を起して、徒らにあせり、人を恨めば却て現在の地位をも保つことを得ずして、非常なる不過に陷らなければならぬ。よく人は椽の下の力持でつまらぬと不平を云ふも、棄石は必ず役に立つ時が來る。現に今朝も箱根の阪を下りて來ると、路傍の石に彫み付た一首の歌がある。「あれを見よ深山に花ぞ咲にけり、眞心おこせ人知らずとも」とある。所謂獨立自尊の精神はこの邊にあると思ふた。

思ふに實業社會は未だ極めて幼稚不完全なもので、混沌たる有樣である。世間の實業家と稱する者の日常の行を見るも、世間に對する所の道を見るも、極めて怪いことをやつて居る。兎に角他の事よりも實業が最も日本では進んで居らぬ。即ち日本は商工業に不適當なる國民であると云ふ評を受けて居る位である。併し決して不適當ではないが、唯是まで輕蔑し、是迄

粗末に扱つて居た所の商業工業が今日非常に大切な事となつて來たから時の必要に應じて段々事は起つて來るが、其事を行ふ所の方法仕組は甚不完全であると云ふことは、蓋し免れない事である。丁度維新當初の役人が不埒千萬の事をやつて、無法に金を取つた。給料以外に理由なき金を取つて、贅澤を極め、豪奢を誇つて居つたが、今日の實業は丁度其有樣である。人民が幼稚であると官吏が跋扈して種々の勝手を働くが如くに、株主が幼稚であると、其會社の役員が、子供だましの樣な事で株主を瞞着することは、自然に起つて來る。最も不可思議な事は、現に會社が、株主を呼んで馳走をする。株主は禮を言つて居る。自分が自分に馳走して、自分に禮を言ふやうな譯である。しかし自分の物とは思つて居らぬ、株券は己の物であるが、會社は其株券とは別物で、其會社の頭取から案内狀を貰つて馳走になり或は品物を貰ふと、大に有難いことのやうに思つて居る。此の如き金があれば、それだけ配當を多くすれば宜い。然るに一種天から降つた金で饗

應された如く有難く思つて、他に向つても名譽として誇つて居ると云ふ事は世間に幾らもある。是は實に幼稚な話である。昔百姓が無法に稅を取られて、其稅の中から褒賞を貰つて、感涙を流して居つたこともある。是は甲から取つたのを乙にやることもあるが、現に自分が金を出して作つて居る所の其の會社の資金の一部分には相違ない。此一例を見ても實業社會が甚だ幼稚であることを斷言して宜い。

日本の實業が容易に進まぬのは、種々の理由がある。日本は商工國でないと云ふは大なる間違で此國こそ實に商賣國でなければならぬ。國の位置から言ふも、商賣を以て立たなければならぬ。工業を以て立たなければならぬ國だ。併し是れは彼の鎖國政策に淵源して居ることで、昔葡萄牙人、西班牙人、和蘭人などが東洋に來て商賣をした、其時分の日本の有樣を考へると、なか〳〵商人國である。それは信長にしても秀吉にしても家康にしても、商賣の大切なることは皆知つて居つた。又他宗教を迫害すると云ふ

念も日本人には無い。十七世紀の天地に自由貿易自由信仰の國は恐らくは日本計りであらうと思はれる。只ゼシユート派などが宗教外の、禍心を包藏して居ると云ふ疑が起てから、西洋人を拒絶しやうと云ふことを度々考へたが、之と同時に大事の貿易を捨てることが惜いので始終躊躇して居つた。然れども遂に德川の初に斷然志を決して、此鎖港を行つた。これは德川が天下を保つ爲に、最も安全な道と考へたからである。併し是は餘程漢學流の思想が支配したので、德川氏は戰國の後を承けて、どうして此天下を維持しやうかと云ふことに就ては、武人の集まり、良策はなかつた。故に主として漢學者に治國平天下の相談をした。此漢學と云ふものは所謂攘夷の思想、卽ち夷狄を卑むと云ふのが其骨髓であり、利を卑むと云ふのが教義である。そこで夷狄を退け商業を抑えやうと云ふ事になつて、遂に此攘夷輕商の思想が、三百年間日本を支配する事になつた。其結果段々此商工業が衰へた。全く二百年間人爲的に商工心を抑壓して、今日に至つたも

のであるから、實業の容易に振はないと云ふことも無理はない。然るに歐羅巴の方では、二百年間卽ち德川鎖國の間は、最も商工を鞭撻して、非常なる刺激を加へた時代である。此方が大に後れを取つたと云ふことは、數に於て免れない所である。

而して此の二百年間に商工界の勝利を得たのは英國人である。英國人が天下の商工の權を握て、唯一の商閥國になつた。しかし此英人も、何時まても其壟斷を私することが出來ずして、段々競爭者が起つて來た。歐羅巴大陸相互の軋轢も濟み、各國海外に目を放つて、殖民地を作らねばならぬ、商賣を擴張せねばならぬと云ふととなり、殊に近來獨逸の如きはしきりにやつて居る。現に支那に於ても、獨逸人はしきりに英國の向ふを張ることを勉めて居る。彼等は又非常にえらい處がある、有繋に此商閥國に向つて弓を引かうと云ふ丈に、隨分恐るべき所もある。今支那に於ける獨逸人の遣方と、英人のやり方とを比べて見ると、英人は既に一つのお株になつて

居つて、よく秩序は立つて居るが餘程悠長なやり方をして居る。まづ英人の個人、個人に就いて言ふも、朝は九時でなければ店を開かぬ、それから一時になると晝飯に往く、晝飯後は一時間位も球突や、喫煙で休む、それから店へ歸つて三時になると店を閉て宅へ歸る。それから運動服に着かへてテニスを遊び、夜になると燕尾服を着て、夜會や芝居に出懸ける。しかるに獨逸人はなか〳〵そんな騒てぎない。吾々下等の人間は、廉い物を着まづい物を食つて、朝から晩まで立ち詰めに働かなければならぬと云つて、腰を低くして頻に怪い安い品物を賣弘めることに勉強する。故に獨逸の商賣の勢は、なか〳〵凄しい進み方であるが未だ獨逸などが、容易に英國の商賣に向つて匹敵することは出來ぬ。現に支那に就て見ても、英國の商賣の高は、支那に對する列國の商賣を集めた全體よりも、まだ英國の商賣の方が大きい。又蘇西運河を通ずる所の船ても、三分の二までは英國船てあつて、即ち今の所ては、支那に於ける商賣は英國が無論一番てある。殆ど

他の國は數字に於て遙かの下に在るが、英の次は日本てある、獨逸は三番と云ふやうな順になつて居る。其の二番の日本は僅に英國の十分の一に當つて居る位で英國はまだなか〳〵の商閥を占めて居る。何故に英人が斯く悠長にやり、斯く緩慢にやつても、商權を容易に墮さぬかと云ふのに、則ち是は英國人の人格が、獨逸其他の國民の人格に比して、高いと云ふことが與て力がある。商賣上に信用を重んずると云ふことが大なる力になつて居る。尤も此英人は或點に於ては非常に敗北して居るやうにも思はれる。現に香港上海銀行或はチャータードバンクなどの取締、重役等の顔振に於て英人は段々減少し大抵獨逸人が取締役か、社長かになつて居ると云ふ、之に由つて見ると英人は如何にも勢力を墮したやうにも思へる。しかし株主は大抵英人てある、金力は英人が占めて居る。併し是は英人が自分て株主てあり、自分で重役てあつた時代に比すれば、幾分かの權力を失墜したに違ひない。是は恐らく教育の高に於て幾らか負けて來たに違ひない。獨

逸は非常に實業上の敎育を奬勵したが爲に、獨逸人は外國語を能くし、經濟上其他の事に就いて學問上の智識を備へて居るので。自然此の智識あり手腕ある所の獨逸人を、此等の役目に選擧することになつて居ると云ふ說もある。獨逸人は智識を備へたが爲に、此人格の高い英國人の權力を幾分か攻取ることが出來たと云ふのは、是卽ち全く智識敎育の力と謂はざるを得ぬ。

是に於て吾々の大に鑑みなければならぬことは、國民としても大に此智識の點に於て進まなければならぬと同時に、又人格を重んじて德義を尊ぶ、卽ち信を守るの精神を養ふ、此二つを持つて居れば鬼に鐵棒である。智識が進んだから德義を損せねばならぬと云ふことはない、又德義を尊ぶから智識を卑まねばならぬと云ふことも無い。二者同時に進み得るものである。又智識が增せば德は增すものである。德が高ければ智識が增すものである。此の二つを結合した者が今日國民として天下に雄を稱することが出來るの

みならず、一個人としても智德兼備の者でなければ、人の上に立つて、人の尊敬を受け、又大なる重任に當ることは出來ぬ。學校を出てた靑年は是からそれ〳〵業務に就くのであるが、最初は無論低い地位に居る、人の下風に立つて、如何なる卑い事、如何なる低い事でも甘んじて爲さねばならぬ。しかし同くならば予が希望する所は、少しづゝでも自分の地位を上げて貰ひたい。一寸法師で世間に出たならば五年後に會つた時には五寸の人になつて貰ひたい、十年後に會つた時には一尺の人になつて貰ひたい。兎に角智識を增し人格を高くすることを心得なければならぬ。殊に實業界に入る人は、唯調子好く、巧くやつて廻りさへすれば、氣品人格の如きは、どうても宜いと云ふやうな風になり易い。併し是等を却けて調子も宜く、機轉も利き、規則正しく、久しきに堪ゆる所の習慣を養成し、其上に氣品の高い處があつて、自己の小利害の爲めに公共の利益を犧牲にすることを欲せぬと云ふ、巍然たる尊い心を持つたならば、是が卽ち前に述べた所の智

と德と兩方を兼備して、終には人の上に立たなければならぬと云ふことになる。此等の點に注意して、力行せざる以上、到底有望な商業家となることは出來ぬ。

五　海外に發展すべし

最近四十年間の我歷史は支那朝鮮の爲めには大なる參考になる。支那人も段々目が醒めて來て、學問、敎育を初め、百般の文明制度を輸入せんが爲め、日本に留學生も來るが、――彼等の考では、道德政治の如きは中國古來の思想が定まつて居つて、孔孟の說は動かすべからざる眞理である。西洋文明は只機械にあり、有形上の利益にある、其利器を使ふまでの事である と云ふ考が支那人多數の思想である、根底から其思想を打破せんければ成らぬ。予は嘗て或淸韓兩國人の集る會に行つた所が、淸國公使を初め兩國の紳士學生等が來て居つた。それから何か話をせよと云ふことであるから

予は其事に付て一言した、已に我邦が西洋の文明輸入に付て、此の四十年間に實際踏んで來た所の歷史が歷然とあるから、其れを繰返す積りでもつておやりなさい、名は西洋の文明と云ふが、なにも西洋固有の文明と云ふ譯のものではない、唯其出所からして名が付いて居るのである、故に支那が之を採用すれば支那の文明になり、朝鮮が之を採用すれば朝鮮の文明になる。西洋の文明を借用して來るなどは、大に中華の面目に關ると云ふやうな事を考へて居つたならば、何時まで經つても失禮ながら貴國は進みませぬ、故にそんな事を考へずして西洋の文明を採用して貰ひたい、しかし西洋の文明と云ふことが面白くなければ之を現時の文明、近世の文明といふ名を付けて學んだならば宜からう、何故なれば西洋と云つても昔の希臘、羅馬の文明は、從來の支那朝鮮日本印度等と變つたことはない、又モール、埃及、メキシコ、ペルウの文明も皆同樣である。唯これは古い方の文明で、之に對して新しい文明が歐羅巴に興つたのであるから、其出所に因なんで

之を歐羅巴文明といふ、丁度風の吹き來る方角て、東風、西風等の名が付く、風に變りはない、等しく空氣の流動である、名前に拘泥するは甚だ面白くない。總て物は皆其通りのものであつて、――譬へば紀州の名產、ウンシウ蜜柑と云ふがある、これは、出雲の雲州ではない、貴國の溫洲から來た蜜柑だから、其名がついて居る。又土佐て出來る鰹節を土佐節といふが、土佐の海だけに此の鰹が泳いて居るかと云ふと決してさうではない、薩摩の海で土佐の釣針を呑んだ鰹が釣上ることがある、此時は薩摩ぶしてある。乃ち西洋から吹いて來た文明風だから西洋文明と名をつけて居るが、文明は世界共通のもので、早く之を取つた所は優勝し、後れた所は劣敗すると云ふのであるから、清國たるもの着々此方針に進むべきである。とやさしく言つた所が、大分手を叩いて居つた併ながら此文明の輸入と云ふことに付いてもよく考へなければ成らぬ、東洋の文明、西洋の文明、現時の文明、古代の文明と云ふ區別を付けて見れば、歐羅巴各國にある所の文明は古代

は又東洋の文明に較べると自ら彼れ各國通有の類似點がある。併し今一歩を進めて細別すると、其間に深き相違の點がある。殊に政治上の制度に至ると非常な相違がある。從つて各家庭に入込んて居る所の氣風、人々に持つて居る所の氣象にも非常な相違を起して居ると云ふことは明かてある。彼のアングロサクソン人種と稱せらるゝ英米其他英人種の住んて居る所に行れる風と、拉典人種の住んて居る佛國等にある所のものとは餘程變つた者てある。而して其根本的相違は獨立自營と國家に依頼するとの懸隔に外ならぬ、此相違より生ずる各方面の現象の中に就て最も顯著なるものは殖民の一事てある。國外に發展する國は益々勢力を得、然らずして唯國内に蟄伏して居る國は衰へるのが今日の現狀てある。能く言ふ通り英人は殖民を盛にして海外に發展し、段々英人種の住域が廣くなり、英語の行はれる區域が廣くなる。然るに之に反して佛蘭西人は兎角殖民には成効せぬ、隨つて國力が日に鎖沈するやうな譯になつて居るが、佛蘭西の殖民は、多く

は政府の殖民て人民の殖民てはない、まづ東京地方亞弗利加邊の佛領を見ても、大抵官吏又は兵隊の殖民て、決して國民自ら發展して其處に至つたものてはない。彼の佛國郵船は上海香港を經て佛領柴棍に寄港する、爰て佛蘭西人は夥しく乘船する、其の乘る所の人を見れば皆官吏てある、文官か武官の外はない、其他政府に關係のある用事で旅行する者てある。實際佛蘭西國民の殖民地ではなく、佛蘭西政府の出張所と云ふ方が適當てある。英領から乘降する人は皆印度て商賣をし、支那て事業をする、皆自衞の仕事をして居る人が多い。

佛國郵船會社の經濟は如何と聽いて見るに、政府の保護を貰つて居るけれどもどうもうまく行かぬ、最早此頃は維持が餘程困難になつて居る。何故と云ふに、第一乘客が役人て、食卓に就くとき抔も此は何々の官てあるから、一番上席に坐るとか、何々の勳章を持つて居るから其次に坐ると云ふやうに官尊民卑の風が船の中に吹き廻るから、例の旅行道樂の英米人など

はソンナケチくさい船に乘るのは面白くないと云つて、佛船は客の待遇と料理の甘いにも拘らず乘客は段々減ることになる。船てもホテルても凡て旅行商賣は英米人を上得意とするが此の得意を失つては困るのが當然てある。役人が、席順をやかましく言ふ爲に、本當の金離れのよい客は乘らぬと云ふことが、此會社の萎微して振はぬ原因てある。此郵船の狀態が取も直さず佛蘭西共和國全體の國勢を代表して居る、佛國に於ては總ての事業は國家事業てある、而して役人にならなければ名譽はない、斯う云ふ譯て此の國は段々衰へて來る。歐羅巴の中て最好の位置を占め、國民も非常に悧巧て、殊に愛嬌たつぷりの、交際的國民てありながら、此佛國は甚だ振はぬのは、總て役人仕掛て、教育ても皆役人教育て卒業の肩書は役人になる爲めの鑑札に外ならぬ、現に行政官の數が六十萬人もあると云ふやうな仕組て、役人にあらざれば人間てなく、何所ても役人が上席をする樣な流義、佛蘭西全國が恰もメサゼリーマルチーム會社の振はざる如くに益々消

衰することになつて居る。乃ち殖民も官吏の旅費日當取りの殖民では成功の望はない。然るに佛人の海外發展の勇氣に乏しいに引換へて英人は頗る世界的思想に富み、彼等は決して世界を廣く考へて居らぬ、之が英人の特長である。譬へば倫敦の老爺さん、婆アさんに向つて家内の現狀を聽くと、直ぐに世界的の話が其處に起つて來る。私の家では惣領のホレースは家に居るが、次男のジョンは濠太剌利亞に、三男のエドワルドは香港に、四男のヘンリーは加奈陀に行つて居る、女の子……これも三人あります、其長女のマリアは米國の一商人に嫁し、其次女のアンナは香港に居る醫者の女房で、三女のリヽーは或る坊さんと夫婦約束をして、今では大方錫蘭あたりに居ませう。と言ふ、乃ち一家の人が、殆ど世界中に散亂して居る。これが日本ならば、一家離散して互に死に目にも逢へぬ、何たる宿世の業報かとても云ふてあらうが。彼等は平氣なもので何とも思はぬ。英人は一面から見ると非常な國粹保存主義で、他面から見ると非常な世界主義と云ふ

如く、亞弗利加の眞中であらうが亞細亞の端であらうが亞米利加の片田舎であらうが、何處に行つても其處を自分の永住地とし、其處を子孫の墳墓の地とする。然らば其地の風俗を採ッて居るかと云ふとさうでない、何處に行つても英吉利の風をして、英吉利の茶を飲み、英吉利のバタを食ひ、英吉利風の菓子を拵へて食つて居る。靴が欲い茶碗が欲いと云へば倫敦に注文すると云ふ如く、英吉利の物を食ひ英吉利の物を着て、午後の三時になれば英吉利流に茶を飲んで麵麭とバタを食ひ、夕の七時になれば英吉利流のビーフステーキを食ふと云ふやうに、ホームと云ふものは何處に行つても倫敦の眞中に居ると同じく、亞弗利加の眞中でも亞米利加の端にても作つて、如何にも平氣で愉快に暮して居る國民である。父母の家から離れるとは五千里でも一萬里でもそれは平氣で、天涯地角到る處に自分のホームを居つて、安樂に暮して居るとが出來る。而して草莽の地に入つて活潑に開拓し耕作して行く其活潑の動作には體育の素養が大に與て力ある。例

の漕舟、野球、劒術、乘馬等に依て强健なる身體を養ひ、活潑なる氣象を作るから、如何なる蠻地に於てもどん〳〵馬に乘つて山でも原でも驅廻て草莽を拓くことが出來る。佛人は全く之と反對して、故國を離るゝことを忌み、巴里の月を賞しニースの花を愛するとても言ふか、唯々故國が戀しく、親く子供を遠方に出すなどは考へてもゾッとすると云ふ風である。或佛人の著書にも戲に佛蘭西の家庭の模樣を寫して、父が息子に向ひ、倅よ貴樣は前途何になる積りか、父上……、何が宜いと思召す、さうさ、マアどうしても法律を學んで狀師にでもなるが宜からう、しかし父上。それでは別にこれと云ふ位地にはなりません、イヤさうでない、其れが即ち肩書と云ふものである、其肩書を利用して先づ郡長にでもなるか、或は代議士にでもなる、其の代議士にでもなつてそれから、縣知事にでもなる、それから巧く行くと大臣にもなれるかも知れない、今の大臣を見ると大抵法律家のようだ、併ながら役人では給料が少くて、體裁がいる、迚も暮らしが

立たん、損料貸の馬車で大臣でございては餘り氣が利かない、悴、イヤさうでない、金もちの女房を貰ふと云ふ道がある、爪に火をともして金を拵へた赤西屋の親父などゝ云ふものは、娘を何處か、ガラ〳〵蕩餘の中から出たような勳章でも付けた役人でもよいから、婿にしたいと云ふ考があるから、それは少も困つたことはないぞよ。と、此諷刺的の一文は正しく、佛蘭西の家庭に於ける親子の內緒話である。尤も佛蘭西も、千八百七十一年の大敗後は大に教育に勉め、體育も盛にし、運動もやり出したが、それと同時に學科をも煩雜にして、甚しき詰込主義をやつたが爲に、差引勘定何にもならぬ事になつた。英佛二種の文明が開國の際如何に我國是に影響を及ぼしたかと云ふに、當時佛蘭西は全盛て歐羅巴文明の中心と稱せられ、英國も亦文明の先導者と云はれて居た。そこて日本人と云ふ田舍者が文明を仕入れに往た。何方を買つて宜いか分らぬ、分らぬものだから赤毛布先生は先づ分りの宜い方を買つて來ると云ふことになつた。三井に行つて反

物を買ふにも、ジミて高尚な凝つた着物と云ふやうなものは山出し先生には分らぬ、故にピカ〳〵した物があると、これは誠に綺麗である、之を買つて歸ろうと云ふのてぴか〳〵を買て來る。即ち佛國の制度は文物は燦然として名實相適ひ。丸て駒立をした樣に出來て居る。佛蘭西人は極端にロジカルな國民で、何ても名實相適せぬと氣に入らぬ。英吉利の方は事實は進んて居つても形や名前は全く構はず實質の進歩に從て居る、それは町を通つて見ても直に分る。佛國の大きな本町通とても云ふやうな處にはリュウ、レピュブリック、共和街道の名が金文字で出て居るがこれは共和政になつてからの事で、帝政の時はリュウ、アンペリアル皇帝街と云つた、其以前の王政の時分にはリューロアイヤル國王街と云つた。此の如く始終町の名前が變つて居る。學校でも圖書館ても皆改名する。英國人の方は不思議に名前を變へぬ、如何に事實が變つても名前を換へないのてある。倫敦にホースガードと云ふ役所がある、參謀本部の如き處て、制度上から言ふ

と譯の分らぬものてあるが、ホースガード即ち馬に乘つた番兵が其門に付いて居るからホースガードと言ひ習はして居る。何の事か分らぬが、これを何人も議論する者もなく平氣てやつて居る。それから、ロンドン本市の警察廳をスコットランドヤードと云つて居る。只スコットランド屋敷では意味は分らないが。それて秩序は立派に立つて往くのてある。佛蘭西の制度は順序正しく且名實相適合して、丁度左大臣があるから右大臣があると云ふ如くに並べ立てる。地方行政の仕組を見ても、國縣郡市町村の順序を立て、國會縣會郡會市會町村會があると云ふ風に、文明仕入れの田舍者の眼には、ぴか〳〵して分りが宜い上に奇麗に見へるに違ひない。尤も英國の制度などは採用の出來ぬものてあるが、只其發達の精神を採用して日本固有の形體に適應させるのみてある。

然るに佛蘭西の立國主義は全く政府を中心として、政府が人民を監督し、人民を保護し、人民を指揮して往く仕組に出來て居る。現に佛蘭西大芝居

は國立又は國庫補助立て、其門前には乘馬憲兵が整列して警護する。素人目には如何にも整頓して居る樣に思ふが、租稅でやるのだから、國力が消衰する上に人民の依賴心が增長せざるを得ぬ。又事業も官業が多い、よく旅人の見物に行くセーブルの陶器所、ゴブラン錦の場抔でも美術省から鑑札を貰て行つて見るのであるが、之も政府の職工場である。斯く總て政府が仕事をなし政府が事業をやつて國民自營の區域を狹めるから、佛蘭西人は儉約して金は貯めるが、進取自營の氣は段々消滅して、只政府の公債を買ふ計り、仲々內國の公債位では貸しきれぬから、露西亞の公債を買ふと云ふ事になる。露西亞はそれを西伯利亞に注込んで鐵道を作る、旅順に砲臺を設ける。佛の此の仕組て、國民は皆隱居仕掛け、只公債證書を買込んで隱居仕樣と云ふ樣な風であるから、どうも國は進むと云ふ譯にいかぬ。勤儉貯蓄の消極主義で進取の計畫は甚だ乏しい、一個人でも一國でも使用しない金を溜める樣に成ては最早駄目である。殖民の如きも巧く發達せぬ

のは全く此關係あるて、敎育は總て官吏的敎育、社會は皆官吏的階級仕掛て、小學校の如きも同じく、優等の生徒には勳章や冠を着せる。凡て階級と褒賞を以て人を煽てゝ行く仕組に成て居る。是は奈翁の籠絡政略から起つた事て、自發自營と云ふ樣な事は、どうしても此佛蘭西の社會には起り得ない。成程後進の國が眞似をするには大に都合好く出來て居るが、國を發展させる方には甚だ都合の惡い仕組であると云ふことは、佛蘭西人中にも段々論ずる者もある。又た日本も政治の仕組はその流義であるから、隨つて青年輩が其の考て學問をし、世の中を渡り、立身し樣と云ふ事が、今の日本に甚しくなつて來た。然し日本社會全體に擴がつた所の所謂文明思想は、皆英米人の關係を持て居るから、滔々として一般の社會に流動するものは英米的思想である。佛蘭西流の官級制度の考に依て總體の社會は支配されない譯である。唯憂ふ可は政府が學校を立て敎育に干涉する爲めに、青年子弟の思想を偏狹ならしめ、敎育學問の方針をして社會の進運と背馳

せしむる樣な趣を呈して居るとてある。日本て今日最も考へねばならぬ事は、此の如き役人的の教育を受けて、役人になり、判任官から奏任官、奏任官から勅任官、又假令官吏にならずとも之と同じ樣な考へてやると云ふ如き詰らぬ事をせずして、獨立自營大に社會に雄飛し、海外に發展する方針を取らなければならぬ。よく人は日本人は海外發展の出來ぬ國民て有と言ふが、此は大なる間違ひて、之を歴史に徴しても明かてある、實は餘り海外に發展する勢が強すぎるから、德川氏が通商航海を禁じたのだ、國民が此勢て外へ外へと向つたならば、とても專制政治を續けて行くとは出來まいと考へたからてある。國民の海外に向ふスピリットと云ふ物は非常な者て、向外の氣象は三百年の鎖港に依て大に減却した今日てさへも、日本人が海外に出る傾向の強い事は、あの醜業婦が何よりの證據てある。日本に限つて女だけが外へ出て、男は出られない譯はない。往年スタンレーが亞弗利加探險に出掛けた時餘程奥へ這入て、此迄亞弗利加探險者も數多く

在たが斯る深入りをした者は自分の外には無と思つたら、何ぞ圖らん日本の醜業婦は已に既に其邊へ入込て居つたと云ふ笑ひ話さへあつた。之に由て見れば日本人はスタンレー以上の探險力を持つて居る。婦人既に然り、況んや男子に於てをやてある。論より證據、現に海外に向つて出稼移住する者が多いてはないか。然るに彼等が外國に往つて不體裁不正直な事をするから困ると云ふのて、外務省ても頻りに取締を嚴重にし、先方てもモンゴリヤ人を排斥するのてあるが、此も大に研究して見なければ成らぬ。唯外國へ往つて悪い事をするから、あんな者は送らぬが宜いと、單純に考へるのは間違つた話てある。成程色々悪い者もある、甚しいのは、病氣て入院し、親切な看病を受け、病氣が癒へて足腰が立つ樣に成と藥價を拂はずに塀を乘越へて逃出す者さへある。此んな悪い奴が本當の悪人かと云ふと必ずしもそうてない、只外國だから悪い事をする、と云ふのは或地方抔ては無盡講を作て、出稼に往く者に旅費を貸す、其金には非常な高い利を附

する、其金を拂ふには實に一厘一毛も損をかけずに元利共に支拂ふのである。故に此人は恰も一人にして二心ある如く、恰も惡魔と菩薩と兼帶して居る樣に思はれるが、是は則ち外國と自國の間に非常な區別を付けて居る人である。外國だからどんな事をしても構はぬ、唯國に歸つた時、鄕黨から齒されんては困るからと云ふ流儀である。一體日本人は八疊敷の座敷に親類朋友が集まつた時には、謙退辭讓非常に禮儀正しいが、汽車に乘ると人の場所迄取つて、寢轉んで見たり鞄を置いて見たり亂暴極る、旅の耻は搔捨てと云ふ根性を持つて居ると云ふのが、即ち右の如き甚しい內外の相違を起して來る所の原因で在と思ふ。此は數百年間日本は鎖港て、外國と云へば丸て人間以外の世界と云ふ根性が侵込んで居るからこんな事をする、決して根本から惡い事をする人間ではない、正直な人間て在が只直接名譽の必要な所には正直てある。故に此等の人も尙ほ亞米利加に永住することになれば、其社會の同情を欲せざる筈はないのてあるから、其土地に於て

も正直な人になるに違ひない。此理を考へずして成べく出さぬが宜い、旅行券などは下げぬが宜いと思ふのは間違つて居る。故に醜業婦ても出稼人ても、どん〳〵許すべきてある、移住出稼人の大多數は何れの國に於ても皆下等に極て居る。又醜業婦の出るのも日本ばかりてない、獨逸からも佛蘭西からも夥しく出る、勞働者が出て居と云つても決して氣にする必要はない。只外國と相違の點は彼は男女貴賤共に外國へ出る、日本は下等の女や勞働者のみが出て、よい人が移住しないと云ふ點てある。故に予の考へては惡い者の外出を止める必要はないが、唯よい者も出掛けて行く樣に成る必要があると思ふ。

殊に學問した青年の如きは大に海外に發達すべきてある。夫に付ても成べく出る便利を增さねばならぬ。然るに政府が旅行券を容易に渡さぬと云ふ事は、如何なる主意か甚だ分らぬ。旅行券の制は歐羅巴各國ては大抵廢止して居る。試に歐米各國を廻つても、旅行券を出せと云ふ所はない、唯だ

露西亞ては旅行券が非常にやかましい。其他土耳其位のものてある。西班牙葡萄牙さへ夙くより之を廢止した、苟も文明列國ては、旅行券を檢閲する所は無い。たゞ、郵便及び爲替を受取るときに往々必要がある位てある。兎も角も旅行券は旅行先の國から保護を受くる爲に必要なものて、之を政府が國民の海外へ出るのを防ぐ器械に使ふとは、全々旅行券の使用法を誤つて居るものてある。外國ても旅行券の要る者は外務省に言出るか、日本の如く六かしいものではない。譬へば英吉利ならば、今日外務省へ銀行又は醫者の紹介したる請求書を出すと、明日の十一時から四時までの間に必ず渡される規則になつて居る。日本の如く原籍所屬府縣知事を經て願書を差出し、人相から身元財産を取調べる、殊に田舍は其手續が六ヶ敷いのて態々大阪東京に管轄換をして願ひ出てても尚渡さぬ、之が爲に一身の方向を誤る者が幾許あるか知れない。實に人權の迫害てある。外國に遠慮する代りに內國の人民に迫害を加ふる如き政府は愚と云ふより外はない。只願

ふ所は官民共に一切の障害物を除て、旅行移住を自由にし、大和民族の膨脹發展を圖らねば、戰爭に勝たのみては何の役にもならぬのみか、益々立國の困難を增ばかりてある。

六　國外舊闘の勇を鼓すべし

往年八十日間世界一週と題する小說が出てゝ、大に天下の耳目を聳動した事があるが、今日では最早五十日間世界一週と云はねばならぬ場合になつて來た。今にもパナマ海峽開通が成功し、其上シベリヤ鐵道の速力が增加したならば、一ヶ月間世界一週は小說ではなく、實際の事實となる事は餘り遠からぬ將來にある事は確實てある。是に於てか我日本民族も大に發展して、天下に雄飛しなければならぬ運命を持て居るにも拘らず、兎角因循なる態度に出づは頗る不可思議てある。二百數十年間の鎖國政策の爲めに、日本國民は大に萎縮して、唯國內に蟄居し、海外へ踏出すの勇氣が沮喪し

た。然かし今日尙其氣象は殘つて居る事は此節、國民は外に向はうと云ふ傾向になつて來たから、大に喜ぶべきてはあるが、之を外國の狀態と比較すると、今の日本人は尙ほ餘程內氣てある。一般普通の人民が內氣なるのみならず、世界の地理歷史を知り、又種々高尙なる學識を具へて居る學生までが、遠く海外へ出ることを嫌ふことは事實てある。學校を卒業しても、まづ日本の中て仕事を求めやうと云ふことを考へる。甚しきは東京を去ることさへも好まぬ。是ては到底國家の進步を圖ることは出來ぬ。之と同時に各自の發達を計ることは到底むづかしい事てある。數多い學生が狹い處に蟠つて居つたのては、迚も手足を伸ぶる餘地はないのてある。滿洲ても朝鮮ても、南米ても北米ても、歐羅巴ても亞弗利加ても南洋ても、何處ても宜いが、まづ兎に角奮發して出掛けると云ふ考を起さねばならぬ。それには語學の心掛がなくてはならぬ。各々その志すところに隨つてその國語の嗜みが無くてはならぬ。歐米各國に於ても希臘羅丁の古典敎育を廢

して、近代語卽ち生きた外國語學の必要論が喧しいのも、宇內の形勢に促される爲めてある。日本の漢學の如きも唐宋の古文より支那の時文が大切てある。

元來遠く出るとを恐れるのは、子供の稚情てある。子供は一里許りも行くと、世界のはてへても來た如くに思ふ。或は親戚へ行つて、一晩も泊ると非常に自分の家が戀しくなつて歸りたがる。又野蠻人も同樣てある亞弗利加の黑奴などが遠方へ連れて行かれて、ホームシック卽ち慕鄕病を起し、それが爲に死ぬ者が多い。先づ原人學や人類學て野蠻人の事から、人類發達の事を研究した結果に因れば、極樂淨土とか未來の世界とか云ふ觀念も、其源は此慕鄕心から生じて來ると云ふ說をなす者がある。卽ち先祖の移り來たる國土の方向に極樂があるように云ひ傳へられる所から、極樂は其民族に依つて皆方向を異にして居る。我々日本人も西方淨土、極樂は西にあると云ふ信仰を有つて居るが、それは印度の輸入物てある。極樂は西方に

は限らないので、北方極樂を信じて居る人種もあれば、南方極樂を信じて居る蠻人もある。隨て死人を臥させるにも北枕とか東枕西枕、それ〳〵死者の向ふべき極樂の方を枕にすると云ふ習慣も、野蠻人は勿論の事、相當に開けた國民にも廣く行はれて居るものである。日本では宗教上では西方極樂を信じて居るが、習慣に於ては死人を北向に臥かせる、北方は陰なりと云ふ事に成ては居るが、其起源は二つの極樂說が結付いたのかも知れぬ。要するに、原人時代の故鄕病的觀念が次第に變遷して遂に極樂說となる。隨て葬式にも種々の種類を生じ、河葬海葬抔は原人移住の河海より來りたるを示し、又土葬にも種々の別があつて、棺にも船形のものを用ゆる等の事もある。彼の三途の川など云ふが如きも、蠻民の移住に困難なる河を渡つて來たと云ふ言傳へから、一の迷信、儀式にも殘つて居るやうな譯であろう。

要するに人間の幼稚なる時代、一個人に就て言へば小兒の時代、又民族に

就て言へば野蠻の時代は、もと出た處を慕ふて遠く行くことが出來ぬ。不得止遠く出づればそれを戀慕ふて病み、甚しきは死するに至る。それが段々に傳はつて、其の民族に極樂說を生ずる。人類が開けず交通の不便な時ほどその感じは深い。併ながら人智が開け交通が便利になると、往來自由、通信自在人間至る處に靑山あり、決して遠方に行つたからと云つて怖ろしいことはない、何處に行つたとて自分の智慧と自分の勞力を以てすれば、何時如何なる處にても極樂はある、必ずしも西方十萬億土まで行かぬとも、極樂は眼前に出來ると云ふ自信が出來て、始めて此國民が世界に發展することが出來る譯である。今日で言ふと先づアングロサクソン人種は世界を我家として橫行して居る。又一家族の內にも、自分の兄は印度に、姉は亞米利加に、弟は濠洲に、從弟は阿弗利加に居ると云ふ工合に、日本人より言へば一家離散の慘狀に陷つたやうなものであるが、世界の各地に擴がつても互に音信を通じて、少しも寂しく思はず、通常の心地で居る。凡そ是

迄歴史上世界に雄飛したる所の國民、即ち希臘人も羅馬人も無論當時知られて居る世界には盡く足跡を印せざるなく、中古に於て大に發展したる葡萄牙、西班牙等の人間も今日の如く蒸氣電氣もなきに拘らず、兎に角其時代に於て世界を股にかけて歩いた國民には、餘程吾々日本人の想像にも及ばぬことが多い。葡萄牙人の小説を見るに、子供が生意氣て、道樂でも始めさうて困ると言ふやうな時には、それをリスボンに置いては仕方がないから當分ブラジルの親戚に預ける。預けられる者も亦天涯萬里に放逐せられたとも思はず、當分田舍の叔父の家にお預けかと云ふ心地て行つて居る。斯くならなくては到底世界に於ける雄大の國にはなれぬと予は考へる。是は誰に依てやるかと云ふに、學問をし、能く世界の事情に通じて居る所の人がやるより外には仕方がない。

其處に至ると歐羅巴人は感心なもので、往年クロンダイクに金鑛を發見したと云ふのが、一時大にやかましい事があつた。クロンダイクは殆ど北極

に近い所て陸地てあるか氷てあるか分らぬ程の處てあるが、その方へ向てどんどん行く。予の同船にも阿弗利加のヨハネスブルグに働いて居つたが、面白くないからクロンダイクに出掛けると云ふ者が居つた。聞いて見ると、クロンダイクはどんな處にあるか、北緯何度にあるか、殆ど地理も何も知らぬが何か面白い事があらうと云ふてどん〳〵出掛けて行く。まづ下等の人間も上等の人間も此氣風を持たなければ、到底日本はえらくならぬ。戰爭て勝つたのはえらい、然しあれだけの勇氣と愛國心があれば、世界の各處に行つて、己の志を立て國威を輝かす覺悟がなければならぬ。之を敢行せぬ國は今日皆衰へて居る。即ち佛蘭西人の如きは歐羅巴のあの立派な國に居つて、今日の有樣はどうてある、決して將來有望といふ譯にはいかぬ。其譯は獨逸人英人に比して一つ缺けて居る所があるからてある。何てあるかと云ふに、外國に出掛けて働くと云ふことを恐れて居る。青年及父母の希望は學校卒業の上は其資格に依て官途に就き、うなぎ上りに昇進する事の

みあつて、決して奮鬪的生活を試みやうとはせぬ。故に國力は段々に萎縮する事になる。殖民地もあるが、佛蘭西の殖民地は人民の殖民地なくて、官吏の殖民地である。まづ阿弗利加海岸のチユニスの如き近い處は、稍々佛蘭西人民の殖民地と云へるが、東京あたりは、既に佛蘭西人民の殖民地ではなく、佛蘭西政府の殖民地である。佛國人が積極的計畫を試みずして、內外公債證書の利札を數へて蟄居する間に、段々其の意氣銷沈する。これに反して總て國民が自力を以て外國に行つて働く者は、今日でも中古でも古代でも、皆雄國となつて居るから、一等國である日本の國民は、大に奮發して國外に出て働かなくてはならぬと思ふ。之を斷行することは決して困難なる事ではない。多くの同國人が外國に行けば、互に助け合ふ便利も起つて來るから、何處でも宜い、此事の實現することを希望する。亞米利加の日本人排斥の如きは到底永くは續かぬ、自然に反對したことで、水の低きに就くを防ぐことは到底出來ぬものである。予は今之を豫言して置く、

決して永く續くべき者ではない。又之に對する日本政府の政策も誤つて居るが、是は永く續かぬと云ふことは斷言して憚らぬ。併し之は下等社會、勞働社會の事であるが、全體の勞働社會が外國に向つて發展して行くと共に、之が士官となり將官となる人も渡航せねばならぬ、是は即ち充分に學問のある所の青年の義務である。

七　國民の公忠

洋服を着て片田舍の地に往けば犬が吠へる、要するに自分の見つけない怪しい者が來たから何か害を加へはせぬかと自衞の爲から起るのである。之と同じく世間知らずの未開人などは、外國人を見ると直に吠へる。嘗て自轉車で世界を一週した旅行者の談話に、ペルシャに行つた所が、土人等は外國人は汚らはしいと云ふので傍へ寄りつかぬ、寫眞を見せるのに遠方から見て居るが、藥は貰ひたがる。外國人さへ見れば皆な醫者であると思ふ

のかすぐに藥をくれ藥をくれと云ふ。併し手に觸れると汚れると云ふ所から、長い杓子の如き物で遠方から其れを貰つて飲む樣子である。今日は立派に開化して居る日本に於ても德川氏の末葉、攘夷論が非常にやかましかつたが、二三百年も鎖港して居つた所へ、突然外國人が來たのであるから、しきりに之に向つて吠へたのも無理のない話である。何事をするか知らぬから吠付いて、追飛ばさうと思つたが、なか〳〵逃げて行かぬ。遂に今日の如く、內地雜居と云ふ迄に至つた。是もなか〳〵八ヶ間しかつたが、實地其れ程向ふから來もせぬ。內地雜居は種々の不都合を生ずるてあらうと、頻りに之を恐れて反對した人もあつたが、雜居をせぬ時の有樣を標準として、雜居後の事を速斷するが故に嘸面倒てあらうと思つたのである。今後門並西洋人が居るやうになれば、尙更ら珍らしくなくなるから、其時は全く吠へるのは歇むてあらう。凡そ現在を以て將來を想像する、有樣の變つた時の事を想像すると云ふ間違は世人に免かれない所てある。併し舊思想

の連中には今日も尙排外思想があつて兎角種々の點に於て禍を爲すに至る。近來よく歐羅巴人が謂ふ所の黃人患と云ふことも、毫も根據の無い愚論てあるが、或一部の排外論又は商賣上の取引振りから、幾分か此愚論を尤もらしく聞へしむる節もある。外國の商賣ならば少々は嘘をついても構はぬとか、損を被けても構はぬとか云ふ事が、常に其の禍をなす所の主因になつて居る。嘗て我が商業社會を代表した所の一紳士が、倫敦の商業會議所長に面會した。向ふは此方から面會を申入れたのてもあるから初對面の挨拶をすると其儘默つて居る。此方の先生も何とも言ひ出さぬから、先方からどう云ふ用事であるかと云ふから、實は日本の商業上種々敎を請ひたいと言ふたのて。日本の商業工業に就いては度々吾々慨歎することてあると云ひながら、彼の無口の英人は急かに雄辯滔々喋舌り出したのは、從來日本人が取引上に不信の廉々を表する事實が、領事其他の機關に依て報告されて居る。其報告の事實を覺えて居つて一々言はれたが爲に、此方も大に

赤面をした。成程外債に就いては、無論政府の手際は非常に悪い、抵當付の高利、不名譽極まる借方て、海陸戰捷の大功を丸て沒却した大不手際な募債てあるが、併ながら平常の商業的不信用も幾分の手傳をして居るに違ひない。往年中央亞米利加のパラグワイに於て、外債破棄を行つた後は外債は丸て駄目になつた。アルゼンチン共和國、智利、白露等の如き南米の諸國には莫大な外資を輸入して、種々の經營をなし、うまく成効せぬ曉には債主に損を掛けるので、是等の其國が信用を失つて居ることは、其例甚だ多い。平常外人の權利を無視し、又法律上不動産の所有權を認めぬことは外人に一種の疑を懷かしめ、肝要の時に外債を募つても旨くは行かぬ。嘗て某先生が佛國へ行て里昂の生絲屋に案内されて、日本の生絲を取扱ふ部分を見た。一人の老婆が、あなたは日本のお方てすか、日本は非常な商賣の下手な國と見へますと云ふ。其譯を聞くと、私は毎日日本の絲を扱つて居るが、此日本の絲に限つて上べの方には奇麗なのが乘つて居る、下程

悪い糸が出る段々取出して積み上げると、底に詰めてある悪いのが丁度上の處に出て來ると云はれて大に閉口したと云ふ。種紙は罌粟粒の如きものてあるから之を糊付けにして賣つた。一度はかなり賣れたが、其次には實際の種紙を見せても、罌粟粒てあると云つて買はぬ。甚しきは外國へ出す生糸の内には、製糸職工さへ何の爲めに如此劣等品が外人に賣れるのか分らぬから、外國ては之を棟り換へて善良にする所の機械があると信ぜられて居た位てある。此等の悪品は彼地の商品陳列所に展列されてあつて何時迄も日本の耻辱に成て居る。併し日本人元來の性質は、果して如此ものてあらうかと考へて見るに、決して然らず。何かの間違から來たのてあるから、是は又何かの間違て直ることに違ひない。昔からの事を考へて見るに、決して此攘夷的スピリット、即ち排外思想に富んて居る國民てないことは、歴史に於て證明されて居る。昔支那或は朝鮮などを排斥した事は少しもない、呉と交易を開き、唐から使節が來ると言へば、わざ〳〵大なる道路を

造つて之を歡迎する等其他官民の交際上、段々文物を輸入して多くの利益を得て居る。又後に至つては葡萄牙、西班牙、和蘭などより、宗教を勸め通商を促して來たが、之に對する排外運動もなく貿易も盛てあつたらしい。譬へば予の舊藩主紀州家に藩祖以來の寶物として居る猖々緋の敷物がある。其猖々緋がどうして日本に來たものか、誰れも知つた者は無かつた、然るにそれが却て倫敦の大英博物館の書籍館に於て其由來が分つて居るとは面白い事てある。即ち葡萄牙の商人が爪哇(ジャワ)其他に往つて其れを賣らうとしたが、中々買ひ得る者がないから日本長崎に持ち往き紀伊殿に買はれたとあるは、此時分の領事の報告に伊紀殿とあるは、即ち頼宣公の事てある。これは一例てあるが、日本に持つて來れば他の東洋諸島に於て賣れぬやうな貴い物ても賣ることが出來た。決して日本に品物を賣ると代價が取れぬとか、日本から物を持つて來ると僞物が多いとか云ふ如き報告はなく、西班牙、葡萄牙、和蘭の領事等の報告でも、決して日本は商賣上虚言を吐く國

民てあると云ふことは書いてない、誠に正直に、誠に立派なる國民てあると云ふことが皆古書館の書類に殘つて居る。然るに文明の今日に於て、彼の商業會議所に向て、日本人は商賣上に於て不正直不信義、甚だアテにならぬ國民てあると云ふ如き報告が續々往つて居ると云ふとは、如何にも不思議なる現象てはないか。昔の貿易は却て上手て、今日は甚だ下手てあると云ふとは、如何にも合點の行かぬ話てある。全くこれは封建の遺風として、武士のみを尊んて商賣人を卑んだ結果、商賣人自らも自分を輕蔑し、商賣は唯利をさへ得れば名譽も德義も構はぬ、と云ふ氣風の所へ又二百年以上も鎖港して居つたが爲めに、外國人を異類視して其權利も感情も顧みるに及ばぬと云ふ如き心持になり來つた爲めてある。一言に之を云へば排外主義と官尊民卑とが結付て、日本人の本性に無き不正直を外國商賣上に働く事になつたかと思はれる。

然るに日清、日露の戰爭に於て我軍の爲す所を見れば、戰局の大勢を觀る

事明かなると同時に、微妙零細の諸點に周密なる注意を拂ひ、以てよく文明の利器を利用し、能く文明の學術を應用し、而して忠勇の氣慨は其間に充滿して、將卒共に各自の職務に熱誠なる上に、敵に對しても慈仁の美德を發揮すると云ふ譯て連戰連勝の名譽を得て居る。此の如き大器量を有しながら、一方の工業上商業上に於ては失敗を重ねて居ると云ふことは不思議なる事實である。戰爭上の優劣も經濟上の勞力の效果即ちエフヒシエンシイ、ヲブ、レーバアも同一で、全く智德體諸力の綜合の結果に外ならぬ。身體の弱い者より強い者、愚鈍なるものよりは智巧な者、無責任なるものよりは正直に職務を盡す者の方が同一の時間に多量の優等なる仕事を爲る。之が勞働の効果であるが、即ち我國民は戰爭に於て此三拍子揃つた腕前を顯はして居るに拘らず、平和の戰爭たる經濟的方面にはその反對を示して居るのは理屈の合はぬ事である。露國の人民は戰爭力弱く經濟的勞働の効果も劣つた人民であるか如く、英米國民抔は勞働の効果も勝り、同時に戰

爭にも強いのは、全く此文明の世に於ける戰爭と實業とは同一の法則に基て居る證據である。平和の戰爭に於ても將校兵卒共に揃はなければならぬ。工場の監督人が夥多しき職工を監督し、其規律を正くし、恰も自分の手足を使ふ如くに之を使役し、能く各自の任務に服役せしむるは則ち軍隊の將校が、數萬の兵士を指揮號令するのと少しも變つたことはない。又社長重役が營業の方針を定め、全般の機關を組織調合するは、參謀部の策戰計畫に少しも異つた事はない。世の中の段々進歩するに從つて、政治は次第に合議的に傾いて來るが、實業の方は蒸汽機關の下に職人を多く集めねばならぬ事になつて來たので、純然たる軍隊組織に傾いて、所謂インダストリヤルアーミーになつて來た。其の實業軍の將校たる會社の社長以下の各役員の下に、兵卒たる工女工男は寄宿舍内に舍營するに至つた。此等の組織は人權の點より見れば議論の餘地もあり、又之は主もに蒸汽機械に伴つて來た所の制度であるが、將來或は電氣を各家に引入れて、職工は家庭的仕

事と爲すの時節が來るかも知れぬ。兎に角今日の所では實業方面も尙ほ軍隊の組織でやらねばならぬ。此の如く兵事工業同一の今日に於て、鴨綠江畔又は南山の役には敵軍に比して常に優つた勞働の効果を顯はしつゝある日本人が、紡績其他の工場に於ては監督も行屆かず、職工も甚だ不規則にして、經濟家の所謂名の賃金は安く實の賃金は頗る高い職工を以てしては、勞働の効果は頗る劣等である。又其將校も英米の實業家抔の如くまじめなる風に乏しく、堅氣一偏で世を渡るべき種類の人間でありながら、一種の交際社會の流行紳士の積りて、歌舞宴燕に日夕を徒費すると云ふ流義で、寡婦や孤兒の血の出る如き金を預りて、之に利息を付ける大任を引受けて居る心持で、汗水を垂らして會社を監理する人は甚だ少ない、此二つが旨く成効せぬ原因になつて居る。

併し戰爭だけがうまく出來て、商工業がうまく出來ない理屈はない。日本人は立派に其資格を備へて居るのである。工夫となり、監督官となり、商

人となつて其れがうまく行かない筈はない。畢竟軍事のみが大切と思考し、實業を輕んじたる偏重偏輕なる敎育と傳說との結果ではあるまいか。故に平和の事業に於ても職務に忠實なる所の國民となるのが、非常に大切なる事であり又出來る事である。修身要領に所謂職務に忠實なるを要す、職業に貴賤の別なしと云ふはこゝの事である、人各々其現在の地位に對して責任を重んずべきもので、大閤も初より關白豐臣秀吉ではない。木下藤吉の時代もあれば、羽柴筑前守の時代もあつた。忠實に草履を取り、按摩をなし又普請奉行もして、皆な其仕事を一生懸命に勉めた。而して遂に天下を掌握する所の關白秀吉となつたと云ふことは、英雄の英雄たる所以で、即ち各々其人の地位に應じて職務に忠實なることが貴いのである。學生も後にはどんなゑらい人にもなるだろうが、それには學校に學ぶ間は學生として最上の學生でなければならぬ。國民全體に於て戰時には勿論平時にも頻る大切な事であるが、漠然とした考で忠義を言ふて居つては駄目である。

唯何か昔の封建の武士が其君主に仕へた儘の忠義、今日より見れば是は從僕の其主人に對して行ふべき私忠である、之を國民全體の公忠と思つて居るのは大なる間違で、國民全體の公忠と云ふべきは、兵士となつては其兵職に忠なるが如く、又平和の良民としては各自の職務に忠實であることが、日本全國に行渉つたならば、富國强兵は忽ちにして實現せらるるのである。

八　國格論

予は國格と云ふ言葉を作つた。人格といふ言葉が流行するから、國格といふ言葉も通用するだらうと思ふ。一國の品格即ち國の格附を意味する。米にしても肥後米は何等、勢州米は何等と云ふ如く、國にも必ず格がなければならぬ。尤も今日世間普通に云ふ所の一等國、二等國、三等國と言ふは、今予の謂ふ國格と云ふことには直には當箝らぬ。只兵方が强く國の面積が廣いと云ふのみでなく、無形の要素を參考せねばならぬ。而して、其最も

重なる要素は其國民の品位である。國民の品位と云ふも、何れの文明國に於ても、下等社會は劣等者多く、上等の者になると、墮落者が多い。然らば何が其國格の要素となつて居るかと云ふに、其國の中等社會である。極て眞率の態度を以て、己の業を營むのみならず、社會の爲にも盡瘁し、其國の中堅を作るものである。此種族が無ければ、決して眞の文明國として發達し得ぬのみならず、國の存在を保つことすら出來ぬ。無論今日國際上の關係から、國の滅亡までに至らずとも、漸く存在して居るものゝ如き、眞の國としての存在は無くなつて居るのである。又歴史に徵しても此中等社會を缺くが爲に、滅亡した國は少からぬ。波蘭の分裂などは、所謂其國の中堅たる中等社會が無かつた爲に起つた。貴族は懶惰放縱であり、又下等人民は唯衣食に苦んで居つて、國の爲めを考へる遑がなかつたのである。而かも其中間の良民がなかつた、其首府ワルソーに賣國奴の碑と云ふものが建られてあるが數名の貴族が敵に内應して國を賣つた紀念である。又土

耳古の如きも、全く此社會の缺乏の爲に今日の衰頽に及んで居る。朝鮮の如きも、嘗ては二重冠をした所の文武兩班なる者と、其下に、唯蠢爾として生息して居る所の下等社會とであつて、其の間に何等の中等者の存在なく、誠に氣の毒な有樣であつた。

日本は先づ東洋の中に於て大勢力を有つて、益々進歩せむとするのは何であるかと云ふに、此國を率ふる所の中堅となる社會を保有して居るが、故に一種の異彩を放つて居るのである。併し此中等社會、或は或る意味に於ける上等社會なるものを大に改良する事が今日の急務であらうと思ふ。予は之に就て切に感じて居る事がある。旅行をすると地方の有力者に逢ふ事が多い。中には相當の學校を卒業した人も少からぬ。其人々は財産もあり、學問もあり、皆立派なる人である。これらの人々と色々話をして、全體諸君は地方に居つて面白い事が多からうと云ふと、どうもさう云ふ譯には往かぬ、何分仕事が無くて暇で苦んで居ると云ふ。苟も相當の頭腦を有つて

居る人が、仕事がなくて困ると云ふことはない。又滅多な事をすれば却て財産を失つて仕舞ふと云ふので、假令自分は事業を爲す氣でも老人が許さぬから到底行はれぬと言ふ。此の如き訴へは度々聽く所である。併し是は甚だ間違つたことで先づこれらの人々が最も社會の爲に盡して呉れなければならぬ。所謂カントリーゼントリト、支那の言葉で鄉紳と云ふべき人である。其鄉紳なる者が仕事が無くて困ると云ふに至ては、國の爲に甚だ嘆ずべきである。差當り村の小學校へ往つて敎へたら宜かろうと言ふと、それは小學校に敎師が有つて吾々が往つて別に敎へるにも及ばぬと云ふ。これが抑もの間違である、今敎育に就ての議論は隨分やかましくなつて居るが、就中敎師の人格が低くて獻身的の敎育をして呉れぬと云ふとは、吾々日常耳にして居る所である。又一方から云へば何萬とある所の敎師に向つて悉く獻身的にと云つて望む譯には往かぬ、敎師に限つて金は少なくとも人の十倍も働くと云ふことは、拔群の人に望むべくして、一般の人から期

待する譯には行かぬ。僧侶は悉く木食上人に成れと云つても、それは到底出來ない相談である。然らば家に財産有り、身に智識有り、人の上に立つべき地位に居る人が之が先驅をせねばならぬ。則ち此鄕紳なる者の天職は何であるかと云ふに、所謂ピープルスグード。一般人民の爲を圖り、公益を進めて、而して社會を率ゐるのである。小學敎育の如きは自分が熱心してやれば、非常な興味をも感じ、人の尊敬をも受けることができる。敎師を傭つて來なければならぬと云ふことはない、優に生徒を敎へるだけの學力もあり、又必ずしも小學敎員たる俸給に據らずして喰ふことの出來る人である。之が爲に喰はなければならぬと云ふ考へでなく、村の兒童を育てて第二の國民を作らうと云ふ考へでなく、是れ程面白い事はない、又是れほど天下に有益な事はない。學校のみならず、牛馬の改良を圖り、土地の整理をなす等勸業上なり其他慈善博愛のことに就ても地方紳士に適當なる仕事は多くある。これが爲めに必しも自分の財産を拋たずとも勞を以

て盡すならば、其効果は顯はれる。仕事で盡すも金を出すも結局同じことであるから、將棊を差し碁を打つ問にこれをやつたならば、それ以上の樂みがあるではないか。

世間では英國が國格の高い國であると云ふが、必しも英國の下等社會が悉く立派なる人間でもない、勞働社會は日本よりも甚しく粗野の者もある。又貴族社會も悉く宜いかと云ふに、是れも如何はしい者が多い。成程顏だけは立派かも知れぬ、邸宅は立派かも知れぬが、晝夜宴會を駈け廻る、この社會には甚だしい弊風も行はれて居る。唯眞面目に地方の民を導く所の鄕紳なる者が英國には到る處散在して鄕黨の牛耳を執る。此一事が即ち國格を高めて居るのである。それらの人は何をして居るかと云ふに、所謂國利民福を圖らんが爲めに、或は學校へ往つて敎へる人もあれば、或は家畜の改良に盡力する人もある。之が即ち英國をして九鼎大呂の重きを爲さしめる所以である。又佛蘭西は國の根據が確實でなく、其が爲に度々動搖す

る。能く人の言ふ如く百年の間に廿回も政體を變革したと云ふのは、何から起るかと云ふに、此國の根據中堅となる所の社會が不十分であると云ふ事が、此國をして不動泰山の如くならしむる事の出來ない譯である。佛國には英國の如く地方々々の指導者となり、自由の保護者となる所の中堅社會を缺いて居る爲に、此の如き相違が起る。是は歴史上に淵源する所が深のであつて、佛蘭西が封建を倒し中央集權の政策を採つた時に、地方の大名を巴里或は「ヴエルサイユ」に集め、爵位勳章を以て貴族の虚榮心を刺激し、宮中の宴燕歌舞、都門の風流華奢を以て彼等を醉はしめた。即ち德川幕府が三百の諸侯を集め、榮華に醉はしめたと同じく、現に巴里のシヤンゼリゼー街に貴族富豪が軒を列べて立派に住んで居たのはルイ十四世時代からの事である。此の如く巴里は頗る立派であるが一歩田舍へ出れば、誠に見る影もない。所謂卿縉たる者が其主動者となり中心となりて地方のことを指導して居らぬのが佛蘭西國體の弱い原因である。英國の方は、全く最初

封建の儘に諸侯が各地に住んで居つて、其人々が地方の爲に力を盡し地方に於て勢力を有し、所謂自由の保護者となつて、國民を指導する。此れが兩國間に非常なる相違を爲した原因である。英佛二ヶ國のみならず、世界中何れの國を比較するも、中等社會を有つて居る國は保守の如くにして實は進んで居ると云ふ確實な所がある。

土耳古埃及などの衰亡國を見るに當世流の人間は巴里又は倫敦に遊んで教育を受け、少しは世界の事情にも通じて居るが、兎角上すべりをして一向頼むに足らぬ。又地方に土着の名主土豪なる者は頗る確實にして頼もしい風であるが、是は又丸で世間を知らず、偏に狹して共に當世を語るに足らぬ人間で到底國家を維持する事は六ヶしい。故に我國に於ても今後は學問も相當にあり、世間も知つて居る人々が、各地に散在して鄕黨の牛耳を執ると云ふやうな事にならなければならぬ。

此外に又予の大に問はんとする所は今の世に各種の學者は何をしつゝある

か、其學者の方針は國の品位と發達とに非常なる關係を有する。今日の學者の傾向を察するに、學問をすればする程其人が社會の役をなさぬやうになりはせぬかと思つて居る。何故なれば學問をする程、自分のみがえらくなつて仕舞つて、世間には成るべく遠ざかるやうになる、これぞ卽ち學問の中毒であつて、其結果は遂に國の中毒ともなる。これは餘程注意すべきことである、段々學問が進み學者が出れば出る程、智識が世間一般に擴がらねばならぬ。否ざれば何の爲に學問したのか少しも分らぬ。學問を自分一人の懷に入れて威張つて居やうと云ふやうな者があつたならば、これぞ卽ち學問の守錢奴であつて恰かも昔日の秘傳秘法の獨占流義を文明の今日に行はんとする所の愚物である。日本でも多くの國帑を費して留學を命じて學問を研究させるが、其學者は唯學者ぶつて居つて、少しも其學び得た所を通俗にして、世間に擴げると云ふことが無いやうである。學士會院も創設以來三十餘年になるが、何をして居つたか分らぬ。鳴かざること三年と

云ふ事はあるが、三十餘年の間鳴かぬとは餘りの事である、西洋諸國は此點に於ては大に活動し、殊に言論自由の國に於ては、事々物々人の談柄となり、學者の說が溶解されて民間に流通する。歐州の二大學士會院は英のローヤルソサイティーと佛のアンスチュート、フランセイズである。只佛蘭西の學士會院は一種の役所の風を佩び、英吉利のローヤル、ソサイティーは王立と云ふ名はあるが、其實は學者の倶樂部の樣なもので、年々六十人の候補者を作り、其中から十五人づゝの會員を選ぶのである。有名な學者を會員に選ぶのである、其の學者中には隨分えらい人がある、譬ばファラデー、ハンブレーダビー、ハークスレー、チンドル、ケルビンの如き大學者が會員であつて、學者の研究の結果を國民一般に知らせることを勗めて居る。決して學者の會であるから素人には容易には聽かせぬ、素人にこんな事を言つても分らぬと云ふ如き學者ぶつた風は少しもない。ハーバートスペンサー、チャールス、ダルウヰンの如きは、ローヤルソサイティー

の如き自由の學會と雖、尙之を一つの人民と學者の間の障壁と考へて、斯う云ふものは無い方が宜いと言つて居つた位てある。故にダルウヰンの親父も、祖父も其會員て、有名な人てあるが、ダルウヰンは一年に一遍しか出なかつた。其他は始終民間に向つて直ちに自分の研究の結果を報告し先生の六かしい進化論が、オリジン、オヴ、スペジース、デッセント、オヴ、メンと云ふ如き通俗な書物となつて現れ、只純然たる學術的の點丈は一般の人には分らぬから、學者間の事にして置いた。又チンドルも人民と接するを望んて學士會院長てあり乍ら、大膽にも熱は運動の一現象てあると云ふ斬新の說を夙に唱へ出し、之と同時に煙突、溫室機に關する學說等、民間日用の事に付て有益なる講話を試み、又勢力不滅、勢力變現の法則に付て、新說を唱へ天下の耳目を聳動した。即ち今を去ること三四十年前に、力の不滅、力の變現と云ふことを唱へられたのが今日科學大進步の本てある。電氣、熱、光とか云ふ如く分れて居るが、其實は一の運動にして熱も光も

電氣も神經力も同一力の變現てあると云ひ出したのが、之れ今日光學熱學電氣學等の非常に進步して來た本てある。チンダルは常にアルプス山中に閉籠つて研究して歸つて來ると、其研究の結果を公衆に向つて談話した。其說明の方法が一般によく人に分り、又それが如何にも空論てなく、實地に其の應用が分る。例へば熱の講義にしても實際の應用迄に及んて、お爨には飯のたき方、權助には風呂の焚き方、製造工業者でも、總ての人に學問の恩澤が及ぶ。然るに何ぞや、吾々の學問は高尙てある、吾々の學問はむづかしい、なか〳〵素人には分らぬと云つて、徒らに鼻を高くして居る連中は、ダルウヰン又はチンダル以上の學者てあらうか。學問は何の爲にするかと云へば、國のため社會の爲にするのてある、故に此社會一般の人に利益を與へるやうに說明するだけの力と親切が無ければならぬ。是を以て學者が社會から尊敬を受けるのてある。只大學者てある大博士てあると云ても、何をして居るのか薩張り分らぬと云ふのては、社會も尊敬の仕樣

がない。昔希臘のプラトーは希臘の孔子とも言べき人である。此プラトーは最上等の人より最下等の人まで一所に集めて演說をする。大學者も聽いて非常に興味を感ずれば、又車夫馬丁もその同じ演說を聽いて又非常な興味を感じたと云ふとは、歷史にも殘つて居る。併しながら此プラトーの住める庵の門額には、幾何學を解せざる者は此門に入ることを許さずと書いてあつた。少くも幾何學の理屈ぐらゐ分つた者でなければ門人とせぬ。直接の門弟として學問の蘊奧を究むる者は、それ丈の數理が分つて居らねばならぬ。併ながら此學問たるや學者の爲めの學問ではない、國民の爲めの學問であるから、國民一般に向つて話すときは親切平易の文章言語を以て深遠の理論を了解せしめ、上は大學者大政治家より下は車夫馬丁に至るまで、同じ話を聽いて共に興味を感ずることが出來たと云ふのは、實にプラトーの尊い所以であらう。假令人悉くプラトーたることを得ざるまでも一般の人民に話して興味を感ぜしめ、利益を與へると云ふだけのことがなければ國

民の指導者として尊敬を拂ふ譯には行かぬ。これらの方法に依て國民の程度を高めてこそ國格も上がるのである。但し學者の本分は自家の研究を積て發明工夫を爲すのである。決して通俗に話せばそれでよいと云ふ譯ではない。學者の本分は眞理を闡明し發明工夫に盡瘁し頗る研究的にして且つ生產的なる生活と、之を通俗にして民間に流布せしめ、其の發明を利用せしめ得るより一般の智識を進むる敎育的生活とを兼ぬべきものである。以上の如き理由に於て國格を向上せしむるは畢竟鄉紳、學者の任務であることを斷言する。

九　體力は國力なり

運動と云ひ、體育と云うても唯だ毎日體操、遠足、競走をする計りを謂はぬ。先づ人は一擧一動、總て敏活に働くと云ふことが大切である。朝夕の間に、成る可く自分の手足をマメに働かせ、人を使はぬやう、車に乘らぬ

やうにするのが最も自然にして健全なる運動法、養生法であると思ふ。例へば學生ならば、自分の部屋を自分で掃除するは無論、廊下も庭も一部分は自分で掃除する。只机の上だけ綺麗にして、濟まして居ては、迚ても手も足も強く成りやうがない。然し日本の習慣として、成る可く人を使つて、自分の手足を動かさぬ事を以つて上品とするの惡風は、中等以上の男女をして腐敗せしむる大原因である。此惡風を掃蕩しなければ百事皆な駄目である。昔し羅馬帝國が贅澤に流れ、貴族の惰弱に陷つたときの事情を、セネカと云ふ人の書いた物の中に、或る貴族が浴場から休息室へ運ばれて椅子の上へ載せられた際に、己れは今湯へ這入て居るのか、寐臺へ寐て居るのか、と云ふ問ひを發した。自分で自分の身が分らぬまで、甚だしき惰弱に至つたと云ふ事を書いて居る。而して今日の西洋人が此等の書を讀み、此等の話を聽いて、人間が斯くまで無神經に、斯くまで遊惰に流れる者かと怪むて居るが、併し日本人の耳に聞いてはそれほど驚かぬ。僅か數十年

前は斯くの如き人間は幾らもあつて、上は將軍より、下は木の葉大名に至るまで、全然この有樣であつて、彼れ等は何んても自分の手を以てすることはない。福澤先生がよく話されたことがある、幕府の城中で便所の椽側に一人の大名が手水鉢の側で、兩手を差出して立つて居る。實は常に坊主(給仕)が水を掛ける筈であるが、折惡しく坊主が居合さぬ。あまりの氣の毒さに、水を掛けて進ぜたとの話である。先生もそれ等のことから大に慷慨し遂には廢藩論をも試むるに至つたのである。此柔弱者の先祖は何人かと云ふに、千軍萬馬の間を往來して、萬死の間に一生を得て、一國一城の主と成つた所の身心共に活潑なる日本第一流の豪傑である。其豪傑の子孫が、此の如くに成て仕舞つた。平家の荒武者も、僅か二十年の榮華の夢に、軟化されて鳥の羽音に驚き壞亂する如き貴公子となり果てたのも此の道理に外ならぬ。又昔し西班牙の國王が書齋の内に在て、ストーブの火勢が強よ過ぎて堪えられぬ、しかし自己の手を以て戸を開くが如きは、王者の威嚴

を損すると思て、遂に窒息して死んだと云ふ話もある。斯る事例を考へると、習慣程恐しいものはない。事々物々自ら活潑になす者と、人を使ひ遊惰に流れ行く者との間には、殆んど天地霄壤の別をなすやうに成る。是は上は人類より、下は昆蟲等に至るまで、共通したる生物學上の通性である。英國に有名なるジョンラボック氏は、好んで蟻の研究をする。その研究の結果に依つて見るに、蟻の内でも、強い種族が弱い種族を征服して、其捕虜の蟻を奴隷にする、食物は其奴隷に取らせる、他の勞働も一切之に命じて、自分等はたゞ遊んて居る。此勝戰者たる蟻は、自ら食ふ事さへも出來なくつて、奴隷が食物を主人の口へ注ぎ込んてやる、純然たる大名蟻が出來上る。此の如き蟻族は遠からず、自滅するか、他の强族に征服されてしまふ。これが蟻帝國の興廢史てある。斯かる恐るべき優勝劣敗の實物教科があるにも拘らず、日本人の惡習慣は今尙ほ昔の殿樣流を繼續して、少しても餘裕あれば、多數の婢僕を使役する、學生まて下宿屋の下女を使つて、

郵便を出させ、燒芋を買ひにやる、此學生が卒業の後少しく給料を取るに至れば增長して殿樣流になる。誰某は此節大分えらく成つたさうだと云ふと、玄關番が居る、取次が居る、車夫が居る、女中が居つて、主人がどれだか分らぬ。僅かの家内に多くの人を使つて、家が治まらぬとか、内がもめるとか他人にまて不平を云ふ。是ては誰の家てあるかさつぱり分らぬてはないか。

是れも福澤先生の話てあるが、先生が初めて、亞米利加へ往かれた時、大統領の家へ往つた。此の時の大統頗は有名なるリンコルンてある。案内を乞ふと變な爺イさんがヒョッと首を出した、先生はどうか大統領に御目に掛りたい、日本使節の隨員てありますと云ふと、アさうか私が大統領だと云ふのて直に對談した。先生は驚いた。大統領は日本て云へは、德川將軍てある、將軍家の通過の時は、數千人の供を連れ、江戸中の人家は節穴へ目張りして、見ると眼が潰れる程の神樣と崇めて居つた。其相違には驚た

も無理はない。何ても簡易活潑でなくてはならぬ、今の世の中は、日本流の習慣では迚もいかぬ。尤も人間の生計の度は段々上がるのは當然であるが、それは實質的に進むべきである。只人間を竝べ立てゝ得意とするは、奴隷時代の遺風に過ぎぬ。中には多くの書生を玄關番にし、私の家には何人の書生を養て教育すると、大自慢の人もある。成程無意味に多數の婢僕を養ふよりはよいかも知れぬ、しかしそれほど教育に熱心なれば、其の金を然るべき學校へ寄附するが宜い、これは己れの家で養つた人物であるなどと、手製の品を誇らうと云ふは、まだ〳〵垢抜けのせぬ所がある。國家に俊才の多きを望むならば、何故に今一歩を進めて、モット共通的手段を取らぬであらうか。其の方法は甚だ多い、直接の方法を望むならば、俊秀の學生を學校に托するもよし、又講座を設けて、其給料を受持つもよし、書籍、家屋等寄附の目的は少からぬ。學校は之れに對して、寄附者の名稱を附し、永世之を傳ふるの方法もあらう。併し物には順序があるから性急

にも行かぬ。齊一變して魯に到り、魯一變して道に到らんと云ふ次第で、兎に角世間は追々正當な方へ向つて來る傾きてある。要するに人間が、人間を使役して、之れにかしづかれ、一身の墮落を來し、社會の生産力を害するは歎かはしいことで、彼の徴兵の爲めに全國の壯丁を不生産的に使役するよりも、この婢僕使用の習慣は幾倍の害をなすか、じつに測り難いのである。

しかし日本人の體格は近來體育を重んずる爲めに、餘程良く成つて來た。男子のみならず、婦人もなか〳〵大きく成つて、おッ母さんより背の低くい娘はないと云つて宜い。婦人は男子より小さいのが天性のやうに考へて居たが、今日の經過を見るに、中々大きくなる見込がある。是れは運動もすれば遊戯もする、又た行儀作法の標準も變化した爲めてあるが、此等有形上の原因のみならず、大體に於いて婦人の檢束を解いた。卽ちエマンシペーションと云ふことが、精神上偉大なる功果をなすに相違ない。女人禁

嶋の高野山が、門戸解放をしたと云ふ一事でも、婦人の社會的拘束の緩んだ一例で間接に幾分の影響はある。然れども未だ社會上に婦人束縛の尙ほ多く殘て居るのは、守舊家の頑迷不靈の爲めであるが、しかし是等は直に落城に及ぶであらう。兎に角今日十一文申高の足袋を穿く美人は珍しくないといふことは慥かな事實で、白魚の如き指を誇る令孃は最早時勢後れの人となり果てた。婦人の體格は歐米に於いても、最近二十年程の間に、最も著しい發展をなしその經過は實に驚くべきものである。これ皆體育の進歩、習慣の活潑、境遇の自由等の事情に基因するものと認められる。或る國では婦人が、却て男子を凌駕するやうに成つた。男女同等に教育し、ひとしく體育に從事せしむると云ふことは、文明國一般の風潮となり、日本も此の點に於いて、いちじるしく進歩を見るやうに成つたのは、喜ばしいことである。

競技の如きは、英米に於て最も盛んに行はれる、是には隨分弊害もあるが、

要するに英國人種なる者が、今日の世界に雄飛して居ると云ふことは、彼等の學識、才能よりは、この遊戯が役に立つて居る。殊に英國人の到る所殖民に成功するは、之がためであると云ふことは、體力の發達のみに止らずして又た德育に好影響を與へるものであるが、成る可く德育を體育に結び付けてやらねばならぬ。體育卽ち德育にして日本封建時代の武藝も、德育のため大功を奏し、武士道は主として之が爲めに發展した。今日の新競技も、公德を進め、私德を進むるに於ては彼の四角張つた論語の講釋よりも、此の快活なる競技に於て、敵味方別れて、雙方熱心に、殆ど血液の湧き返へる如き有樣になつて、其事を實際に演ずる方が遙かに效能が多い、どうしても實際上の德育は競技に在る。予は之を實行的修身教科にしたいと思ふ。

全國に此の體育法を擴むる爲めには各都市より之を始むるがよい、先づ東京、横濱、大阪、京都、神戸を初め、市民の振手を作つて、各市互に競爭

する事を望む。凡そ都市は文明の中心にして、人智の最も發達する所であるが、文弱に流れ淫風の行るゝも都市である。隨て身體の惡いのも又都市である、現に先年來、各學校及商店の體格を調べた結果、商店員の體力が一番劣つて居る。勿論食物も空氣も惡い、所謂都民なる者は段々衰へて、三四代を經て血脈斷絶すると云ふ、都市生活の害は文明の進歩と共に益々甚だしくなる。此の弊を防ぐ上に於いても、此等勇壯活潑の遊戯を奬勵せねばならぬ。要するに日本が、歐米各國と對立し、進て之を凌駕し、又殖民國として民族の發展を計る爲には、體育が最も必要てあると信ずる。

一〇　人種的憎惡は永久ならず

總て國民と國民との接觸が有ゆる方面に於て行はれるときは、互に民情を解し、互に習慣を解し、互に相融和するは是は自然の道理てある。唯政府と政府との交際、王者と王者との交際の外に、成るべく商賣人は商業上に、

學者は學問上に、美術家は美術上に、又運動家は運動上に接觸して、成るべく國際間の接觸を頻繁にすることは最も大切てある。此點から見ても、夫の野球の如きは無邪氣なる事て、互に往來するは至極宜いことてある。元來人種の違ふが爲めに、雙方の怨惡心が起つて、互に衝突することが多いが、或人の憂ふるが如く人種間の衝突は到底相和し得ないと云ふは、根底から間違つた考へてある。一個人と一個人との間に於てさへ、少しく見慣れぬ人が紹介もなく押掛けて來るときは、あまり好い心地はせぬ。門前拂を食はす位のことは當然てある。犬ならば無論吠付く所てある、況んや異國民相互の間、異人種相互の間には素より免れ難い事てあるが、此排外心は將來益〻增長する傾向を有つて居るかと云ふに決してさうてはない。追々減退しつゝあることは事實に徵して明かてあるが。昔交通不便のときには異人種異民族の接觸する場合は甚だ稀にして、斯る時代には、僅に一地方と一地方との間に於ても、互に反目し、互に嫉視する、戰爭も多くは

此小天地の間に同族相食むのである。併し是は人文の進歩と共に其跡を絶ち、漸く一國内丈は國民的統一を生ずるが、國と國との間は互に和することは出來ぬ。他國卽敵國と云ふ狀態は容易に止まぬ。然るに其國と國との間も、同じく人文の進化と共に融和して來たことは目前の事實である。そこて衝突の範圍が擴張せられ、今日は人種と人種との間に多少の怨惡心を有つて居るのは今日の常態である。併ながら是も以前に比すれば餘程薄らいて居る。國と國との間に就ていへばこゝ數百年以前は歐洲各國の如き殆ど寧日なしと云ふ有樣であつた、最も此東洋はそれ程でもなかつた。古來の支那朝鮮日本の關係を見ると、幾多の戰爭もあつたが、第一古來武勇なる日本は遙かに離れて絕海に孤立し、朝鮮は常に事大主義を取つて居るが爲めに、國と國との間には喧爭もなく、又怨惡心も少なかつた。朝鮮は初から日本より弱かつたが、文化の程度は朝鮮の方が進んて居つた故に、武力を以て彼を征服しながら、文化の點に於ては彼れから學ぶと云ふ關係て

ある。支那の文化を受けたる日韓等の諸國は、支那の書物を讀んて驚き、彼國に行つて尙更驚くと云ので、大に彼れを尊信した。爲めに相互の間に憎惡心も餘り起らなかつた。まづ日本の初めて遣唐使を送つた時は、吉備の眞備、大伴の古麿、藤原の清河の三人が入唐して其翌新の元旦、各國の使臣と共に玄宗皇帝に謁見した。其時新羅の使節が西の上席を占め、吐蕃使節が東の第一位を占め、西の第二席には大食國卽ち波斯（ペルシヤ）の使節、東の第二席には日本の使節と云ふ席順であつたから、大伴古麿が大に激憤し、新羅は古來日本に朝貢し我屬國に異ならず、何故に其屬國の下席に置くにやと、憚らず言ひ出したので、大唐將軍吳懷實は之を變更して日本を大食國（ペルシヤ）の上に据へ、東の第一位とし新羅を西の第二位に下したと云ふことがある。當時既に波斯等との交通もあつて、その文化は我國にも間接直接に來ッて居る。而して西洋は如何といふに、まづ歐羅巴各國は互に人種も風俗も互に似て居り、殊に英吉利佛蘭西の如き僅に一葦帶水を隔てゝ居る隣接の國

にして、共に文明の前列に顯るゝ國でありながら、其間は非常に惡く、從て戰爭も度々あつた。之れ雙方の交通が少い爲めである。英吉利海峽は僅かに九里にして、今日の汽船で行けば僅に一時間を要するが、波は荒く船の搖れる所であるから、今も彼處を通ふ船は二艘形の船に成て居る。蒸汽のない以前は餘程の難所で英佛間の交通は少なかつた。隨つて兩國人の相忌み相嫌ふ念の强い所へ其時分の學者小說家、詩人などは、互に先方のことを惡しざまに書き益々之を煽動する。英人は佛人を小さい弱い奴と嘲り、英人一人と佛人十人と鬪つても負けぬと云ひ、又佛人には德義も節操もなく、殊に佛蘭西の婦人と云へば殆ど一人として操の正しき者はないと云ふて居る。尙ほ其の他の點に於ても、針小棒大に、非常なる輕蔑の態度を以て之に向ふたことは、當時の古い書物などには無論、其他に於ても歷々之れを見ることが出來る。加之鄙猥にして不品行なる事は何事も佛蘭西といふ形容詞を付けるやうな風は、今日も多少殘つて居る。之に對して佛人も

亦た負けず劣らず英國を輕蔑し、之を嘲罵する、英國は第一氣候が惡い、冬季に向へば霧立つて、雨多く、日の目を見る事稀にして殆ど地獄同樣の處である。隨つて其國民の氣風は厭世的にして、鬱憂病に掛るもの多く、醫者は此病を名けて英吉利病と云ふ位て、隨て自殺は常に行はれ、殊に十一月には之が最も多く千を以て數ふ。此の惡風土に住む英吉利人は實に佛頂面にして不愛想なる不文、野鄙、無風流の田舍者であつて、其頓智のなき事は英人に洒落を言ふと一週間を經て笑ひに來ると云ふ如き分りの惡い人間である有と云ふ。斯く甚しい雙方の誤解から何事も圓滑には行かぬ。曾てピットが英佛通商條約なるものを結んだが、國民大に激昂して累代の敵國たる佛蘭西と商賣をするは以ての外であると云ッて、議會が大にピット宰相を攻擊した事がある。實に今日の相像にも及ばぬ有樣であつた。然し一朝汽船が通ひ、汽車が通ずるに至ッて、雙方の交通便利となり、互に交通するにつれ互ひに多少の缺點はあるが、又それ〳〵好き處もあつて、

雙方とも立派な文明人である。佛蘭西人と云ふも悉く嘘のみ言ふ譯でなく、英吉利人と云ふも容易に首を縊るものでないと云ふことが分つて來ると、雙方互に敬愛の念が生じて、段々に融和して來る。成程商賣上、政治上の關係で、時には反目することもあるが、先づ平和友情の關係を常體とすることゝなッて、昔時の如く謂れもなく敵視することはない。所謂人の性は善であつて、何人にも美點がある、素より人には短所はあるが、短所の裏には長所が附いて居る。惡人にも案外優しい所あり、盜賊にも自ら德義がある。況んや盜賊以上の人に於てをや。一個人已に然り、進んで國民と國民とが相接觸するに至れば、互に雙方の長所を發見し昔日の怨惡心を忘れて相和するに至るは當然の道理である。乃ち交通の頻繁になりし以來、國を異にするが爲に相憎むことは大に減退して來た。

然此人種上の憎惡心を以て、世人は恰も天然の約束の如く到底拭ふ可からざるものと見做し、それから割出して議論を立てるが、是れは其時の思想、

—○—

其時の現狀に欺かれて居るかと思ふ。則ち國と國とが互に憎み合ひ、外國人は則ち敵であると思つて居つた時には、國際間の怨恨を天然自然のものと思つて居つたに違ひない。しかし今日となつて見ると、一場の夢と化してしまつて居る、今、東西人種を異にし、互に憎み合ひ相容れぬと云ふことは、後日に至りて之れを回顧すれば、丁度昔の國際間の憎惡心の如く此人種間の憎惡心も消滅すると云ふことを予は信ずる。決して是が天然のものではなく、全く雙方間の交通が頻繁でなく、互に其情を解することが少なかつたと云ふことより外に原因はないのである。而して人種が違へば同時に宗教も違つて居る。是は佛教を信じ、彼れは耶蘇教を信じ、互に外道は卽ち惡魔なりとして之を憎む。以前は同人種の中でも國を異にするが爲めに相憎むに相憎むが如く、同宗教の中にあつて唯宗教を異にするが爲めに相憎むこと頗る激烈であつた。殊に歐羅巴では昔は新教と舊教との間の軋轢憎惡は非常なるもので、骨肉と雖も相食むと云ふ有樣であつた事は人のよく知

———

る所、結婚は云ふ迄もなく互に物も言はなかつた位てあつた。然るに新教徒と舊教徒の結婚は今日ては自在に行はれ、本人も平氣、僧侶も平氣、世間もまた平氣て何とも思はぬ、以前は均しく佛教の中てありながらも各派の軋轢は相當に甚だしかつた。然るに今日は青山の墓地に八宗九宗が共同葬式をして居るは未だしも、御寺に往つて神道の葬式をするのもあれば、又た神主と坊主と兩方集つて、神道ののりとの後に御經を讀むと云ふやうなこともある。淨土宗の御寺に往つて禪宗の葬式、一向宗の御寺に日蓮宗の葬らひを擔ぎ込むても、錢さへ拔げれば勝手なことが出來る。宗教の異同の爲めに互に憎惡すると云ふことは、既に段々減つて來るのは世界の大勢てある。今此歐羅巴人中にも佛教を信ずるもの、回教を喜ぶ者は決して少くない。決してそれ程深く心からの敵とは思つて居らぬ、必ず何か他に原因がある。」今現に日本人排斥といふことが米國に起つて居る。是も表面は日本人の顏付、宗教が氣にくはぬとか云ふも其實は彼等が來て廉く働け

ば吾々が困るといふ、經濟上の問題に外ならぬ。坊主が憎いと袈裟までの譬の如く、所謂聯想に依て、どうも彼れ等は吾々のやうにパンを食はずに飯を食ふ、アーメンを云ずして南無阿彌陀佛を言ふ、手を握らずに首を下げる、なにも彼も憎くなつて來るが、決して其れが根本ではない、如何にも彼等は廉く働くから、彼等に仕事を取られさうだと云ふのが喧嘩の本てある。アレハ全く勞働者組合（トレードユニオン）の仕事てある、其證據には賃銀を拂うて使ふ方の人は日本人を歡迎して居る。晩香坡て排斥運動の起つた時にも、直に一方では企業家、資本家の人々は各團體から代表者を出し、日本自由勞働者の增加は此國の發達に必要てある、日本人の移住を奬めなければならぬ、保護しなければならぬ、これは政府の義務てあると、建議して居るのを見ても、同じ亞米利加人てありながら、貧乏人は日本人を排斥して金もちは之を歡迎すると云ふことは、取も直さず是は經濟上の問題、錢の問題、商賣敵きの問題てあると云ふことは明かてある。又日本人と歐羅巴人と結婚

するとは、嫌ふ人が多い、自分はそれ程嫌はずとも、親類に對し世間に對してあまり進まぬと云ふ人が多いが、亞米利加人の方は譯なく日本人と結婚する、又一向世間の輿論にも關はず、又輿論もそれを一向咎めないと云ふ風である。其無頓着な米國に於て日本人であるが爲めに吾々と共に仕事をしては困るとか、日本人であるが爲めに排斥しなければならぬと云ふことは、人種問題宗教問題よりは、是は全く賃錢問題、經濟問題と云ふの外はない、米國が困るのではなく、職人が困るのである。所謂此職人には種々の者がある、アイリッシュもあればスカンヂナビヤンもあり、伊太利人などは殊に多いが。曾ては彼等自身も排斥されたのである。つまり後から來る者は始終排斥されると云ふ關係になつて居る。伊太利南部、シヽリイ邊から來て居る人間などは、色の黑さも餘程黑い、それが一旦土着すれば、おれの國だと云ふので日本人を排斥すると云ふやうなことをやり出す。全く彼等は先に來たが爲に主人顏をして居るのである。世間の學者が言ふ如く、

人種問題であるから、到底此衝突は打消す譯には行かぬなどゝ云ふは大なる誤謬と予は思ふ。假令多少はあるも決して主因ではない。現狀に於て素より人種的憎惡も尙大に殘つて居るには相違ないが、これは次第々々に消滅に歸するは時勢の風潮であることを疑はぬ。交通の增すべき將來には、雪の融けるが如く人種的怨惡心の解けるものとして、其主因たる經濟上の問題は如何にして解決するであらうか。

此經濟上の問題も、既往に遡つて之を歷史に徵するに、勞働者は每に自己に都合の惡いものを敵視したのである。紡績器械が出來ると絲繰りの職人は反抗し、汽車が出來ると車夫は反對した。然し其結果は此新發明の爲に工場が殖えて、車を挽くより好い仕事が多く出來るから、何時までも車夫が汽車や電車に石を投げはせぬ。斯る一時の過渡的衝突は經濟界の調和が付けば共に歇むのである。これと同じく日本人の廉く働くと云ふことは、此に一つの器械が發明せられたと同一であるから、今日は石を投げるが、

亞米利加の如く土地廣く人口少き而も進歩的の新開國へ、いくら人間を持つて往つたからと云つても困る譯はないのみか、將來は全體の富力を增加して、勞働社會全體の幸福を進むることとなるは必定である。白人勞働者は只近眼的思想よりして排日運動を試むる丈の事である。又日本人も狹き桑港、シャトル、バンクウバー、抔云ふ町の內に屈まうとするから喧嘩が起るが、田舍の野原に出れば幾らでも仕事がある。日本人は其點に於て農業上非常に都合好き長所を有つて居る。殊に葡萄、ホップス、米などの農作は日本の農夫に敵ふものはない。是等の農事に於ては、第一指先の仕事又しやがんで働くと云ふことは日本人の長所で、それが爲めに日本人を使ふことは最も都合が好い。斯の如くにして日本人移住の爲めに結局亞米利加は繁昌する、繁昌すれば白人の仕事も殖えて來るのであつて、日本人の移住位でなか〳〵嚮く亞米利加ではない。また亞米利加には素より主人はない、そこへ行つた者が主人である、アングロサクソン人種が一番多く行つ

て居るから、此人種の國になつて居る。伊太利人が行つても同じく亞米利加の主人になる、日本人が行けば日本人が或度までは主人になる、只數を增すと云ふことが必要である。此排日運動には多少政治上の意味もある、即ち例の地方政治屋が投票を集むるに勞働者の歡心を買ふ爲めには排日論が最も輕便な法である。新聞もその提灯を持つと賣れ高が殖える、日本人の味方をしても人數が少い上に選擧權もないから何の益もない。日本人の數が殖え且撰擧權が附くならば日本人の氣に入るやな事を書くであらう、又日本人の氣に入樣な事を言つて投票を求める政治家も殖えて來る、全く人數の關係から起るのである。故に日本人を增し、又永住して公民たるの權利を持たせるのが排日論防遏の最大特効藥と思はれる。然るに此の問題が果して人種問題であると假定しても此人種的憎惡は雜居接觸の密なるに隨て減少する、宗教の異同の如きもそれ程の事でない。唯日本移住者の數を增すと云ふことより外はないと予は確信する。要するに人種的憎惡心は

交通不足の結果であつて、永遠不滅のものでないと云ふ事は既往の經歷に徵しても容易に證明することが出來る。何でも相互の接觸が大切である。

一一　日本人の長所と短所

凡そ一國民を代表する英雄豪傑なるものは其の短所も長所も共に多く代表して居る。つまり其の國の普通の人を誇張し、マグニフアイしたといふのが其國の英雄、豪傑、偉人、大人といふものであるが、又其反對に一般國民の持つて居らぬ性質を大に發揮したといふ人も、社會に於て英雄として迎へらるる人である。而して其爲す所の事業と社會に與ふる所の感化とは、國民一般と反對の性質を持て居る人が、其社會の改進を促し、其國運の發展を爲さしむる上に於て効果の著しいものであると思ふ。而して前に述べた代表的の偉人は社會の反射であると同時に、社會がまた偉人の再反射を受けて其偉人物を模倣し、或は繰り返して行くものであるから益々其社會

固有の特徵を長ぜしむる事となる。

斯の如く國民全體の長所及短所を代表し誇張した人は早く世に顯はれ、早く重望を得る事が出來るが、これに反して其國民と反對の性格を具へたる人傑はそれを得る事甚だ難い。今日は社會が次第に複雜となり、種々の方面に偉大なる人物を出す事になりつゝあるが、古代より中世にかけては宗教、軍事の方面に於て傑物が顯はれた。又其人となりの上に於ても所謂代表的のものも又反對的のものもある、中にも宗教界に於て、日本人の通有性に反對の特性を發揮したものは誰であるかと云ふに、先づ親鸞といふ僧であらうと予は思ふ。何故かといふに、其事業が東洋の宗教界に異彩を放つて居る。一言に云へば頗る西洋めいた處があると思ふ。西洋に於ける偉大なる宗教家といへば、必ず指をマルチンルーテルに屈する、ルーテルは十六世紀に出て、其行つた處の宗教改革は言ふに及ばず、神聖無二の法皇に敵し大膽なる行爲を演じたる中にも最も人目を驚かしたのは、羅馬舊教

の戒に反して、僧侶の身を以て妻帶を決行した事である。或は肉食妻帶といふても可い。羅馬舊教では、一週間に二日は肉食を禁ずる、これは獸肉を禁じ魚肉丈を許したのである。是が和蘭國が中世に勃興する源因となつた、何となれば此の一週間に二度宛歐羅巴中の人が魚を食ふと云ふのは、丁度日本に於て土用の牛の日に鰻を食ふといふ樣なもので和蘭國の大利益となつた。和蘭はライン河口の寄洲に僅かに國を建て、處によると陸が海より十六呎も低いといふ位の所で、漁獵の外に仕事はなかつた、そこで鯡や鯖を捕て、これを歐羅巴中に賣り捌いた。之が元となつて次第に和蘭は、航海に長じ遂に大商業國になつたのである。これは餘談であるが。此の如き戒禁を全くマルチンルーターは打壞して仕舞つた。其他法王の贖罪權を否認し、其の歐洲諸王に王たるの大勢力に敵して之を破り、諸種の惡弊迷信を剪除したる其の驚天動地の大事業は、吾々の熟知する所である。しかし宗教舞臺の大小こそあれ、ルーテルより遙か以前に同樣の大事を行つた

者が日本にある、誰かといふに實に親鸞上人である。

親鸞上人は僧侶より出でゝ、僧侶の戒律に反して肉食妻帶を斷行し、宗教上の迷信を一切破却し、他力本願の說を以て一切の衆生を濟度せんと云ひ、女人も穢多も始めて極樂往生の途を得せしめ、恰かも從來の宗義に反對して極樂の門戶開放を行ひ、最惠條款の均霑を得せしめたものである。其上寺院の維持を王公の手より給與する祿に依らしめず、又政府の恩惠に仰がずして一般信徒の寄進善男善女の淨財に取るの方針である。一言に云へば平民主義であるから宗教の弘布寺院の維持も都合よく行はれたのである。

現に今日都下の寺院を見るに、禪寺の如きは諸大名旗下の立てた大墓碑が横倒れに倒れ、寺院も荒廢して封建時代の繁昌の面影を殘すのみであるが、一向宗の寺院は其反對に政界の變遷に拘らず、依然として小さき墓碑が立並んで居るではないか。此一向宗に於てば、種々の迷信を去ると同時に煩雜なる儀式を廢し、隨て經費を省く事になつた。是亦頗る偉大な力である、

之が爲に宗教の擴がる事は偉いものであつた。これはルーテルと相前後して歐羅巴に宗教改革を唱へたるカーヴインの立てた新派の速かに廣く行はれたのと同樣で、やはり餘計の儀式を廢して、成るべく無駄な費用を使はぬ樣にするといふ事が、卽ち舊教の如き金のかゝる宗教を壓倒したる大動機となつた。殊に瑞西やスカンヂナビヤの諸國に住む所の勤儉なる人民を風靡した者と見ゆる。一向宗の廣く日本に行はれたのも、やはり夫れが大なる關係を以て居る。尙雙方の合一點を擧ぐれば、歐洲の新教に於ては、各個人と上帝との間に狹まつて居る僧侶を排斥して、上帝と個人との直接關係を開いたと云ふのは、從來舊教では經典を羅典語の儘僧侶が誦讀し、英佛獨等の近代語に翻譯する事を許さず、而も寺院には鐵の鎖で之を繫いで、人の持ち去れぬ樣にし成るべく平民には經文を讀ませぬといふ獨占主義を執つた、然るに經典翻譯運動が各國に萠芽を顯はし、ルーテルに至つて益々之を主張して、誰でもバイブルを直接に讀む事の出來る樣に至らし

め、英人は英語で讀む、獨人は獨語で讀み、凡ての國語に翻譯されて、人民が直接にバイブルを讀み、上帝の福音に直接する事が出來るといふ點に於ては眞宗も同じてある。信徒は皆是れ阿彌陀の門徒てある。中間に立つて權力を振ひ專權を極むるところの僧侶を排斥して、人民と彌陀とを直接せしめたる、其の平民主義の點に於ても符節を合するが如くてある。實に宗教上の東西の二大英雄と言はねばならぬ。唯違ふ所は、歐羅巴ではこの宗教改革の爲めに僧侶の力に依らずして上帝と個人とが直接して直ちに福音を聽くことが出來る、又各自の正當と考ふる方式に依て直接に神を拜むことが出來る。決して精神上の壓制を受けないといふ所からして、自然一種の精神を生じて來た。それは何てあるかと云ふと獨立自尊といふ事てある。凡そ英國と云ひ、獨逸と云ひ、和蘭と云ひ、瑞西と云ひ、凡そ歐羅巴の新進國といふものは皆新宗教を奉じた國てある。新教の行はれた國には、所謂獨立自尊心といふ精神的向上が起り、隨て物質上にも利用厚生の思想

を生じ、生計程度の向上も伴て今の文明を發し來たのであるが、日本の新教は其處までは勢力を及ぼすことが出來なかつた。即ち全く是は國民の短所の爲であるか、或は眞宗僧侶の力の足りなかつた爲であるか、其開祖及之を助けた名僧の思想頗る卓絶なるに拘はらず、纔かに佛門中の一宗派たるに止まり、後世に效果を遺すことの比較的少なかつたといふ事は、大に僧侶たるものゝ責任に歸せねばならぬ。若し夫れ此親鸞と同摸形の人物を政治上軍事上に之を求めたならば、德川家康を指すべきである。家康の經綸の非凡なる點は、素より一言にして盡すべからざるも、先づ誰もよく知る所の形に現はれた事柄は、第一に三百諸侯の領分の配置方、或は江戸府内に於ける各侯伯邸の排列法の如きを見ても、家康の規畫の一班を知るに足る。大抵仲の惡い大名を隣國に置けば益々仲の惡くなるに極つたもので、互に掣肘するやうな仕組になつて居る。外樣の隣には譜代を置き、殊に大藩の周圍には數個の譜代を以て之を圍む。其上三家の如き親藩を要所に置

くのみか、其親藩に關してもまた相當の備へを怠らぬと云ふのである。これを如何に處分して居るかといふに、例へば紀州は其祖頼宣の封ぜられた所で、大阪の十六里南の和歌山、其以前には一たび水戸に封じ、又駿遠參に封ずるといふ事であつたが、大分野心家らしいといふので、紀州まで遠ざけた。其目的は平素大阪城を預り、若し一朝西國の大名が叛旗を翻した時は、直ちに大阪城に上つて、關西を治めることが紀州の德川頼宣たる者及其子孫の任務である。さりながら此人中々西に向て反賊を制へるのみならず、事によると却て西の奴を率ゐて東に向つて來るかも知れぬと云ふ頗る危險な相を帶びつゝある。そこで大阪と紀州との間八里位の岸和田に岡部氏を置いた。此の岸和田藩は五萬三千石で紀州の十分一にも當らぬ小藩ではあるが、兎に角眼の上の瘤である。或時幕府の殿中に於て、頼宣公が岸和田の岡部に向て貴樣のやうな飯粒大名が居つた所が、乃公は踏み潰して通うて行くがどうだと言はれた。すると仰せの通りではありますが、若

し其飯粒が御足の裏にくつ付いたならば如何でありますとやつた。成程飯粒が足の裏に着くと、どんな大の男でも、自由には歩けない、この一例にても家康の用意の周到なる實に人心の機微を穿つと同時に、大勢を洞觀する所の明を具へて居る事か分かる。尤も有力なる參謀もあつた事には違ない。また此三家の如き非常な威嚴を與へられたものも、實際政治上の權力は無く之は老中が握つて居る。此老中になれたる家は大抵三萬石以上十萬石以下の小大名である。併し其權勢の熾なることは三家と雖も間接には其鼻息を窺はねばならぬ仕組である。又仙臺、加州、薩州、長州の如き外藩は、非常に大なるものであるが、是は削れるだけは削ても已むなく大領分を持たして居る。併し政治上の權力は勿論決して充分な威嚴をも與へない。例へば此等大藩侯が尾州侯紀州侯に途上て出會はす時は、七十萬石の薩州侯でも、百萬石の加州侯でも、駕籠から飛下りて土下座をしなければならぬ。之に對して三家の方は、駕籠の戸を少しく開て片脚を出す。本來は私

も下るのであるかと云ふ其形をするのであるが、兎に角不權衡な禮式て結局君臣の懸隔を付けたもので、唯外様の防禦法は之に出逢はぬやうにするより外はない。殊に東海道を通過する時抔の横暴の如きは、宛然今の支那兵に異ならぬと思るゝ事が多い。それならば此三家なる者が、飽迄も威張つて通れるかといふにとさうは行かぬ。又十萬石か五萬石の小諸侯のうちにも、色々の特例を許されて居る家柄がある。例へば三家に逢つても同等の禮をして宜いとか其他破格の待遇を受くる者がある。而して三家なるものは滿天下の諸侯伯に土下座をさせて横行する筈の處に、土下座をせぬ者に出會ふと、之は非常な不面目に感じ却て侮辱されたやうに考へる。そこに至ると、反對に三家の方から此特例者を逃げる樣になつてくる。上述の岸和田に續いて具塚といふ町がある。其所に卜半とかいふ坊主がある。家康公を匿まつたといふ緣故を以て、優待を受けて居る。紀州侯通行の節には無論門前に立て敬禮をしなければならぬが、併し其敬禮は冠の紐が地に

つくまでの辭儀をするといふ事である。しかもその冠の紐が長いから直ぐ付くと云ふわけになる。これらの如き恰も腋の下を檪ぐる樣な事をして、一方から親藩の熱度を冷ます仕掛けになつて居る。恰度機械でいへば全體のエクイバランスの上に又エキセントリックバランスを付けたやうな仕組を拵へた。此外にも種々樣々の事がある。勿論最初から斯る事柄を態々作つたのではなく、自然の成行につれて生じたものも多かつたであらう。唯之を要するに德川氏の制は所謂權を與ふる者には祿を與へず、祿を與ふるものには位を與へず、位を與ふる者には力を與へずと云ふ理屈である。他に向ては祿、位、權、力を分ち與へて兼有する事を許さず。獨り此祿位權力の四者を兼有して居る者は誰かといふにと將軍自らである、淳和奬學兩院の別當源氏の長者、征夷大將軍と云ふ文武の兩權を握り、文權を以て公家を抑へ、武權を以て大名を御する。英國憲法を論ずる者は其機關運轉の靈妙なる所を求めて、或は之れを王權貴族權平民權の鼎立に歸し、或は立

法司法行政三權の分離に歸し、或は尊嚴部實行部の併立に歸し、或は相互掣肘の機能に歸する等諸說紛々たるも、要は唯固有の諸勢力に相當の分け前を與へながら、決して十全の得意を許さず、一點の中心たる主權の所在點に歸嚮せしむるの趣旨に至ては德川政體と同一にして其間甚だよく似た所がある。又米國の憲法制定に當つても、英憲法の精髓を得ん事を勉め成丈け權力を一所に集中せぬ樣にといふ考て造つた。その間幾分の不都合も起つたが、大體の主意は不知不識是に適つて居る。最も近き例はビスマークのやつた事業である。獨逸憲法はどうなつて居るかと云ふに、彼の多數の聯邦から成立つた獨逸を一帝國にして、プロイセンがその盟主となり、其プロイセンの權力を自ら握るといふ事になつて居る。獨逸帝國の憲法に依るに、聯邦が皆寄つてもプロイセンの一國には到底適はない、而して皇帝若くは宰相の權力は此プロイセンの議院を動かす事の出來る樣な仕組になつて居る。乃ち獨逸憲法では若し皇帝が偉ければ總理大臣は木偶になら

なければならぬ、總理大臣が偉ければ天子は虚器を擁して居なければならぬといふ仕組になつて居る。ビスマークの權威を振つた時には、全くビスマークの考通りにプロイセンが動く、其プロイセンの動く通りに獨逸帝國が動かねばならぬ。今の獨逸の天子は卽位匆々自ら活動せんとするも、其制度に於て兩雄竝び立ざるを知るが故にビスマークを退けた。明君が動けば賢相は傍觀するの外はない。今の皇帝は夙に自己の活動を試みん事を望んで、先帝が南部佛蘭西のカンヌといふ養生地で崩御せられた、其時には皇太子卽ち今の皇帝は非常に喜んで、偉い元氣であつたといふは我々は少し妙に思ふ位であるが、兎に角獨逸の制度は一人が權力を集中して聯邦を支配するやうに工夫したもので、丁度德川氏が八百百萬石の領分を保て、親藩譜代を率ゐて天下を治めたのと相類似して居る。曾てビスマークは家康の事蹟を聽て大に感心した。家康の遺訓、德川百ヶ條をビスマークが讀んで、家康なるものは天下古今の豪傑である。斯る考案丈はよく考へる人

はあるが、之を實地に行ふに至つては、實に感服の外なしといふ事を、ビスマークが云はれたといふ話である。素より獨逸憲法もビスマーク一人て出來た譯てもない、カブールの伊太利統一事業の如き、ビスマークの爲めには大に參考となり、獨逸の統一を圖る上に益したといふ事である。他の一方に於ては東洋の家康の事業の如きも、或は間接に今日の獨逸憲法其他の制度の表面に顯れて居らぬとも限らぬ。卽ち日本人に最も稀なるところの反衆を發揮して、大に時世の要求を充たした人は、宗教界に於ける親鸞上人、政治界に於ける家康公といふ、此二人を以て予は最も標榜的人物てあると考へるのである。

一二　家族制度は國體に非ず

近來家族制度個人制度の議論が流行する。何か議論が起ると日本は家族制度てあるからそんな事はいけぬ、西洋の個人制度と違つて家族制度てある

と云ふことて、法律論ても道德論ても、總ての事を此家族制度云々を以て律し了らんとするは、予の常に聞く所てあるが、これが甚だ奇妙な事てあると思ふ。家族制度が良いか悪いかと云ふ事は別論として、單に日本の國體は家族制度てあると云ふが、併しこれは日本に限らず家族制度の國は他にも多い、又或國は以前は家族制度てあつて、一變して所謂個人制度になつて居るものもある。唯時代進化の問題てあつて、決して其國に固着したものでないと云ふことは、苟も有識の人は承知して居る事と予は考へる。

青史以前の草味の社會には、大體家長制度が行はれて居る。即ち一人の家長の下に多くの妻孥子孫が隷屬して居ると云ふのが、未開社會の有樣てある。即ち舊約全書にある所のアブラハム、モーゼスの如き人の率ゐて居るのは、皆自分の子孫てあつて、之を自分の手に付け、支配して居ると云ふのが其時分の社會狀態てある。支那にしても印度にしても、又歐羅巴にしても、昔は皆同じことてある。羅馬も家族制にして殊に親權の强大なるは

支那以上てあつた。今日ても日本の飛彈の山の奥へ行けば、此の制度が行はれて居る。非常な大家族て、一軒の家に數十人の家族が雜居して居る。或は肥後の五家庄なぞも其通りの制度が行はれて居る。是は平家の落武者だと云ふが、若し平家時代の有樣を今日まて持續して居つたならば、さうなる筈てある。即ち日本古代の源平藤橘の如きは、最初は家族より一段進んて、クランシップ、即ち同族制度となつたもので、所謂源氏の長者はも と源家の家長てある。今一段進めば封建制度となりて、稍君臣の別が分れ來て、政治の機關も一定し治者被治者の分限もつき、終に之が混合一和して國家が出來る、是れが社會學上人間の發達の順序てある。然らば東洋諸國と西洋諸國とを比較するに、西洋は今日即ち個人制度て、家族はごく小ない。夫婦と其子供が一家族を成すと云ふやうな工合になつて居る。其子供が成長すれば獨立して又一家族を成す。日本の如きは家族の團體が甚だ大きい。西洋よりも家族の團體が大きく、一家に三夫婦も揃つて暮らして

居ると云ふやうな家もある。或る種類の人は日本は家族制度であるから戰爭に強いと云ふ、何故家族制度ならば戰爭が強いかといふことは少しも譯がわからぬ。強いと云ふには外に原因がある。現に敗北者たる支那及び露西亞と云ふものが日本以上の家族制度の國である。露西亞は歐羅巴に國して居つても社會は東洋的である。其中にも露西亞の貴族又は上流の人は家族も大抵西洋流になつて居るが、露西亞の農民は純粹の東洋的で、全然家族制度になつて居る。露西亞の農民の有樣は、田舍に往けば一家に三夫婦も四夫婦も揃つて、雜居をして居る。卽ち此家長制度の遺風を存して居る。又朝鮮に往つても同じことで、例へば金とか朴とか云ふ一姓の下に多くの一族がある。金氏の中から役人が出たと云へば、金族の者が皆集まつて來て其の食客になる。朴族から一人の大官が出たと云へば朴姓を名乘つて居る者は澤山やつて來て其屬官や食客になると云ふやうな事で、同族中の有力者に全族の者が寄縋がる、それに依賴して坐食しようと云ふ習慣は、最

も此朝鮮に甚しい。これは家族制度の最も盛んなものである。若し論者の說の如くならば何故に朝鮮は戰爭に勝たないか、羅羅の人間は何故に戰爭に強くないか露國は何故に弱いのか。全く論者の大に誇張して日本は家族制度である、故に敵に對して強い、戰に勝つなど云ふことは、少しも論據のない說である。それを非常にえらい事のやうに思ひ、非常に勿體を付けて、是が日本の國體である、之に背く者は國賊であるなどゝ云ふことは甚だ分らぬ。此の如き聲に嚇かされて、閉口する愚物もあるが、我々は決して承服し得ぬ、日本の國體は斯る經過的の根據に據るものではない、日本の國體は決してそんな薄弱なものではないと信ずる。國體とは國民の常住不變の性質に胚胎するものであるから家族若くは個人等の如き經過的の制度の如きは決して國體の要素とならぬ筈である。論者の如きは未だ國體の眞相を知らざる者である。彼等の如き考を有つては、到底日本人の思想は進まぬ、又日本國の進步と云ふことはどうしても望まれぬ、此の如

き根據なき議論は、どうしても打破して仕舞はなければならぬと予は考へる。それが爲に種々の問題を起し、種々の迷信を起して、道德上にも法律上にも、甚だ有害なる思想を懷くことになつて居る。東西を論せず古代の社會は家族制度で即ち家長が政府である、親が君主である、自己の手に屬する所の子孫妻孥は牛羊と共に皆此家長の所有物であるから、家長は之に向つて生殺與奪の權を有つて居る。されば古代と今代とを比較し、又今日の或程度以上に進歩した國と、或程度以下に止まつて居る國とを比較して見ると、どうしても此家族制度個人制度抔と云ふことは、唯單に經過上の話である。或文明の程度に於ては何れの國でも皆家族制度である。然るに論者は日本は家族制度であると言つて居る。然し燈心よりはランプの方が明るく、ランプよりも電氣の方が明るいことは爭ふことは出來ぬ。只無形の事になると一目瞭然でない爲めか又は負惜みか固陋な說を主張して居るは、國家進運の爲めに甚だ宜くない事である。

一三　文學の發達を圖るべし

凡そ人々其才能の發達は、各自の所好と所長に隨て、各種の方面に向ふべく、殊に文學、哲學抔の方面に向つて大發展を爲すには、其人に特種の文才、學才を要する譯であるが、苟も此天才を有するものは、大に之を啓發するの大切なるは無論なると同時に、他に一科の專門を修むる人、一箇の事業を營む人でも、同じく此高尙にして興味ある所の學問の嗜みはなければ成らぬ。孔子の語にも餘力あれば以て文を學べと云ふことがある。其時の文と云ふことはどんな意味であつたか知らぬが、今日之を解釋すると、先づ各自の職務に盡瘁した上に、尙餘暇餘力あれば假令直接に自家の職業に關係はなくとも、文學哲學等の上にも心を注いて、精神の向上と慰籍とを圖るべしと云ふに外ならぬ。又幾分か此邊の嗜みがなければ自然常識にも乏く、又遠大の考もなく、其專門の業迄が甘く行かぬ。例へば法律を學

び之には精通しても、其外毫厘も文學の趣味なく、哲學の思想がなければ所謂三百代言たるを免れない。又如何に商事に練達しても素町人たるを免れぬ。又政治にしてもこれがなくては決して多數の人を率ゐ、其の陣頭に立つ所の人にはなれぬ。

第一學者が一國民の特性を論じた著書抔を見ると、大抵先づ其國の氣候地味を論じ、次に國民の氣質を論じ、其次には必ず其國民の文學思想は如何、此國の哲學思想は如何と云ふことを論ずるのが、國民を研究する順序になつて居る。而して此日本の國民は如何なる氣候風土に住み、如何なる氣質を備へて居るかと云ふに。これは無論天然固有のもので夫々之を有つて居るか、如何なる文學哲學を有つて居るか、此問題は甚だ困難である。成程日本國民としての哲學もあり、日本國民としての文學もあらうが、然し古今東西各國の文學哲學と比較して果して、之をその上位に置くことが出來るか否と云ふ點になると、餘程疑問であらうと思はれる。素より奈良の朝

にも平安の朝にも、隨分立派な文學も現はれ和歌も出來、以て鬼神を泣かしめ天地を動かす程のものもあつたに違ひない。又哲學と云ふとむづかしく聞ゆるが、これは誰にもある、野蠻人にも、又三歳の童兒にも自ら哲學はあらうと思ふ。又文學もあらうと思ふ。併ながら儼然たる體を備へて、所謂獨逸哲學、英文學、フレンチ、リテレチユアーとして並べて論ずる時に、日本哲學、大和文學、甚だ耻かしいが彼等と並び稱するに足りるとは思へぬ。或は確實なる意味に於ける哲學はない、確實なる意味に於ける文學はないと言はれても辯解の辭は無からうと思ふ。素より文學は國民自然の情性に發し、哲學は國民固有の理性に發するもの、古代印度の如きは先づ世界文明の元祖で、非常な古い時から文學哲學等も大に發達し、論理心理性理の如き純粹の理論に至るまで、韻を履み平仄を合せて文哲混合の形になつて居る。支那の哲學は、印度の如く深遠ではないが、老莊の清談孔孟の儒學其他諸子百家の說も共に漢族の思想を代表したもの、文學に於て

は、唐宋の詩文の如き實に百花爛熳の盛觀を呈した。又波斯の文學も非常に美なもので、彼の有名なる英國のドクトルジョンソンは、是非波斯文學を學び、次第に東洋文學の粹を採て英文學の錦上に花を添へたいと云て、彼のヘヾスチング太守の援を求めた形迹もある。

予は極く幼年の頃好んで歴史を讀んだ。其時には無論何も知らぬのであるが、新羅王が日本軍に降參し、王躬ら磐石の上に坐して草を結んで誓つて曰く――日輪西より出て黒龍江逆まに流るゝと雖、此誓を渝ゆることなし、若し我が子孫後世此誓を渝ゆることあらば、馬鞭馬梳を天厩の隷に献ぜん、と書いてあつた。是は面白い言葉であると思ふた爲めか私は今に記憶して居る。外の事は皆忘れて居るにこれ丈は吾少時の頭を強く打つたと見へて今に覺へて居る。是も大きく云へば文學の德と云て宜い。今日露西亞が連戰連敗遂に、媾和條約を結ぶ時に、馬鞭馬梳を天厩の隷に献にぜんなどゝ

云て來た所が、條約にも何にもなるものてはない。野蠻時代には凡て、單純に自然の事物に事寄せて、強く感情を言顯すやうてある。亞米利加の土人が、開戰と云ふ可を斧を上げると云ひ、支那の昔ても干戈を交へると云ふたのを今日ては面白く感ずるが、其時代の人は只當り前の積りて云つたのを、開けた後世の複雜した頭からは何となく興味を覺ゆるのて、詩歌は古人に及ばぬと云ふのも大に此邊の所がある。今日から考へて、今日の人の意表に出るから昔ほど文學は宜かつたと云ふ考が起るのてあるが、是は間違つて居る。社會が複雜緻密になッて來ると、文學もこれに應じて進み、社會の現狀に適切になつて來なければ成らぬ。今歐羅巴各國の文學は、昔の希臘羅馬の古文を推尊して居ても、近世の事情と共に緻密適切に成て居る。そこて日本にも固有の文學もないとは言はぬ、哲學もないとは言はぬが、併し今日文明の社會に適し得る丈に文學を發展して、文明各國と競爭するには、唯昔の三十一文字を繰返し、又彼の忠臣榮へ惡人滅びて目出た

し目出たしと相場の極まつた簡單なる小說を繰り返す位てはゆかぬ。日本固有の素養を利用し、世界各國の長所を採るは勿論、自ら大に研究して斯文を發達させるのが文學者の務めてある。

又世の進むに隨つて、理屈を理屈の儘に唯無味乾燥に現はしたのては、讀み手もなければ聽き手もなくなるかと思ふ。日本が、開國以來四五十年間は、西洋傳來の理屈も珍らしく、新規な政治論道德論も面白いから、之を唯露骨に言ひ現はしても、それを讀んて感心し面白がつて居つたが、段々人の耳が肥え、目が肥えて來れば、唯丸るいものを丸るい、角なものを角なと云ふたからと云ふて、決して人は感心しないのみか讀みもしない。さればと言つて馬鞭馬梳を天厩の隷に獻ぜんと云ふやうな囈言を云て見た所が文明流の頭には副はぬから、緻密に、適切に、しかも自然的に面白く、興味を感ぜしむるやうに、云ひ現はす術を講じなくては、多數の人に己の信ずる所を感得せしむる事が出來なくなる。又道德論とか風俗改良說等に

しても、矢張り小說の形を假り、文學の體を具へて、知らず識らず帝の則に從はしむるの必要が起つて來る。予が自ら感じて今に記憶に止る一例を云ふと、百三四十年前の佛國文人ベルナールサンピールの著に「ポールとビルジニーの戀」と云ふ小說がある。時代の政治、社會の腐敗、殊に貴族の奢侈、淫靡、倨傲を責めたやうに思はれる。ルーソーの哲學抔を小說體に著はした樣な感じがする。その小說の主人公は、少年ポール、少女ビルジニー、此少女少年の母たる二婦人は、ラ、フランスと云ふ島へ逃て各々その胎兒を出產し、各々其處に一本の紀念樹を植えた。其樹木の輪を以て子供の年を數へた。木が一年經てば輪が一つ殖える、木の輪が十二になれば子供の年も十二歲、花が咲けば春、葉が落れば秋、所謂山中曆日なしと云ふ調子て暮す內、此のポールも成人し、ビルジニーも妙齡に達し互ひに相愛する。或時、ビルジニーが山上から下り來る所をポールが待ち受け望むと、此の花の如き少女が白布の着物に、麥稈の帽子を冠つて、それに薔薇の花

を挿んで居る。その淡然として氣高く麗はしきさまを、著者が得意の名文を以て書いてある。凡そ麥稈の帽子を冠つて、金巾の白い着物を着て、それに野薔薇を挿んだと云ふ、此より單純な裝束と云ふものは無い。此の單純の中に自ら美のある所を現はした。其小説中の僅か一頁の美文が、佛蘭西の貴女社會の流行を激變せしめたと云ふ歴史上の事實がある。其時の佛蘭西の風俗はどうかと云ふに、ルイ十六世の朝で皇后マリヤアントヂット を中心として極端な奢侈に流れた時、貴婦人の頭上の髪飾が脊の高さ位も上に高まつて、丁度顔が中途に在る。丸てやせ小原女が頭の上に荷物を積上て往くやうである。此く頭髪を飾り立てた上に、着物は袴を風船の樣に膨らし、胴は血切れる迄に細く締め付け、呼吸も絶へ〳〵食事も出來ぬ。如何に博學なる動物學者も此牝鳥は何種に屬するや、分類が付かぬと云ふ格好、そこで或る畫工が諷刺畫を書いた。女理髪師が、婦人の頭へ梯子を掛けてる所を畫いたが、中々畫の力でも此風は止まないのみか、愈々髪の

結い方が高くなつて來る。其所へ彼のポールビルジニーの小説が出版された。スルト貴婦人社會はビルジニーの白布、藁帽の淡裝が如何にも宜い。是迄の風俗は恥かしいと云ふので、高い頭髪を平たくし綾羅錦繡をぬぎ棄てゝ、上は皇后に至る迄皆此白布衣、藁帽子と云ふ簡單極る扮裝に變じたのは、恰かも魔法の働きかと思れたと云ふことが歴史にある。これは予が此小説を讀んだ後に歴史を讀んで此事實を見付け、あの小説が此の如き歴史上の大感化を及ぼしたかと云ふことを感じたことがある。今の女學生に向て綿服强制の如き智恵のない遣り方では、決して効を奏するものではない。これと前後して男子の風俗改革に關する話がある。亞米利加が獨立戰爭の時、佛蘭西の援助を求めんが爲に、彼のベンジャミン、フランクリンが來た。服裝は質素、言語は率直、擧止活潑にして自ら威嚴を備へ、凛乎として犯す可らざるの風采は、恰かも希臘古賢の再來かと怪まるゝ計り、之に反して主人役たる佛蘭西の貴族紳縉の風俗は、頭には長き假裝髪を戴

きて之を肩の上に垂れ、金繍の長衣を着流し頗る惰弱なる風俗であつた。其所へフランクリンが黒衣短髪、如何にも甲斐々々しく男らしい風で現はれたから、女々しい風俗は耻しくてならぬ。夫から佛蘭西の紳士、貴族、學者の間にフランクリン崇拜の熱度は頗る高く、皆忽ちにして黒衣短髪に變じ、男子の風俗は一遍に改まつたと謂ふ。此奇異なる事件は恰も佛國大革命の前兆とも云ふべき者で、人心の傾向を卜するに最も顯著なる此服裝頭髪の變化を促がしたるは、米國獨立の偉人とサンピールの名文の力は能く風俗の改良を催ふし道德の興隆を促がすに最も有力なるものであつた。扨こそ歐羅巴諸國の文學を尊敬することは非常なもので、隨て文學の進歩も著るしい、然るに日本には此風がないから、自然名文名小説も出ない。ゑらい人は軍人と政治家に限るやうになつて居る。名譽のない畑にはよいものゝ出來ぬのは當然で、日本に文學の興らないのは怪むに足らぬ。しかし此後は形勢も大に變じて文學興隆の時節到來し、文學者尊崇の道も開け

るであらう。現に近來駄文學、三文小説の濫出するのは誠に忌々しき極みなるも是も他日文運の開くる前兆と見て宜い。先づ豚鍋から西洋料理と云ふ順序になるより外に仕方がない。

歐羅巴の政治家の名聲は一時は花の如く盛んであつても、死後には餘り殘らないのが多い。偉大なる文學者は之に反して死後長く令名を傳へ、又社會からこれほど尊敬される者はない。縱令爵位が無からうとも、官職が無からうとも、學位がなからうとも、尊敬せらるるとは無冠の帝王とも云ふべき有樣である。現に彼の山水明媚なる蘇格蘭は到る所オートルスコットの遺跡ばかりて、エヂンバラ府の最大壯觀はスコット翁の銅像、其他バーンの遺跡、ドラモンドの住んだドラモンド城抔が、旅行者の最も興味を感ずる所、土人の最も誇る所である。又伊太利に行けばフロレンス市のバンテオンには、英雄豪傑の基碑が並んで居る。其碑自身が各々美術的彫刻になつて居る。或は文豪ダンテ、又はボカチオ美術家ミケロ、アンシゼロー、

政治のマキャベリー抔と並列して居る。其基碑には或は其人の屍上に未亡人が泣倒れて居る所とか色々な意匠を凝した彫刻物がある、伊太利に旅行する者は皆此文豪畫伯の遺跡等を見る爲てある。佛蘭西とても同樣の事、市街の町名にも文豪の名が付られてフエネロン街ヴオルテヤ街モリエー街ヴイクトル、ユーゴー街抔云ふ所が多くある。又それ〳〵其人の肖像が聳へ立て居る。モンテスキウ街モンテスキウ旅館抔云ふのもあるが、モンテスキウの出たボルドウ市には萬法精理街と云ふ通りさへある。總て偉人の功績を表する爲に其名を以て街路の名稱とするのは甚だ面白い。殊に文人の名は公衆の心に優美の感を生ずるから尙ほの事てある。歐洲各國皆此風て文豪の肖像を街頭に立てたり、其術をその人の名に依て呼ぶものは少からぬ。斯く文學に向て尊敬を拂ふ所から、自然に其國に偉大なる小說家や詩人を生ずる事になる。而して此尊敬は單に自然のもの計りてはない、現に此程露國の、亂暴を煽動したるマキシム、ゴルキイと云ふ文豪が政府の

手に捕縛せられてから、歐洲各國の此文人に對する同情はゐらいもので、獨逸又は伊太利の國會抔は建議案を決議した。其趣旨はマキシム、ゴルキイは世界共有の文豪にして露國の專有にあらず、此人を罪するは世界共同の幸福を害するものであるが故に、宜しく此偉人を救ふの計を爲すべしと云ふのである。斯の如く國民が文學を尊敬する念が厚ければ隨て斯界に偉人も生ずる道理、此尊敬の念がなければ其社會には折角持つて生れた天才も埋れ木に終る譯てある。

殊に文學者が國語の改良發達に資けた功勞は各國共に偉大なるもので、彼のセキスピヤの英語に於けるが如きは其の最も顯著なる者てある。日本にも近來國語改良など、云ふことが喧しくなつて、假名遣を直し文法を正さうと騷て居るが、兎角日本人は官府の力を以てやらうとする癖がある。文部省て國語調査會を設け又高等教育會議に向て文法に關する事項と假名遣改正の議を持出した。國語の事を色々調査し、言葉の改良を圖らうなど、

云ふことは、佛蘭西が頻りにやつて居る。佛國學士會院はリセリウの創立て爾來殆と三百年の久しき、佛語佛文を改良し純正雄大にして而かも學術の研究に適せしめ度いと云ふ種々の調査を遂げて、色々の規則をも設けたのである。然るにスペンサー其他諸大家の調べた所に依て見ると、其干渉の結果は決してそれ程効能のあるものでない、却て自然の發達を遂げた形跡が多い。其證據には佛蘭西人の日常言ふて居る語でさへ飛んでもない不都合な事が多くある。佛蘭西語を學んだ人は必ず氣が付いて居る。例へば何だと云ふ疑問語に qu'est ce (ケ ス) que c'est? (セ) 甚しきは qu'est ce (ケ ス) que c'est (セ) que cela? (サ) 抔と斯く無闇に長く餘計の語を挾むとは、實に抱腹に堪へぬ。此の如き駄語を挾むものは思想と言語の調和を缺いて居る徵として最も賤む所、然るに學士會院の力はこれを匡正する事さへ出來ぬ。夫から學士會院は總ての教科書を撿定し、又標準字典を作る事に着手した。其字引は今迄どの位出來たか、Aが一冊Bが一冊Cが一冊一字一冊づゝとし廿六冊で完結する計畫が

僅にC迄出來たまゝて跡は何十年立ても出ない。此又ABCの三字が出來るのに何十年も掛かつた、二十五文字造るには何百年かゝるか分らぬ。然るに一方の個人の仕事では、リットレルと云ふ文學者の作つた佛語字典は學士會院のより優等完全なものが疾くに出來て仕舞つた。佛人は皆此リットレルの恩澤に浴して、學士院の御世話にはならぬと云ふ。其上佛語には性の統一が出來て居らぬ。佛語ては何の理屈もなく各語に男女の性が付て居る、全く野蠻時代の遺物てある。然るに英語は男女の特性なきものは僅かの異例を除いて殆と皆中性となつて居る。學士院の干渉を受ざる英語こそ却て自然的健全な發達を遂げたように見ゆる。日本人の樣に政府の政令て甘く行くかの如く盲信するのは隨分厄介な事てある。烟草官業、鹽專賣は尙ほ忍ぶべし、國語官業、假名遣ひ專賣は如何なものてあらうか。全體國語も亦た一種の生物て、自然の必要に依り國民の進歩に伴ひて生長發達し、又時々文豪の力に依て進歩を促かされるものてある。英語の如きもウ

イキリフが出で聖書を英語に翻譯した爲めに大にその改良を來たし、又彼のセキスピーヤーが出て大に英語を整頓した。爾來文豪輩出して國語を改良進歩せしめたのである。社會全體の必要と偉人の力との結付た結果である。天下何れの國語と雖も此法則に從はないものはない、要するに國語の改良も文學の發達に基く外はない。

此の如く民間に出る所の文人は、天下に偉大な功を奏するものである。又國民が此人を尊敬して、或は碑を立て、或は其名を町に付けて、長く國民の聯想に遺すと云ふやうな事があつてこそ、其國の内に豪い文學者も出るのであるからして、世人は各々其才の在る所に向つて働くべきである。人悉くセクスピーア又ゲーテたるを得ずと雖、苟も此方の才能あるものは此國の文學を進め、此國の言語を良くして學術の進歩を得せしむるが如き、誠に高尚なる目的である。又其以外の專門を極めた人でも所謂餘力あれば文を學ぶの心掛が肝心である。

一四　研究心を發揮すべし

吾人は事理を研究し、眞理を探求する所の精神を養はなくてはならぬ。日本人には是れが餘程缺乏して居るやうに思はれる。元來日本の學問は、云ふ迄もなく以前は漢學のみであつた。此漢學なるものは、深く事理物理を研究するの氣風には乏しかつた。又佛學の方は哲學的に餘程深い事を研究するが、漢學の方はごく淺く只目前皮相の事を論ずる傾がある。無論名言もあり卓說もあるが事物の根底まで研究して見ると云ふことが少ないやうである。釋迦と孔子を比べても、孔子の言はまづ常識に訴えて當世を敎え導くの趣意で、是は論語を讀んでも分かる。釋迦の言つた事は非常に深邃高遠である。支那でも老子の說は餘程深い所があつて、孔子とは其趣を異にして居る。是は主もに國外からの感化を受けた者と見え、印度哲學流の事が多い。孔夫子は古聖人の道を饒季の世に行はしめやうと云ふのである

が、老子の言は細大共に印度ブラミン流の臭味を帶びて殊に吠陀學派の書物から導かれた事が多いと云ふ。又或人の說には又猶太傳來の思想か混合されて居るとも云ふ。それは老子に視之不見、名曰夷、聽之不聞、名曰希、搏之不得、名曰微、此三者不可致語、故混爲一とある。是れ夷希微卽ち三位一體の事を云ふものである。エホバは猶太の神を呼ぶの名にして、支那語には絕無の音である。之に依て或は道敎を外國思想の產物であるとなし、或は老子は支那人でないと云ふ者さへある。兎に角支那流の思想は淺く、老子の如きすら旣に漢族でないと疑はれる程である。印度哲學の深遠は卽ち西洋流である。西洋は印度流である。卽ちアリヤン人種の方が深く研究をなし、モンゴリヤ人種は淺く考へるやうな區別があるはせぬか。尤も支那の方でも孔夫子以來段々變遷して、宋の時代には餘程哲學流になつて來て居る。これは全く佛學の感化を受けた爲だと云ふ事はよく人の知る所である。乃ち宋儒の心法と云つて心理性理の學問を修め、此哲理を以て儒敎

を說く事を勉めた。そこで此の宋儒に反對の輩は大に彼等を攻擊する。朱氏、程氏の心法行はれてより、徒らに誠意誠心の空理を談じて一向當世の事を憂へない。現に徽宗欽宗の二帝を夷狄に取られながら、宋の學者は之を顧みずして唯誠意誠心の學を講じ、又其後天下は蒙古に取られ、天子海に浮べるに及んでも、陸秀夫の徒は船中に大學章句を講じて、涙を流して居つた。如何にも腑甲斐ない。學者も斯うなつては仕方がない、全く宋は學問の爲に亡びたと云ふのである。隨つて又元の太宗なども、宋の轍を踏んで無暗に學問に心醉し、遂に國を失つては大變であるといふので、宋の舊制を改め、まづ國民の階級を立てゝ十級に分ち、學者の階級を極く下の方の第八級に置いた。斯の如く文を卑しめて、武を尙び、國を振はせやうと云ふ政略であつた。何れ宋朝の士人は學問に耽り文弱に流れたと云ふともあるが、國の興亡は、必しも一小部分の人が學問に耽けた爲に亡び、耽けらなかつた爲に亡びないと云ふ譯はない。勿論今日の世界と違つて、學

者と政治家の分界も立たず、且つ餘程少數の人の頭で國の興廢存亡は決したに違ひないが、併ながら四百餘州の大天下を有つて居る宋朝が、唯大學章句の爲に亡びると云ふ簡單なものでも無い、或る經濟家の說に從ふに、宋は財政紊亂の爲に滅びた、紙弊濫發の爲に敗れたと云ふ。紙弊は支那人の發明で、慥か唐宋時代から起つた、楮弊と謂つて桑の甘肌で作つた札である。紙が錢になるのだから都合が好いまゝに無闇に濫發したるが爲め、遂に此政府は潰れたと云ふ。如何にも經濟の破綻も滅亡の一因をなしたてあらう、學問心醉も一原因になつたてあらう。所謂滅ぶるの日に滅ぶるにあらずして、遠く由て來る所があらう。兎に角夷狄が起つて來ては開けた國を併呑すると云ふのは歷史上の常であつて、支那は歷代共に文弱に流れては北方の强に侵略なれると云ふ歷史を度々操返へした。是は支那のみならず、羅馬が獨逸の北蠻に取られ、希臘がマセドニヤに滅ぼされ、印度、波斯もまた同樣に、古代の文明は斯の如き運命を免れなかつたのである。

唯だ今日の文明は大に其趣を異にして、古來の文學だけでなく、現實の科學と技藝とが加はり、科學と技藝が根據になつて出來て居る。殊に武器が科學應用の結果て、戰爭も昔の力較べてはなく、智慧較らべ金較らべと云ふので、どうしても今日の文明國は野蠻人に滅ぼされない譯になつた。昔の文明はまづ都雅(みやび)ると云ふことが文明てあつた。又學問も荒唐無稽の空論てあつたのたが、今日の文明は只都雅るのみならず、現實に有形の經驗的學問から起つて來た所の文化を有つて居るから、野蠻人の腕力のみて滅ぼし得ない。

そこてまづ之を公平に考へて見ると、成程國の亡びるのも構はず學問をして居ると云ふとは、甚だ宜しくない。恰かも圍碁に夢中になつて親の死に泪に逢ひ損つた樣な者てあるが、又學問の研究といふ方から見て必しも一概に非難する譯にもいかぬ。學問の事たるや非常に廣い遠い長いものてある、實に天地を狹しとし古今を短しとする程のものてあるがなか〳〵一政

朝一ダイナスティの興廢ぐらゐな、政治上の變遷の爲に左右せらるゝものでない、萬代不易の眞理を研究するのが學問である。素より宋代に朱子程子の學んだ心法、陸秀夫が講じた大學章句などは、今日から見れば詰まらない兒戯の如きものであるが、兎に角學問は學問である。眞理の探求である。それを國の興廢にも拘らず、一身の安危をも顧みず、一心不亂に研究して居つたと云ふことは、學者の本分として天晴高尚な事で、此精神は甚だ尊重すべきものであらうと思はれる。事情こそ大に違へ、現に慶應義塾が最初洋學の輸入に從事して、盛に新説の研究に勉めたる内に、戊辰の騒亂となり官軍が江戸に入込んで上野の戰爭か始まつた時に、泰然として米國新來のウエランド氏の經濟論を輸講して、毫しも騒ぐことなく、時々家根に上つて上野の方に砲煙の揚るのを見ては、又下りて書物を讀んで居つたと云ふことは、今日から追想すると實に天の斯文を滅ぼさざるの意に從うたと云ふべきて、全く研究心の盛なるに基いて居る。ナポレオンが歐羅巴

を蹂躙した時に、和蘭も亦滅ぼされ、本國は勿論、東洋の領地も皆敵の有に歸して、其の國旗は世界中に立つ處がなかつた、然るに日本長崎の出島に於ける和蘭屋敷、これには流石のナポレオンの手も及ばぬ。たつた一本此出島に立て居つて恰かも和蘭の命脈は此出島て擊がれたと云ふので、大に和蘭人が日本を德として居つたと云ふことがあるが、丁度維新の騒亂の際に、將さに絶えなんとした。新進文明の學問の命脈を繫いて、國運發展の基を開いたのが慶應義塾であると云ふことは、慶應義塾の歴史、否日本の歴史に特筆大書すべき事である。幕府の倒れるとは當時の最大事件であるが、それにも拘らず學問が依然として研究されて居つたと云ふとは、非常に面白い事實である。」

素より慶應義塾の如き、單に學者を作ると云ふことだけが決して目的ではない、種々の方向に向つて種々の人を供給して居る。又學問研究の精神も盛んであつて、これが爲に一生を當嵌めやうと云ふ人もあつたが、不幸

にして天死し、又新知識の人を求める世間の要求が烈しいために、學者も實業家になり、又は政治家になると云ふやうな事であつた。全體日本國中に眞の學者があるかと云ふと甚だ乏しい、乏しいと云ふより無いと云つて宜い。色々肩書の付いた看板丈けは學者らしい者はあるが、其人がどう云ふ大著述をしたか尋ねて見ると、殆ど絶無と謂つて宜い。眞に自分の腦髓から繰出して、夫の蜘蛛が巣を編む如き工合に、自分の腦髓から繰出した大著述と云ふものはまだ見えぬ。よく人は學問計り進んで、外の事が其割に進まぬなどゝ云ふがさうでない。未だ本當の學問の進歩と云ふものは見ることを得ないのである。

日本の學者で或る理論を持出して世界を聳動したと云ふ人も少なければ、大發明をしたと云ふ例もない。其が卽ち研究心の發揮しない證據である。此根據となる所の研究心が發揮せぬ以上は――學問は勿論其他百般の事も大に發展することが出來ない譯である。必ず政治の進んだ國、商賣の進んだ

國には、學問も同じく進歩して居る。寧ろ學問が其根據となつて起つて來たものである。學校はいろ〳〵の人を社會に向つて供給する、商賣人も政治家も供給しなければならぬが、又學者をも造らなければならぬ。しかし政府の學校に附隨する弊風は、此研究の自由を抑壓するの一事ではあるまいか。政府萬能主義に符合するものは如何なる愚論も及第し、之に反する者は如何なる名論も落第すると云ふ樣な事では、何の爲めの學問か丸て分らぬ。近頃世の中も多方面に發達して來て、商賣は商賣、政治は政治、學問は學問と、千種萬樣の方面に向つて働くが、其歸着する所は一つにならねばならぬ。例へば商賣に依つて大に富を作つた人は、又學問の研究に其幾分を割き與へると云ふやうにして學問が進み、學問が進めば事業も進むのである。學校なる者は、外に働く人、內に學ぶ人、種々なる方面の人々が共同する所の團體である。此團體は何を共同の目的として居るかと云へば、眞理を求むると云ふのである。卽ち諸方面の人々が、各自の本分を盡

しつゝある其結果は、自然に反射し來て、此學校の研究を進めて行くことに成らなければならぬ。則ち富を作つた人があれば、學校は其一部分を吸收して學問の研究に向ける、有形の富を化して無形の眞理とならしむる所の媒介所と成らなければならぬ。

一五　暗黑は恐怖を生ず

過日私が机の抽斗を片付けたとき、色々以前書いたものが出て來た。其中に今佛國留學中の林毅陸君がボリュー氏の露帝國及露國人といふ本を飜譯した時に、予に序文を書いて呉れといふから書いたが、其初め書いたのは少し氣に入らなかつたので、直に書き直した其の沒書にした方が出て來た。其沒書を今讀んで見ると却て其の方が宜かつたかと思ふ。それは何んなことを書いてあるかと云ふに、ロックと云ふ大哲學者が色々心理上の說を書いた中に斯んなことがある。暗黑――暗黑は何故に恐怖心を生するかと云

ふ問題を解いてある。其說に先づ普通の人の說では、暗黑と云ふことは即ちお化けといふものを聯想する。妖怪變化といふことを聯想する。暗い所からして向ふの邊に大入道でも出やしないかと、思ふと薄氣味が惡いものである。暗黑は御化けを想像するから怖い。小供の時に色々妙な話を聞いたのが、頭の中に殘ッて居つて、怖くなるのかも知れぬが、併し全く御化けの話を知らない人が暗黑を怖くないかといふに矢張り怖いようてある。左すれば何か此暗黑（ダークネス）と恐怖との間に、離る可らざる關係がある。それは一と足前に何にがあるか分らない、一と足踏み出すと千尋の谷底に落ちるかも知れぬ。或は敵が今か今かとばかりにピストルを以て俟ち構へて居るかも知れぬ。即ち暗みに鐵砲、一寸前きは暗黑の夜とか云ふ諺の通り、何う成る事か分らないから怖いと云ふ其聯想が本源に成つて、少し暗ければ少し怖く、大に暗ければ大に怖いのてある。是れは只空間の事てあるが時間の方に於ても矢張り未來が怖い、即ち一寸前が暗黑てある。こん

な所から人間に宗教心が生じて來るかと思はれる。是は純然たる心理學上の話であるが、之を今の國際上に當箝めて云ふと、最初外國人が日本に外交を迫つたときは、外國人を大に怖いものであると思つたが、追々彼我の國情に通じて見ると無暗に怖いことはない、只恐るべきを恐れ、恐るべからざるを恐れない樣になッて居るが、今日でも單り露西亞丈は之れを恐れる。所謂恐露病と云ふものが殘ッて居る、日本ばかりではなく彼の强大なる英國と雖も、一種の恐露病を抱いて實に露西亞のことを頭痛に病んで居る。日本人は殊に國境も接してあり、又双方の國土の大小を較べ且人口の多寡を較べて見ても、彼は國も大きく人口も多數である爲に恐れる事が甚しい。そこで林君が露西亞の事情に通曉したるボリュー氏の著書を飜譯して、其國狀を紹介したのは全く暗黑に一縷の光明を放ッたのであッて、是れ恐露病を治する良藥であるといふことを予は書いたのである。是れは露西亞に付いての話であるが、全體の人事に當箝めて見ても此理屈は矢張り通

用する。人間が世の中を渡るのに、大膽と臆病と此二ッは其の人の社會に於ける成功不成功の分れる路である。人は社會に出て成功するには、種々の要件を必要とするが、其中大膽といふことが一番大切である。然るに兎角引込み思案をして引込んで仕舞ふ。萬事此調子で居ると益々世の中が分らずに、世間不通の變人になつて終つて仕舞ふ。これを即ち臆怯者臆病人と云ふので、それは何んであるかと云ふに矢張り知らぬ分らぬ。無智無學イグノーランス即ち暗黑である。一ッ足を出すと何んな谷間に落ちるかも知れぬと云ふので臆病になッて來る。さて知識上の事は上述の如くである、又道德上のことに付ても亦た然り、道德思想の變遷進化する狀態を見て、無暗に之を恐怖し自己の心で唯一の道だと思込んだその狹隘な思想の外は一切暗黑である爲めに、非常な臆病に成ッて居るのは氣の毒に堪へぬ次第である。全く暗黑の爲めに恐怖心を生ずるものである。少しく東西古今の變遷の歷史を考へ、又內外の事實を比較して光線を此暗黑界に挿入れたな

らば、夫れ程恐怖すべきもので無いとが分る。尤も此儒教主義も人知の未開にして不忠不孝の充滿した昔の社會には必要であつたが、今日ではこれに滿足する譯には行かぬ。殊に亂臣賊子の輩出した春秋戰國の世に、孔孟の徒が之を絶叫したのは、皆時代の必要から起ッたのである。今日日本の必要は文明世界に乘出すべき國民の品性を作る道を講ぜねばならぬ。而して此儒教主義は東洋の專有て有と思ふは大なる間違である。西洋でも昔は矢張之と同樣の儒教主義が行はれたが、只儒教と云ふ名がない丈である、是れは古代の通有主義であるから古代主義と云つたら宜かろう、この主義が支那日本に限つたとてはない、社會發達の或る程度に於ては何國も同じやうな道德主義が行はれて居る。古代の羅馬ではパテリヤポステスタス即ち親權を以て道德上法律上最も重いものにしてある。所謂家族制度で家長の命に背く者は殺されても仕方がない。親は子を殺すと云ふ權を有つて居るといふことになると、羅馬人の方が支那人よりもえらい。即ち孝の敎に

於て羅馬は支那よりえらかッたと云ッて宜いのてある。尙之に先きだつて古代希臘に於てもアリストテレスは實驗學派、プラトーは全く反對の直覺學派であつても、矢張服從の外に道德上の敎がない、服從と云ふことが即ち道德である、正反對の兩派が德敎になると服從の一義に歸一して居ッたと云ふことは明白である。それから希臘の中には色々の小國があッて、君主國あり共和國ありその共和國の中にも寡人政治、貴族政治、庶民政治、富豪政治、曰く何曰く何と色々あるが、何れの政體でも社會の權力は無限てあッて、一人一家は全く無權力になつて居る。又一家の中では家長の權力が無限であつて、子弟たる者は全く之が爲めに占用されて居る。社會と一個人との關係。家族と一個人の關係も、同じく個人の權利は少しも認められて居らぬ。故に西洋も古代に在ては矢張り儒敎流に支配されたと云つても宜いが、近來の西洋各國の有樣は段々に變つて來た。今日ても國家社會主義などを頻に唱へて居る國もあるが、事實に於ては個人の私權を重じ、

社會は人民個々の權利を貴び、家族に於ては子女の權利を大切にすることに成つて居る。先づ英米兩國の如きは個人權の強いことは誰も知つて居ることであるが、獨逸、佛蘭西などは所謂國家主義であるが故に、社會の權力が大に強い又家族に於ても決して英米の如く子女の權力が張られて居らぬ。しかし日本などと較ぶれば、非常に子女の權利が強くなつて居つて國家も甚だ父母に對して子女の權利を保護する事に成て居る。假に一例を擧げて之を云へば、予が巴里の警視廳を參觀に行つたことがある。其警視廳に怪げなる婦人が大勢控へてる所があつた。これは醜業婦の鑑札もらいである。彼の醜業婦が鑑札を貰ひに行くと警視廳の役人は一々其者に向つて質問する。其方は何故に斯る淺ましい業を營むのであるか。それは御飯が食べられぬからだと答へる。役人はそんな不了見思止りて正業に就け、工女なり下女奉公なりするがよいと懇々說諭する、所が女共は大抵下女の如き下等な事は出來ませんと云ような調子で聞入れぬから大抵鑑札を渡す。

ついぞ此懇々の御說諭が効を奏した事はない、先づ御役目御苦勞の儀式であるが、茲に一つどうしても鑑札を與へられぬものがある。それは何であるかと云ふと、親の爲に身を賣る場合である。親から强られて醜業に陷らんとする者があつたならば、決して鑑札を與へない。亂暴な親は娘に醜業をさせて酒を飲まうとする者があるかも知れぬ。又中には殊勝な娘は親の病氣を癒すが爲に、身を苦界に沈めやうとする者も、日本流に云へばあるかも知れぬが、之に向つては決して鑑札を與へない。佛蘭西の政治主義に於て、强者に對する弱者の權利、殊に父母に對する子女の權利を保護しなければならぬと云ふ事に成つて居る。親權主義の羅馬人の血を受けたる佛國でさへ此の如くに今日では子女の權利を尊重して居る。これが即ち道德思想の進化變遷に依るのである。その事の善惡邪正は扨置き、古今の相違は大變な者と云ねばならぬ、日本では今日でも某の娘は親の爲に身を賣つたと云ふと大に感心な者であると賞讃する。又中には親が亂暴で酒を飲ん

で仕方がない、遂に娘を賣つて又酒を飲むと云ふことがあると、親父の亂暴は憎むべきだが、其亂暴な無慈悲な親に對して孝を盡し身を苦界に沈めるとは實に優しい感心な心立だと賞める。正當な孝行は益々勤めなければならぬが、此の如き謬れる孝行は禁せねばならぬ。文明社會に必要なる德義が多くあるに、只古來の教義にのみ拘泥して、健全なる新思想の湧出をも恐ろしく感ずる臆病者は、全く見聞が狹くして古今東西の思想の變遷を究めず、井蛙の管見を以て事物を判斷し、無學文盲の暗黑の爲めに恐怖心を生ずるのであるから、之を治するには知識の光明を與ふるの外はない。故に今少しく眼界を廣くして教育の方針を改め、忌々しき僞善の惡風を打破り、親子の間に眞純の親愛を喚起して、家庭團欒の眞快樂をこそ望ましいのである。兎に角彼の固陋偏狹なる思想を一掃しなければ、忠孝そのもの迄がその眞相を蔽はれ、忠孝の美名の下に隱れて惡事を行ふ、所謂僞孝僞忠の醜狀に陷らん。故に我々は大に我々の主義を主張し、思想界の暗黑を

照らし、偏狹なる誤想を排し、我々の本分を盡さなければならぬ。

一六　歷史に於ける偉人の地位

人類史上の事は凡て偉人の働に因て起ると云ふ考を持つて居る人と、又全く之に反對して、偉人なる者は既に社會の歷史が生じた結果である、決して英雄人傑が此社會を造り、歷史を作るものでないと考へる人と二つの流派がある。前說は普通世人の持つて居る考で、殊に古風の人程その流義である。彼の安石出でずんば蒼生を如何せんと云ふ簡單な思想より、トーマスカーライルの所謂人類の歷史は結局偉人活動の歷史なり、滔々たる凡俗は蟊賊として唯大人の足跡を蹈むのみと云ふが如き斷論に至るまで、皆此の部類に屬するのである。殊に古流學者の如きは社會進步の道理を知ずして個人の創意に出でたものと見る。太古の事を云へば、燧人氏始て人に火食を敎へ、伏羲氏書契を造りて結繩の政に代へ、又嫁娶の制を設く、神農

氏木を斷りて耒耜を作り始て耕作を敎へ又百草を嘗めて醫藥を作り、又市を作りて交易する事を敎ふと云ふ。これ等の口碑は何れの野蠻人にもある事であるが、近頃人類學社會學の研究が進むに隨て、全く無稽の言たる事が證明された。決して個々の偉人に依て製造されるものでなく全體の進歩に依るものである。

そこで後世の事も英雄豪傑又は政府の法令で動くものではないと云ふ說が大に力を得て、歷史に就ても新しい學問をした人々は段々此偉人說から遠ざかつて居る。殊に進化主義の社會學的思想を抱く人の眼に映する所の人間社會は、種々樣々の原因が集合して進步發達して行くのである。其國の風土氣候より國民一般の氣質、知識、其他大小の事情が働いて其國運を進退するもので、決して只偉人英傑若くは爲政者の經營を以て成し能ふべきものでない。然るに從來の歷史は全くの偉人的歷史で、唯帝王將軍偉人豪傑の働を述ぶる計り、社會人民全體の働が少しも此歷史の上に顯れて居ら

ぬ、丸で人名傳記の行列の如きもの計りで、歷代國民の生計の度合はどの位であつたか、又國民全體の智識はどの位であつたか、又衞生の思想はどの位であつたか、其他美術建築及び風俗習慣に至ては、所謂從來の歷史では一向に解らぬ。若し解かる事ありとするも極々偶然の獲物に過ぎぬ。例へば大閤樣の御飯のおかずは干物と豆腐汁だと云へば、社會一般の生活の度も定めて低くかつたろう、或は東軍八十萬の中に綸旨を讀み得た者は僅かに一人しか無かつたと云へば、社會全體の智識の程度は定めて低くかつたろう位の事で、それ以上國民全體の運動も程度も知る事は出來ぬ。進化主義の論者は決して英傑偉人の働に依て社會の運命を決すると云ふ事は無いと云ふ。成程偉人の働で大なる結果を生ずる事もあるが、夫は其社會の程度其人民の氣風に叶はずして斯る結果を結ぶ事は古來無い。ナポレオンは非常な豪傑であつても、佛蘭西に尙武の氣が盛んで無かつたならば、あんな豪い戰爭は出來ない。又ワットが蒸氣船を造り、スチーブソンが鐵道

を造つたと云ふも、英國に製鐵の術が進まずして、僅か小さなフィゴを足の先きでやつてる樣な鍛冶屋の世の中であつたならば、とても駄目な事である。ニユートンは亞弗利加の沙漠からは出ないと云ふ。之は素より大に道理ある說であるが、是も餘り極端に走ると、大に眞理と離れて來る恐れがある。何とならば往々此流の學者中には全然社會の定則を誤認して、大學者でも大政治家でも其仕事は其社會が成さしめた者で在と云ふ、英雄豪傑の働を全く否定する人がある。此大人豪傑と云ふ者は三文の値も無ものであると云ふ樣に解釋するものがある。或る學說に依ると、此社會の偉人と云ふ者は丁度高い山の樣なものである、此豪い人が起つて古人未發の事を考へ出して、夫から世人一般に及ぶのは恰も山の頂に朝日が當つて、夫から次第〳〵に平地にも及んで來る、是は山が朝日を呼び出したのではない、唯高いから先きに當つたので、卅分か一時間も俟てば平地でも同樣に日は當たるのである。夫と同じく英雄（グレートマン）とか大學者とか云ふ人が新に大發明

をしたのではない、脊が高かつたから、日が先きに早く當つたのである。例へばニユートンが出て重力の定則を發見した、是に依て天文學も解つて來れば、物理學も確立して來たのである。併し此大發明家ニユートンが無くつても早晩解かるのである、唯ニユートンが脊が高かつたから先きに解かつたのである、天から降て來る雨でも脊の高い人の頭には早くから明る樣なものであると云ふが是は實に穩かならぬ說である。ニユートンの如き大豪傑が出なくとも此天則は分つたものと假定しても、矢張幾人かの碩學の發明を經て漸く百人目か二百人目かで本當の事が解ると云ふ樣になつたかも知れない、斯の如く偉人の功業を否定するに至ては結局宿命說に陷るかも知れぬ。此宿命思想から見れば世の中は定まつた所の運命に到着するもので、必しも英雄とか豪傑とか云ふものが起らなくとも、遂に其達すべき所に達するものである、運は天にあり、牡丹餅は棚にあり、運を天に任せて置けば、社會は進む所に進み、退く所に退くのであるから、除計な事